

武蔵国分寺跡発掘調査概報

X

——北方地区・リオン株式会社本館等建設に伴う調査——

1987年3月

国分寺市遺跡調査会
国分寺市教育委員会

序 文

昭和49年に始まる武蔵国分寺跡の恒常的な調査は、寺域の確定を主目標とする第1期調査を昭和60年度に終了することができましたが、今年度からは第1期調査を行ってきた武蔵国分寺遺跡調査会が惣ヶ窪遺跡調査会と一体化され、新たに国分寺市遺跡調査会として再出発するとともに、武蔵国分寺跡の調査も将来の史跡整備に向けて、主要遺構の確認を主目標とする第2期調査に移行することになりました。

第1期調査の成果については、昨年11月に刊行されました『国分寺市史（上巻）』の中にその概要がまとめられておりますが、とくに僧・尼両寺域および寺地に数次の変遷があったことや、僧・尼両寺の周辺東西1.5km、南北1.0kmの範囲に堅穴住居等が分布することなどが明らかになったことは、国分寺の都市計画の一端を示すものとして注目すべき成果であり、今日の国分寺研究に貴重な資料を提供するものと思われます。

また、国分寺市においては、このたび21世紀に向けての市の総合的・計画的な街作りの指針となる基本構想がまとまり、昭和62年度から長期総合計画がスタートすることになりましたが、国分寺市の理想とする将来像「健康で文化的な都市」を構成する四つの柱の一つに「国分寺の名にふさわしい歴史のまち」があげられており、その中心をなす武蔵国分寺跡の保存・活用が調査成果をふまえた長期的な計画のもとに推進されることになったことは、関係者の一人として喜びにたえません。

さて、今回の発掘調査は武蔵国分寺跡北方に位置するリオン株式会社の本館を含む諸施設の建設に伴う事前調査でありましたが、ことに現地調査は調査経過にありますように誠に条件が厳しいものでありました。しかしながら、リオン株式会社の全面的な協力と滝口宏団長以下調査団の方々の献身的な努力によってこれを克服することができ、ここに調査の成果をまとめた本報告書を刊行することができました。

本書が、学術研究資料としての活用のみならず、広く一般市民の埋蔵文化財に対する理解を一層深めるための一助ともなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、リオン株式会社および調査団、そして国分寺市教育委員会の方々のご尽力とご厚情に対しまして、心よりお礼申し上げる次第であります。

昭和62年3月

国分寺市遺跡調査会

会長 星野 亮勝

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において昭和48年以来実施されている調査の内、リオン株式会社本館等建設に伴う調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は、国分寺市東元町3-20-41に所在し、全面積1597㎡である。
3. 発掘より報告書作成に至る調査に係る費用はリオン株式会社が負担した。昭和59年6月22日及び同年9月1日付にて締結した委託契約に基づき、武蔵国分寺遺跡調査会が事業を実施し、昭和61年4月1日以降は国分寺市遺跡調査会に継承して事業を完遂した。
4. 現地における調査は、昭和59年6月26日より同年10月31日まで行い、報告書作成作業は、昭和62年3月31日まで国分寺市遺跡調査会事務所で行った。
なお、本調査は第200次調査として実施されたものである。
5. 発掘調査は三木 弘が担当し、有吉重蔵・福田信夫・上村昌男がこれをたすけた。
6. 本書の執筆・編集は、滝口 宏団長をはじめ永峯光一・坂詰秀一・大川 清各委員の助言援助のもとに、三木 弘が担当し、福田信夫(1)・実川順一(2)が分担した。
7. 出土遺物の整理の内、実測・トレース・写真撮影は三木 弘・大沢華子・小峰ミヨ子・斎藤さだ子が主に行った。遺物図面・図版、遺構図面・図版の作成、清書は、下記の全員があたった。
8. 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。(敬称略)

安孫子昭二・伊藤富士夫・岡崎完樹・小林信一・谷口康浩・富樫雅彦・西脇俊郎・早川泉

9. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記のとおりである。記して感謝いたします。(敬称略)

発掘作業・現地事務

相原和樹・秋池勝利・浅井健司・井口正利・池田篤美・池村憲治・石井猛・石原剛・宇佐美均
・大元進太郎・川島寿則・小林治男・近藤秀樹・酒井隆・佐々木正和・関道雄・田中祥介・土屋千年・寺田青史・寺西成人・難波龍伯・林敦・林伸昭・正木寿・増田政之助・茂木透・森田聡・山下賢二郎・吉村哲也・渡辺一美・渡部昌二・小林みや子

リオン株式会社・株式会社大林組

整理作業

大沢華子・岡ミサオ・小峰ミヨ子・斎藤さだ子・鈴木洋子・永沢昭子

凡 例

本文

1. 遺構は、各遺構ごとにはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。

本文中に於いては、「S I 323住居跡」・「SK 846土坑」の様記述した。

SA 欄跡・柱穴列	SE 井戸跡	SX 特殊遺構
SB 掘立柱建物跡・礎石建物跡	SI 住居跡・工房跡	P 小穴
SD 溝跡・溝状遺構	SK 土坑・瓦溜め	

2. 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」(1972『考古学雑誌』58巻2号所収)での名称によった。
3. 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置にした凹面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。

図面・図版

1. 遺構

- ①遺構配置図表示の数字は、発掘基準中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7°08'03"、磁北から0°38'03"それぞれ西偏する。
- ②断面図表示の数字は水糸レベルで、海拔高を示す。
- ③スクリーントーンの指示は次のとおりである。



- ④住居平面図に於いて、一点鎖線は床面が堅固な範囲を示す。
- ⑤遺物分布図に於ける記号は次のとおりである。

▲(土師器坏・坑) △(土師器甕他) ●(須恵器坏・坑)
○(須恵器甕他) ■(施軸陶器) □(瓦埴類) ×(鉄・石製品他)

なお、図中の数字は、遺物番号(次項②参照)を示す。

- ⑥縮尺は次のとおり統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図1/250、住居跡・土坑他1/50、溝跡1/100、カマド他1/25

2. 遺物

①土器類に於けるスクリーントーンの指示は次のとおりである。



②写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば、「20-4」とあれば、「図面20-4」のことを指す。

③縮尺は次のとおり統一した。

図面 鉄・石製品1/2、土器類1/3、瓦1/4、縄文土器・石器1/3（小形石器2/3）

図版 鉄・石製品1/1、土器類1/2、瓦1/4、縄文土器・石器1/2（小形石器1/1）

本文目次

序	
例言	
凡例	
I 調査に至る経過	1
II 調査地区の概観	7
1. 調査地区の位置・立地	
2. 層序	
III 発掘経過	11
IV 歴史時代	16
1. 検出遺構	
(1) A地区	
(2) B地区	
(3) D地区	
2. 出土遺物	
3. 小結	
V 縄文時代	44
1. 検出遺構	
2. 遺物包含層の発掘	
3. 出土遺物	
VI 先土器時代	74
1. 出土遺物	
2. 集中分布	
3. 小結	
VII 結語	78

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1/25000)	5
第2図 調査地区の位置 (1/5000)	6
第3図 調査区位置図 (1/2500)	8

第4図	標準層序(1).....	9
第5図	標準層序(2).....	10
第6図	発掘調査深度図.....	15
第7図	掘立柱建物跡分布図 (1/9000)	43
第8図	B地区縄文時代遺物出土分布図 (1/160)	51
第9図	D地区3区縄文時代遺物出土分布 (1/40)	53

表目次

第1表	検出遺構一覧表.....	13
第2表	調査工程表.....	14
第3表	集石構成礫属性表.....	46
第4表	集石構成礫大きさ別点数.....	46
第5表	集石構成礫重量別点数.....	46
第6表	縄文時代出土土器一覧表.....	56
第7表	先土器時代石器一覧表.....	77

図面目次

図面1	A地区歴史時代遺構配置図 (1/250)
図面2	B・C・D地区歴史時代遺構配置図 (1/250)
図面3	S I 329住居跡実測図
図面4	S I 329住居跡実測図
図面5	S I 329住居跡実測図
図面6	S I 329住居跡実測図
図面7	S B 79掘立柱建物跡実測図
図面8	S B 81掘立柱建物跡実測図
図面9	S B 82・83掘立柱建物跡実測図
図面10	S D 186溝跡、A地区歴史時代土坑実測図
図面11	A地区歴史時代土坑実測図
図面12	S I 323住居跡実測図
図面13	B地区S X 36・37不明遺構、遺物集中地点、D地区2区歴史時代土坑実測図
図面14	S I 329住居跡出土遺物
図面15	S I 329住居跡出土遺物

- 図面16 S B81・83掘立柱建物跡、S K836土坑、P57小穴、A地区遺構外出土遺物
- 図面17 A地区遺構外出土遺物
- 図面18 A地区遺構外出土遺物
- 図面19 S I 323住居跡出土遺物
- 図面20 S I 323住居跡、B地区遺構外出土遺物
- 図面21 A地区縄文時代遺構配置図（1/250）
- 図面22 B・D地区縄文時代遺構配置図（1/250）
- 図面23 A地区S X 38竪穴状遺構実測図
- 図面24 S S 27・28・29集石実測図
- 図面25 縄文時代土坑実測図
- 図面26 縄文土器(1)
- 図面27 縄文土器(2)
- 図面28 縄文土器(3)
- 図面29 縄文土器(4)
- 図面30 縄文土器(5)
- 図面31 縄文土器(6)
- 図面32 縄文時代石器(1)
- 図面33 縄文時代石器(2)
- 図面34 縄文時代石器(3)
- 図面35 縄文時代石器(4)
- 図面36 縄文時代石器(5)
- 図面37 先土器時代石器分布図
- 図面38 先土器時代石器(1)
- 図面39 先土器時代石器(2)

図版目次

- | | | |
|------|------------|-------------------|
| 図版 1 | A地区調査区 | 1. 掘立柱建物跡、住居跡 |
| 図版 2 | S I 329住居跡 | 1. 全景（南から） |
| | | 2. 構築時全景（東から） |
| 図版 3 | S I 329住居跡 | 1. 遺物出土状態（南から） |
| | | 2. 遺物出土状態（東から） |
| | | 3. カマド遺物出土状態（南から） |

- 図版4 S I 329住居跡
1. カマド構築時全景 (南から)
 2. 南北土層断面 (東から)
 3. 東西土層断面 (南から)
- 図版5 S B 79掘立柱建物跡
1. 検出時全景 (北から)
 2. 完掘時全景 (北から)
 3. 完掘時全景 (西から)
- 図版6 S B 79掘立柱建物跡
1. 1-1 柱穴土層断面 (西から)
 2. 2-1 柱穴土層断面 (南から)
 3. 3-3 柱穴土層断面 (北から)
 4. 4-1 柱穴土層断面 (南から)
 5. 4-2 柱穴土層断面 (北から)
 6. 4-3 柱穴土層断面 (北から)
- 図版7 S B 81掘立柱建物跡
1. 検出時全景 (北から)
 2. 完掘時全景 (北から)
 3. 完掘時全景 (東から)
- 図版8 S B 81掘立柱建物跡
1. 1-1 柱穴土層断面 (西から)
 2. 2-1 柱穴土層断面 (東から)
 3. 2-3 柱穴土層断面 (北から)
 4. 3-1 柱穴土層断面 (南から)
 5. 3-3 柱穴土層断面 (北から)
 6. 4-2 柱穴土層断面 (北から)
- 図版9 S B 82掘立柱建物跡
1. 検出時全景 (東から)
 2. 検出時全景 (南から)
 3. 完掘時全景 (南から)
- 図版10 S B 82掘立柱建物跡
1. 1-1 柱穴土層断面 (南から)
 2. 1-3 柱穴土層断面 (東から)
 3. 2-1 柱穴土層断面 (北から)
 4. 3-1 柱穴土層断面 (東から)
 5. 3-3 柱穴土層断面 (北から)
- 図版11 S B 83掘立柱建物跡
1. 検出時全景 (北から)
 2. 完掘時全景 (北から)
 3. 1-2 柱穴土層断面 (西から)

4. 2-1柱穴土層断面(東から)
- 図版12 SD186溝跡、SK827・828・829土坑 1. SD186溝跡全景(西から)
2. SD186溝跡遠景(南から)
3. SK827・828・829土坑全景(北西から)
- 図版13 SK830・831土坑 1. SK830土坑東西土層断面(北から)
2. SK830土坑全景(北から)
3. SK831土坑東西・南北土層断面(南西から)
- 図版14 SK833・836土坑 1. SK833土坑全景(西から)
2. SK836土坑東西土層断面(北から)
3. SK836土坑全景(北から)
- 図版15 SK837・835・839土坑 1. SK837土坑全景(南から)
2. SK835土坑南北土層断面(西から)
3. SK839土坑南北土層断面(西から)
- 図版16 SK844・845・846土坑 1. SK844土坑全景(東から)
2. SK845土坑南北土層断面(東から)
3. SK846土坑南北土層断面(東から)
- 図版17 SK845・846・847土坑 1. SK847土坑南北土層断面(東から)
2. SK845・846・847土坑全景(南から)
3. SK845・846・847土坑全景(西から)
- 図版18 SK848・849・850土坑 1. SK848土坑全景(南から)
2. SK849土坑全景(西から)
3. SK850土坑全景(南から)
- 図版19 B地区調査区 1. 遺構検出時全景(南から)
2. 調査終了時全景(南から)
3. 調査終了時北側全景(南から)
- 図版20 SI323住居跡 1. 検出時全景(西から)
2. カマド上方遺物出土状態(東から)
- 図版21 SX35・36不明遺構 1. SX35不明遺構東西土層断面(北から)
2. SX36不明遺構検出時全景(南東から)
3. SX36不明遺構検出時全景(北から)
- 図版22 B地区遺物集中地点、C地区 1. 遺物出土状態全景(西から)
2. 坏出土状態(南東から)

3. C地区遺構検出時全景（西から）

- 図版23 S I 329住居跡出土遺物
- 図版24 S I 329住居跡出土遺物
- 図版25 S I 329住居跡、S B 83・81獨立柱建物跡、S K 836土坑、P 57小穴、A地区遺構外出土遺物
- 図版26 A地区遺構外出土遺物
- 図版27 A地区遺構外出土遺物
- 図版28 S I 323住居跡出土遺物
- 図版29 S I 323住居跡、B地区遺構外出土遺物
- 図版30 S X 38竪穴状遺構
1. 全景（北から）
 2. 全景（東から）
 3. 遺物出土状態（東から）
- 図版31 S X 38竪穴状遺構
1. 南北土層断面（東から）
 2. 東西土層断面（北から）
 3. B' - E小穴東西土層断面（北から）
 4. F' - F小穴南北土層断面（東から）
- 図版32 S S 27・28集石
1. S S 27集石全景（南から）
 2. S S 28集石全景（北から）
 3. S S 28集石下土坑全景（南東から）
- 図版33 S S 29集石
1. S S 29集石全景（西から）
 2. S S 29集石下土坑全景（北から）
 3. S S 29集石下土坑南北土層断面（東から）
- 図版34 S K 852・855・856土坑
1. S K 852土坑南北土層断面（東から）
 2. S K 855土坑全景（北から）
 3. S K 856土坑全景（北から）
- 図版35 S K 813・815・816土坑
1. S K 813土坑東西土層断面（北から）
 2. S K 815土坑全景（南から）
 3. S K 816土坑全景（東から）
- 図版36 A地区、B地区
1. A地区縄文時代調査終了時全景（西より）
 2. A地区縄文時代調査終了時全景（東より）
 3. B地区縄文時代調査終了時全景（南より）
- 図版37 B地区、D地区3区
1. B地区縄文時代遺物出土状態（南から）

図版38 A地区先土器時代

図版39 A地区先土器時代

図版40 縄文土器(1)

図版41 縄文土器(2)

図版42 縄文土器(3)

図版43 縄文土器(4)

図版44 縄文土器(5)

図版45 縄文土器(6)

図版46 縄文時代石器(1)

図版47 縄文時代石器(2)

図版48 縄文時代石器(3)

図版49 縄文時代石器(4)

図版50 縄文時代石器(5)

図版51 縄文時代石器(6)

図版52 先土器時代石器

2. D地区3区縄文時代遺物出土状態(西から)

3. D地区3区縄文時代遺物出土状態(南から)

1. 石器出土状態(北から)

2. 石器出土状態(東から)

3. 石器出土状態(北西から)

1. 調査完了時全景(北から)

2. 調査区東西土層断面(北から)

3. 調査区南北土層断面(西から)

I 調査に至る経過

リオン株式会社（社長三澤泰太郎、国分寺市東元町3-20-41）より昭和59年3月1日付国教文取第64号にて、東元町3丁目2447番地外（同社敷地 24,558㎡）に、本館等を建設したい旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛届出が市教委を経由してなされた。工事計画は、掘削全面積1810.3㎡、木館1100㎡（5階建・杭打ち基礎・A地区）、隣接して守衛室72㎡（C地区）、離れて無警室219㎡・振動実験室95㎡・機械室23㎡（B地区）、その他受水槽置場等259.3㎡と排水管理施設工事42㎡（追加届出・推進工法・立坑4箇所・延長190m・D地区）で、昭和59年5月中旬着手、昭和60年1月末完了予定とのことであった。

当該地区においては、敷地北西隅の同社厚生会館建設に伴って、昭和49年10月に調査が行われ、縄文時代土坑1と歴史時代住居跡7・土坑4などが発見されているほか、周辺における状況より、分布密度はやや薄いものの先土器・縄文と歴史時代遺跡が複合しているものと考えられた。そこで、不確定要素を取り除くための予備調査を地区毎に行った上で、工事設計の変更（位置・工法・掘削深度等）を可能な限り行い、遺構の保存を計るものとし、工事による掘削の及ぶ範囲（若干の影響範囲を含める）を対象に発掘調査を実施する方向で協議を進めた。なお、受水槽置場等の簡易工事については立合いのもとに行うこととした。

次表に示すように東京都の指導を仰ぎながら、17回に及ぶ協議が行われた。調査期間の短縮と遺跡の保護との調整に多くの時間と英知が傾注され、成案を得て事業が進められた。本館については当初位置より遺構の少ない北側へ6m変更したほか、床のレベルを上げ、地中梁部分を歴史時代遺構検出面（縄文時代包含層）の上（実際には6cmの砂が間層に入り、東端では傾斜地の為さらに間層が入る）にのせ、縄文については杭打ち部分、先土器についてはエレベーター部のみの調査にとどめた。無警室東半については、ベタ基礎工法に変更した上、かさ上げし、掘削底（縄文時代遺物包含層の途中）までの調査とした。守衛室、振動実験室等は、30cmほどかさ上げし、砂・良質土で遺構面を覆うこととした（歴史時代遺構確認調査まで実施）。以上建設された建物の下には、未調査の埋蔵文化財が包蔵されているわけであるから、今後建て替え工事の際には調査の要あることはいうまでもない。

本館地区の調査においては、10月末完了の再三にわたる要望があり、結果的にこれを受け入れる形となり、当初自動的延長が口頭了解された雨天日にも調査を行わざるを得なかった。期間の短縮の為には、補助員の増強・人夫の増強、ベルコン投入、作業時間の延長等のあらゆる方策を行った。只し、調査員の増強の為に、都文化課に職員派遣依頼をしたが、受け入れられなかった。今次調査における様々な経験が今後に生かされることを強く要望しておきたい。

日 付	種 別	A地区(本館)	C地区(守衛室)	B地区(無響室)	D地区(排水管地区)	
1 59. 3/1	届出①	全館前面積1810.3㎡、5月中旬着手予定				
2 3/8 調	協議①	工事概要を伺い、文化財につき説明、理解求む				
3 3/12 (9)	協議②	工事詳細計画を伺い、調査対象を協議				
4 3/13~3/14	試験①	試験調査に先立ち順序確認のためのテストビット				
5 3/14 (9)	協議③	工事詳細計画を伺い、取扱いにつき再度説明				
6 3/16 (9)	協議④	試験調査につき船舶打ち合わせ				
7 3/23~4/28	試験②	133㎡、住4、調2、土47、P136他2、調文住1、土2、P5				
8 4/27 調	協議⑤	調査計画作成にあたっての基本条件を提示				
9 5/8 (9)	協議⑥	試験調査報告、設計変更要請し、調査対象協議				
10 5/29 (9)	協議⑦	調査計画書提示、現況調査体制につき説明				
11 5/31 調	協議⑧	調査につき申入れ、工事の早期完了の必要性を伺う				
12 6/5 調	協議⑨	6/1付文化財課長宛「埋蔵文化財調査について」 (お願い)とする文書につき説明伺う				
		10月末調査完了を要請		8月末完了を要請		
		設計変更等期間短縮の方策を提示、可能な地区から 調査着手、現地事務所を設置等決定				
13 6/12 (9)	協議⑩	設計変更につき協議、調査対象を煮つめる				
14 6/18 (9)	協議⑪	調査計画提示合意				
15 6/22	契約①	37日、6,704,000円				
16 6/22~8/31	調査①	445㎡、住層跡1件か 6/2~8/31 48日間 土曜日調査実施				立抜4ヶ所42㎡
17 7/13	届出②					取扱い説明
18 7/16	協議⑫					住居格納出
19 7/17~7/24	試験③					調査計画提示・合意
20 7/19~7/27	試験④	北側と未掘部分				22日、557,000円
21 8/2	協議⑬					3地区、38㎡、土坑2件か 6日間
22 8/2	契約②					
23 8/10~9/8	調査②					
24 8/17 (9)	協議⑭	試験報告し調査計画提示				
25 8/24		市教委宛に「埋蔵文化財調査について」 (お願い)とする文書提出される。 (10月末調査完了を強く要請)				
26 8/27 (9)	協議⑮	設計変更につき協議				
27 9/1 (9)	協議⑯	調査計画修正案提示・合意				
28 9/1	契約③	実働48日、5,515,000円				
29 9/3~11/5	調査③	1514㎡掘立柱建物跡4ほか 51日間土曜日、祝祭日、雨天日調査実施 器材搬取のみ11/5まで延長				
30 12/12	協議⑰	進捗・報告書作成計画提示、合意(出土品コンテナ24箱)				
31 60. 4/1	契約④	480日間 6,331,000円 期間の余裕とり2ヶ年で実施				
32 4/1~62. 3/31	調査④	室内整理・報告書作成				

(9)はリオン轉会屋、調は調査会事務所

調査に至る経緯(概略進行図表)

【旧調査体制】

武蔵国分寺遺跡調査会組織

(昭和59年7月～昭和61年3月)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
"	大 島 外 治	国分寺市教育委員会委員長
組 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 浩 秀 一	立正大学教授
"	本 多 良 雄	国分寺市長
"	長谷川 聰二郎	国分寺市助役
"	興 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
"	永 井 佳 雄	東京都教育庁文化課副主幹
"	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会副議長
"	佐 藤 敏 也	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松 井 新 一	"
"	吉 田 格	"
"	藤 間 恭 助	"
監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
"	山 田 弘	国分寺市教育委員会社会教育課長 (S.59.10.就任、 S.60.10.以降部長兼任)
"	清 水 武	" (S.59.9 退任)
事 務 局 長	関 口 雄 基 臣	国分寺市教育委員会教育次長 (S.60.10二部制施行に伴い退任)
"	山 田 弘	国分寺市教育委員会社会教育部長 (S.60.10二部制施行に伴い退任)
事 務 局 長 補 佐	大 井 川 武 彦	東京都教育庁文化課埋蔵文化財係長
"	安 田 暉	国分寺市教育委員会文化財課長 (S.60.10.7 退任)
"	関 口 信 良	" (S.60.10.7 就任)
事 務 局 員	田 倉 武 市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

調 査 団

調 査 団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
調 査 副 団 長	永 峯 光 一	" 委員
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 浩 秀 一	立正大学教授
調 査 員	有 吉 重 藏	国分寺市教育委員会文化財保護係員
"	福 田 信 夫	"
"	上 村 昌 男	"
"	三 木 弘	国学院大学大学院

【新調査体制】

国分寺市遺跡調査会組織

(昭和61年4月発足～現在)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
理 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
"	坂 浩 秀 一	"
"	大 川 清	国士館大学教授
"	本 多 良 雄	国分寺市長
"	内 野 高 治	国分寺市教育委員会委員長
"	興 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
"	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会議長
"	藤 間 恭 助	国分寺市文化財保護審議会委員
"	佐 藤 敏 也	"
"	松 井 新 一	"
"	吉 田 格	"
"	永 井 佳 雄	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
"	山 田 弘	国分寺市教育委員会社会教育部長
監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
"	高 津 喜 三 郎	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

委 員 長	滝 口 宏	(考 古)
委 員	永 峯 光 一	(")
"	坂 浩 秀 一	(")
"	大 川 清	(")

事 務 局

事 務 局 長	関 口 信 良	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
事 務 局 員	田 倉 武 市	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係員

調 査 団

調 査 団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
主 任 調 査 員	有 吉 重 蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
	福 田 信 夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員
"	広 瀬 昭 弘	"
"	上 村 昌 男	"
"	実 川 順 一	"



恋ヶ窪飛寺跡

園本位置

尼寺

武蔵国分寺跡

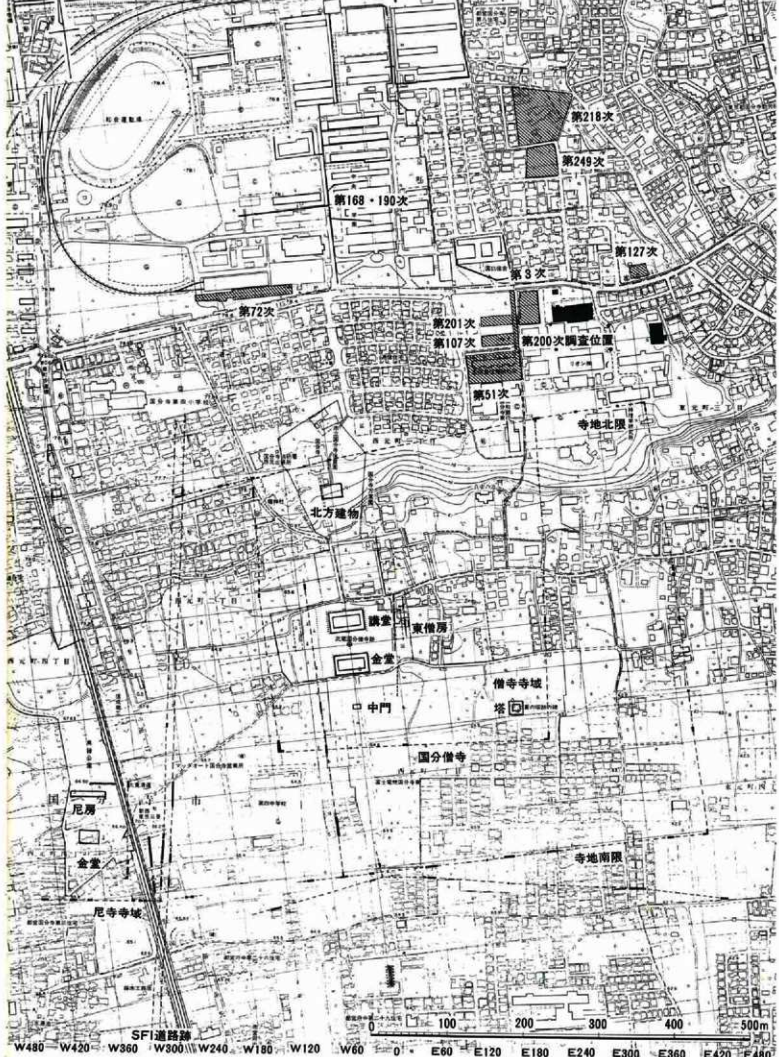
府

武蔵国府推定地

東大競馬場

500m 0 500 1000 1500
縮尺 1 : 25,000

第1図 遺跡の位置



第2図 調査地区の位置

Ⅱ 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地

本調査地区は国分寺市東元町3-20-41に所在する。北側には国道145号国分寺・国立線が東西方向に走り、C地区はそれとほぼ接し、またA地区は100m、B地区は500mほど南に入る。僧寺中軸線より東へ316~362m、北へ349~435mにある。海拔標高は約75mで、武蔵野段丘上に立地している。

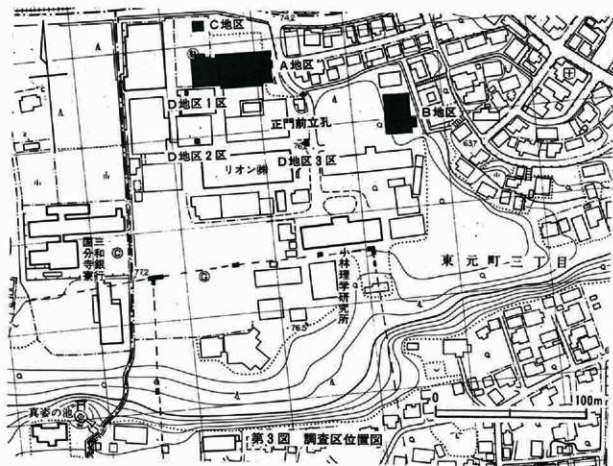
武蔵国分寺跡は僧寺金堂を中心として、東西2.0km、南北1.5kmほどの範囲で遺構の分布が認められる。すなわち、現行政区域の国分寺市西元町1~4丁目を中心とし、南方域は府中市にまで達している。僧・尼寺の主要遺構は武蔵野段丘の下位にある立川段丘上に位置するが、僧寺々域を区画する溝跡は武蔵野段丘上にまで延びている。このように遺跡の範囲は、蛇行しながら東西方向に延びる比高約12mの段丘崖（国分寺崖線、通称ハケ）を越えて、两段丘上にまたがっている。

本調査地区の東側200mでは、国分寺崖線を北西から南東方向に切り込んだ野川による開折谷（恋ヶ窪谷）が60mの幅をもって走行し、武蔵野段丘を分断している。この恋ヶ窪谷と国分寺崖線により舌状に突出した丘陵の南東端に所在するものである。また国分寺崖線や恋ヶ窪谷の下辺部に沿って湧水が点在している。本調査地区附近にも、真姿弁財天を祭る真姿の池をはじめ、6ヶ所の湧水地点が確認されている。

本調査地区の地形は、A地区にあっては西半ではほぼ平坦であるが、東半では東側に向かう緩斜面となっている。これはA地区東側に恋ヶ窪谷の崖面が西方向に延びて小さな谷を形成しているためである。またB地区においては、恋ヶ窪谷に向かって西側から東側へ著しく傾斜している。こうした傾斜の度合は、現地表面だけでなく、歴史時代遺構検出面や縄文時代遺構検出面においても同様に認められた。

周辺における主たる調査を挙げると、第3次調査（リオン厚生会館建設地）、第51次調査（KD D社員寮建設地）、第72次調査（国鉄中央鉄道学園新幹線研修庫建設地）、第107次調査（佐藤国分寺共同住宅建設地）、第168・190次調査（国鉄中央鉄道学園内下水道工事に伴う調査）、第201次調査（佐藤国分寺共同住宅第2期建設地）、第218次調査（いずみプラザ建設地）、第249次調査（信濃建設・菱和住販住宅建設地）などがある。これらの調査地区は本調査地区の北から東にかけて所在するものである。

歴史時代の遺構についていえば、第3次調査で住居跡7、土坑4、第51次調査では住居跡4、



掘立柱建物跡5、溝跡2、道路状遺構1、土坑19、第72次調査で住居跡7、掘立柱建物跡1、溝跡2、土坑19、第107次調査で住居跡5、道路状遺構1（第51次調査において検出されたものの延長部分）、土坑3、第168・190次調査で住居跡3、掘立柱建物跡2、溝跡8、土坑7、第201次調査では住居跡4、掘立柱建物跡2（内1は第51次調査において検出されたものと同一建物の西半分）、火葬墓1、土坑8、第218次調査では火葬墓1が検出されている。また第249次調査では遺構は検出されなかったものの、当該時期の遺物の出土がみられた。

本調査地区のA地区の南約10mに僧寺々城を画する溝が走行している。すなわち、僧寺中軸線の東427m、北276mに北東隅をもち、南方及び西方に素掘りの溝を延ばして寺域を区画しているのである。従って本調査地区は、寺域の外側に位置することになる。現在までの調査成果からすると、寺域外北側では住居跡は僧寺中軸線の北456～480m付近を、掘立柱建物跡は同北574～578m付近を北限としており、こうした位置に分布する住居跡や掘立柱建物跡は既して重複や建て替えの認められないものが多い。

縄文時代の遺構について、比較的近接した位置における調査成果を挙げると、第3次調査で土坑1、第51次調査で竪穴住居跡1、配石跡1、埋壘2、集石・集石土坑10、土坑20、第107次調査で土坑4、第201次調査で土坑2が検出されている。これらの地点は国分寺崖線より約200m北へ

入り、また東は恋ヶ窪谷に開折された武蔵野段丘上に位置しており、第51次調査地点を中心に多喜窪遺跡C地点として捉えられている。唯し東方約150mの恋ヶ窪谷東向き緩斜面一帯は多喜窪遺跡D地点とされており、本調査地区のB地区はC地点とD地点との境界に位置している。また出土遺物の内容において、B地区はA地区に比して中期以降遺物の相対的割合が高く、やや様相を異にしている。よってB地区を多喜窪遺跡C地点の範疇で捉えることが可能であるかは、なお吟味の余地を残している。

先土器時代においては、第51次調査でⅣ層、Ⅴa層、Ⅴ層においてユニットが認められ、また第107次調査でもⅤa層にユニットⅠが検出されている。これらはいずれも崖線よりも割合に奥に入った位置にあるものといえる。

このように本調査地区は、歴史時代の遺構については、僧寺々域外の北方にあり、遺構数の密度が低くなった地帯に位置しており、縄文時代・先土器時代については、国分寺崖線上の武蔵野段丘縁辺近くの当該時期の遺構や遺物が比較的濃厚に分布する地帯に位置しているのである。

2. 層序

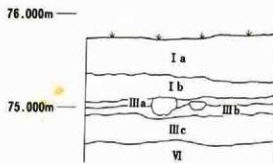
本調査地区は武蔵野段丘にある。先述したように、A地区東半やB地区東側は、西から東に緩傾斜しており、地表面の海拔標高は地点により若干異なっている。しかし堆積土の様相はいずれも同様であり、共通した層序を示している。以下に基本層序を記す。

I a層 盛土。ローム土・バラス・セメントなどを含む客土。10~50cm。本調査区全体に認められる。

I b層 表土。黒褐色土。乾燥するとバサつき、崩れやすくなる。10~30cm。上層は掘削されている場合が多い。

Ⅱ層 黒色土。黒味が強い。黒色土粒を多包する。粒子は粗い。また粘性にやや欠ける。10~20cm。歴史時代遺構内の堆積土に類似する。歴史時代の遺物を出土する。

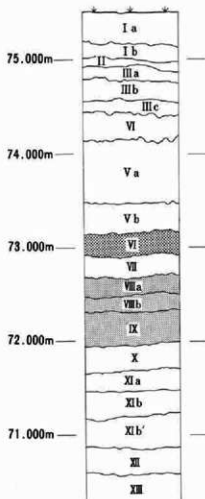
Ⅲa層 黒褐色土。やや茶褐色味を帯びる。締まりよく、粘性もある。Ⅱ層やⅢb層との境は漸移的である。10cm前後であるが、地点によっては薄層である。縄文時代の遺物を出土する。



第4図 標準層序(I) (B地区南壁)

Ⅲb層 暗茶褐色土。下部になるほど褐色味を強くし、粘性も増す。縄文時代の遺物を多く含む。歴史時代の遺構の大半は当該層上面で検出が容易となる。

Ⅲc層 茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干含む。中でも上部に目立つ。



第5図 標準層序(2) (立坑No 1北壁)

縄文時代の遺構は当該層上面で検出が容易となる。

IV層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。IIIc層との境はやや不明確である。当該層上面で縄文時代遺構検出は網羅し得る。

Va層 黄褐色ローム。ハードローム。下部にいくほど黄褐色味が乏しくなり、灰色味を増す。赤色・黒色スコリア粒を多包する。Va層との境は漸移的である。

Vb層 暗灰褐色ローム。ハードローム。色調を除くとVa層に等しい。

VI層 暗褐色ローム。立川ローム第1黒色帯。スコリア粒は細かい。粒子の密度は高い。また粘性も強い。

VII層 黄褐色ローム。黄色味強く、色調の明度は高い。VII層へは漸移的に変化し、境はやや不明瞭である。

VIIa層 褐色ローム。やや暗味がある。立川ローム第2黒色帯。土質はVII層下部に近似する。

VIIb層 暗褐色ローム。立川ローム第2黒色帯。VIIa層より暗味増す。粒子は細かく、また密度も高い。粘性も増す。

K層 黒褐色ローム。立川ローム第2黒色帯。黒味強い。粒子は細かい。下部にいくに従って粒子密度を増し、粘性も更に強くなる。下部の5~10cmは下位層の影響により、明るい部分もみられる。

X層 黄褐色ローム。粒子は極めて細かい。密度は高く、粘性もある。

XIa層 黄褐色ローム。X層やXIb層よりも明度があり、硬質である。だが粘性を若干欠く。

XIb層 暗黄褐色ローム。XIa層よりも粘性がある。

XIb'層 暗黄褐色ローム。上部に赤色スコリア大粒多く含む。

XII層 暗黄褐色ローム。下部に黄褐色ブロックが多くみられる。

XIII層 暗褐色ローム。色調に濃さがみられる。硬度増す。

Ⅲ 発掘経過

昭和59年6月26日よりリオン株式会社本館等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を開始した。調査地区は4地区に分かれている。すなわち本館建設地部分（A地区）、無警室・振動実験室建設地部分（B地区）、守衛室建設地部分（C地区）、下水道埋設に伴う立坑掘削地部分（D地区）からなり、D地区は更に3地点を数える。また下水道埋設に関係し、当市下水道課で立孔を設ける必要から、第207次調査として、その部分の発掘調査を行った。なおそれを正門前立孔の調査と呼び、併せて報告する。

建設工事による影響範囲、つまり掘削深度は各地区や地区内の各所によって異なるため、発掘調査もそれに応じたものとなった。すなわち、発掘深度をⅢb層上面までとし、歴史時代遺構の確認調査のみに留める部分、Ⅲc層まで掘り、歴史時代遺構の発掘調査までを行う部分、Ⅳ層上面まで掘り、縄文時代遺構の発掘調査も行う部分、そしてⅣ層以下まで掘り、先土器時代層の発掘調査まで行う部分がある。唯し設定された範囲では遺構が捉えきれなかったり、また遺構の種類によっては、当初の発掘深度の範囲を変更して調査を進めることにした。

本調査に先立ち、リオン株式会社の要請を受けて行ったA、B地区の試掘調査において、すでに歴史時代の遺構確認が可能なⅢb層上面まで掘り下げたため、本調査では掘削にかかる手間を大幅に省くことができた。

調査は、建設を急ぐB地区より開始した。上述したように、試掘時にⅢb層までの掘削が行われていた。だがそれでは、調査対象範囲を網羅しきれていなかったため、まず調査範囲内にありながら試掘調査から外れた部分をⅢb層上面まで掘り下げることから始めた。これは予定外の作業であったが、本地区の調査期日を延長することは避けられた。この掘削とは併行して、再度本地区全体にわたる歴史時代の遺構確認作業を行った。その際出土した遺物は、極力番号を与えて取上げることに努めた。ところで、本地区は歴史時代遺構の確認作業のみに留める部分と、縄文時代遺構の発掘調査まで行う部分とからなり、後者は南半東側の部分である。遺構確認後、まずS I 323住居跡の規模及び大略の把握を目的とした調査から開始した。なおS I 323住居跡は、遺構検出面以下には工事による影響が及ばないことから、発掘調査は行わなかった。次いでS X 35・36不明遺構、小穴へと発掘調査を進めた。なお歴史時代遺構検出面で留める部分より2基の集石が検出された。工事による掘削がそれ以下に達しないとはいえ、硬の動く可能性が懸念されたので、発掘調査を行うことにした。歴史時代遺構の発掘調査は8月上旬で終了し、その後南半東側を掘り下げ、縄文時代遺物包含層及び遺構の発掘調査を実施した。包含層中の遺物は割合に多く検出されたが、遺構としては土坑5基、小穴33個を数えるにすぎず、作業は順調に進行した。

そして当初の予定通り8月31日に本地区の調査は全て完了した。

B地区に次いでA地区の調査は9月3日より開始した。A地区でも試掘調査によりⅢb層までの掘削が行われていた。だが、試掘調査時に南側で遺構が多く存在していることが知られたため、本館建設予定地を遺構数が少ないと考えられる北方へ約6m移動した。また南西側では倉庫が位置していたために試掘調査を行えなかった。これらの部分はB地区の発掘調査が進行している間にⅢb層までの掘削が行われた。また南側6mは埋めもどされた。従ってA地区における本調査は遺構を明確に捉え直すことから始まった。また攪乱が多く、その除去も併せ行った。本地区の歴史時代遺構は全て発掘調査の対象となっており、遺構確認後はまず小穴と土坑から調査を始めた。攪乱土の排除及び小穴と土坑の調査は9月下旬ではほぼ終了した。唯し、SK845～847土坑など一部の土坑については後まわしとした。小穴、土坑そしてSD182溝跡の発掘作業終了の目度があった9月末頃よりSI329住居跡の発掘調査を開始し、加えて10月上旬よりSB79・81・82・83掘立柱建物跡の発掘調査を併行して行った。なお各掘立柱建物跡とも南側に遺構が延びていることから、調査範囲を南方へ若干拡張して遺構全体の把握に努めた。SI329住居跡では覆土中の遺物がやや多く、またSB82掘立柱建物跡と重複しているなどのため、調査の日数は1箇月近くに及んだ。また各掘立柱建物跡は併行して発掘調査を進めた。本地区では調査深度が3分され、歴史時代遺構の調査のほか、建物基礎が設置される部分では縄文時代の遺構、中央のエレベーター設置部分では先土器時代の調査まで行った。縄文時代遺構の調査は、建物基礎面積に若干の余裕幅を加えた範囲のみに留めたため、坪掘り状の調査となり、本地区全体に及ぶ調査は行えなかった。この縄文時代遺構の発掘調査は10月上旬より開始し、SI329住居跡や掘立柱建物跡などの歴史時代遺構の調査と併行することとなった。なおSS29集石は歴史時代遺構検出面で既に検出されていたため、縄文時代遺構の中ではいち早く発掘調査を始めた。またSX38竅穴状遺構は、設定された調査面積では遺構全体を捉えきれないため、南側に拡張した。しかし検出面からの掘り込みが浅いことと、遺物量が少ないことから、発掘作業は順調に進行した。A地区の縄文時代の発掘調査は、調査対象面積が少なく、遺構もSS29集石とSX38竅穴状遺構を除くと、土坑3基と小穴があるに過ぎないことから、比較的短い期間で終了した。中央のエレベーター設置部分における先土器時代の発掘調査は10月18日より開始した。工事による掘削がⅣ層に達するため、発掘調査もそれに応じた深度まで行った。Ⅴ層（ハードルーム層）上面で石器集中分布地点を検出し、その広がりを捉えるため南方へ若干の拡張を行った。そして10月31日に先土器時代の調査を終了し、A地区の調査は全て完了した。

C地区は工事による掘削深度が浅いため、歴史時代遺構確認調査のみに留めた。なお調査は10月下旬のA地区調査がほぼ終了する段階で行った。

D地区は3地点とも工事による掘削がⅣ層に及ぶため、歴史時代及び縄文時代の遺構の発掘調

査を行ったのち、それより下層に掘削を進めた。1区では歴史時代及び縄文時代の小穴を検出した。2区では重複した2基の歴史時代の土坑と縄文時代の小穴を検出した。3区では歴史時代の遺構はなく、検出された小穴はいずれも縄文時代のものであった。また、土器がまとまって出土した。先土器時代の調査では、1区より石器剥片1点が出土したのみである。なおD地区の調査は、建設工事の工程に合わせて行ない、1・2区を8月中旬、3区を8月上旬より開始し、いずれも8月中にはほぼ終了した。

正門前立孔の調査は8月1日より3日間にわたり実施した。歴史時代、縄文時代そして先土器時代の遺構・遺物の検出に努めたが、縄文土器片2点の出土をみたのみであった。

このような経過により、本調査が行われた。そしてA地区調査終了の5日後に調査器材を撤収し、発掘調査に係る全ての作業が完了した。

なおお付言しておきたいが、B地区に比して調査対象面積及び遺構数の多いA地区の調査が、B地区よりも短い期間で終わることができたのは、関係諸氏の協力によるものであるが、ことに雨天時にあっても雨具を着装して発掘調査に従事した発掘作業員の努力に負うところが大きいといえる。

本調査をまとめると以下ようになる。なお各地区及び主要遺構の発掘調査進行状況については第1表にまとめた。また各地区における調査深度は第6図に表わした。あわせて参照された。

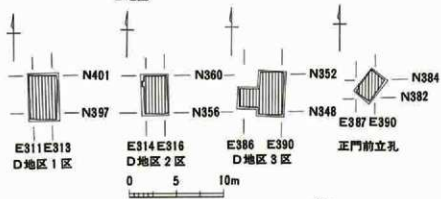
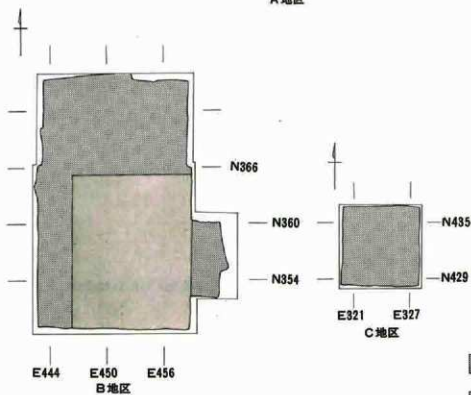
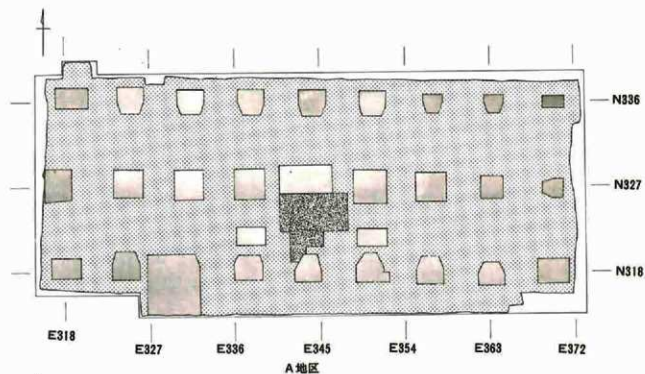
地区名	A地区	B地区	C地区	D地区			正門前立孔	
				1区	2区	3区		
面積	1495㎡	445㎡	19㎡	14㎡	9㎡	15㎡	5㎡	
歴史時代	対象面積	1495㎡	445㎡	19㎡	14㎡	9㎡	15㎡	5㎡
	検出遺構	住居跡1 掘立柱建物跡4 溝跡1、土坑18 小穴73	住居跡1 不明遺構2 土坑3、小穴66	小穴8	小穴5	土坑2 小穴2	なし	なし
縄文時代	対象面積	296㎡	203㎡		14㎡	9㎡	15㎡	5㎡
	検出遺構	竪穴状遺構1 集石1、土坑4 小穴37	集石2、土坑5 小穴35		小穴5	小穴3	小穴6	なし
先土器時代	対象面積	36㎡			14㎡	9㎡	15㎡	5㎡
	検出遺構	ユニット1			なし	なし	なし	なし

第1表 検出遺構一覧表

年月日	昭和59年/6月			7月			8月			9月			10月			11月	頁数	
	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10			15
張作業票計日数																		
調査区全境																		
SI329																		23
SB79																		13
SB81																		14
SB82																		15
A SB83																		7
SD182																		4
地 区																		14
土坑																		13
小穴																		23
縄文包含層発掘																		12
SX38																		19
SS29																		16
土坑																		20
小穴																		11
东土器时代調査																		25
調査区全境																		10
SI323																		4
B SX35・36																		7
地 区																		18
縄文包含層発掘																		9
SS27・28																		8
土坑																		8
小穴																		2
C地区																		9
1区																		8
2区																		7
3区																		3
正門前立孔																		
備 考																		

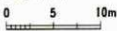
第2表 調査工程表

第6圖 発掘調査深度図



凡例

- IIIb層上面
- IIIc層上面
- IV層上面
- III層中
- II層中



VI 歴史時代

1. 検出遺構

本調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、溝跡1条、不明遺構2基、土坑20基、小穴154個を数える。調査地区は既に述べているようにA～D地区及び正門前立孔に分かれているが、既してA地区に主要な遺構が多く認められた。これは調査面積が最も広いことに加え、僧寺により近い位置にあることにも起因しよう。各地区ごとの検出遺構は第1表によられたい。

遺構の全容を把握するために、遺構が調査範囲外に延びている場合には、基本的に調査範囲を拡張した。またA・B地区とも攪乱が多く入り、S I 323住居跡やS B 81掘立柱建物跡など遺構によっては一部破損を受けているものもある。しかしそうしたものも、大略はほぼ捉えることができた。

大半の遺構は、検出が容易となるⅢb層上面で確認した。しかし本来の掘り込みはもう少し上からなされたものと考えられる。なお、S X 35・36不明遺構や土坑、小穴は、主として検出面や遺構内堆積土から当該時期のものであると判断した。

では歴史時代の遺構について、各地区ごとにまとめ、以下に記述していくことにする。

(1) A地区(図面I)

S I 329住居跡(図面3～6、図版2～4)

本住居跡は僧寺中軸線の東392m、北362mに位置する。南側は調査区外にあたるが、拡張してその全容を捉えた。

規模は南北3.5m、東西3.9mを測り、東西方向の長方形を呈する。各隅とも丸味を帯びているが、北西隅は少し壊れている。掘り込みの上縁辺は不整で、ことに南側及び東側は顕著である。また西側北半ではやや内彎している。北壁にカマドを設けている。住居跡の南北方向は僧寺中軸線に対して11度東偏する。

構築時にはⅥ層上面の約10cm下まで、ほぼ水平に掘り込んでいる。その後ローム土を主体とする暗黒褐色土を5～10cmの厚さで貼り、床面を形成する。貼床は住居跡底面全体に及ぶ。またカマドより1.6m以南では床面は堅固である。この堅固な面の広がりは西壁方向に延びており、特別な施設は認められなかったが、入口部が西壁にあったものと想定される。壁高は40～45cmであ

るが、南壁及び北壁側では若干高くなっている。なおその壁高は検出面よりの計測値であり、既述したように実際の掘り込みがもう少し上層からなされていることからすれば、本来の壁高は50cmほどであったものと考えられる。

周溝はカマド部を除きほぼ全周する。しかし周溝両端はカマドの火床掘り込みより10cm離れているにすぎない。つまり現状においては袖部を全く欠失しているが、その存在を勘案すれば周溝端部はカマド部下に埋もれることになる。また周溝は貼床がなされた後、それを切って造られたもので、東壁や西壁では貼床内にその底部がある。よってその深さも5~10cm程度と浅いものである。周溝幅は10~15cmほどあり、特に狭さが著しいというところは認められなかった。

カマドは北壁のやや東寄りに設けられている。そのほとんどを欠損しており、本来の形状を窺うことはできない。ただし火床部は遺存しており、南北82cm、東西48cmを測る長円形を呈している。火床部の掘り込みは住居跡中央に向かうにつれ深くなると共に、その端では僅かに段を有して更に下がっている。そして黒褐色土を敷いて火床部を形成している。火床部の中央には焼土が2~10cmほど堆積しており、奥壁に近くなるほど薄くなっている。また奥壁はほぼ垂直に立ち上がったのち、中程より外反するという2段の掘り方を示している。なおカマド部は北壁よりも50cm強突出している。火床部上方の堆積土の中には白色粘土を多く混入したものがあり、カマド構築材に白色粘土が用いられていたことを知り得る。と同時に、その白色粘土が本来の位置を保ったものでなく、混入した状態にあること、そして焼土が掻き出されたようにカマド南西方にまとまって認められることから、カマドは自然に崩壊したのではないと考えられる。それはまた、住居跡内堆積土の大半を占める1~4層などよりも先行して、カマド部の崩壊土が堆積していることから首肯されよう。

住居跡の北東隅と北西隅に小穴がそれぞれ1個検出された。両小穴とも丁度周溝を切る位置にある。比率差はあるが、ともに黒褐色土とローム土との混合土を堆積土としている。住居内の堆積土の4層以上にはローム土の混入がほとんどみられないことからすると、両小穴内地積土は住居内の堆積土以前のもので捉えても大過あるまい。こうした小穴は住居跡南半には認められなかった。

貼床面下には落ち込みが幾つか認められたが、そのうち小穴と呼べるものは2個ある。ともに掘り込みは浅く、10~15cmほどである。カマド部寄りの小穴の堆積土中には白色粘土が多包されている。このことは、貼床以前にカマド構築材が準備されていたことを示すものといえよう。

住居内堆積土は均一ではないが、上層の包含粒子量は多いが締りの弱い暗黒褐色土層(1層)、中層の包含粒子量のやや少ない黒褐色土層(2、3層)、そして下層の明度が有り、茶褐色土を混入した明黒褐色土層(4層)とに大別することができる。しかし2~4層は比較的類似した土質

といえる。これはまた同一個体の遺物破片の接合関係がそうした層間に亘って認められることから首肯されよう。

検出遺物は246点を数えた。出土は住居跡内全体に及ぶが、水平分布において北東側に、垂直分布においては中層以下に多く認められる。土師器の甕類や須恵器の平類、埴類がその中でも多く認められる。接合関係をもつ遺物破片は少なくない。また上述したように垂直分布において上下に、また水平分布においても広域に亘って接合関係がみられる。遺物の種類別による分布の偏りは余り認められないが、土師器の甕類は北半に集まる傾向が認められる。なお瓦類の出土はなかった。

SB79獨立柱遺物跡（図面7、図版5～6）

僧寺中軸線の東347～354m、北392mに位置する。南北2間、東西3間の東西棟である。柱間は南北1.7m等間隔、東西2.1m等間隔で、南北3.4m、東西6.3mの規模となる。桁行方向は僧寺中軸線南北方向とはほぼ一致している。

柱穴には欠けた部分はなく、柱痕も全ての柱穴に認められる。そして柱穴は4辺ともほぼ一直線に並んでいる。柱穴は長円形を呈するものが多く、長径80～120cm、短径50～80cmを測る。その長軸は一定の向きには崩っていないが、4隅の柱穴は桁或いは梁行で対をなしており、建物の外方へ狭まる向きに長軸を採っている。4隅以外では大略横方向にある。柱穴の深さは、一定しておらず、検出面よりの計測値であるが、深いものは1-2柱穴の77cm、浅いものは2-1柱穴の43cmとなる。そして2-1、2-3柱穴を除いていずれもN層中まで下底は達している。その掘り方も、段掘りされたものと、段掘りのみられないものがあり、また段掘りも明瞭なものでもないものがみられ、各柱穴により異なっている。が、概して4隅の柱穴はしっかりとした掘り方を有しているといえる。また柱穴内堆積土は主としてローム土を混入した黒（褐）色土であり、堅固に締まっている。

柱痕は全てほぼ円形を呈し、直径15～25cmを測る。唯しその直径は堆積土層の観察から導き出された数値であり、柱本来の大きさを適確に示し得ているかには多少の疑問も残る。恐らくいずれも直径20cm強の柱材を使用していたのではないかと推測される。柱痕の深度も一定しておらず、28～62cmを測る。また1-1柱穴でその下底まで達しているのを除けば、いずれも柱穴堆積土中で留まっている。そうした場合、柱穴下底にローム土或いはローム土を多く混入した黒（褐）色土を硬固に詰め、その上に柱材を立てて周囲を埋めるという手法が基本的に採られている。また柱材は柱穴のほぼ中心にくるように配されている。

建て替えはなされていない。出土遺物も検出されなかった。

SB81掘立柱建物跡（図面8、図版7～8）

僧寺中軸線の東334～341m、北388～393mに位置する。SB79掘立柱建物跡の西側にあり、本地区検出の4棟の掘立柱建物跡の中でも最西端にある。

南北2間、東西3間の東西棟である点はSB79掘立柱建物跡と共通する。柱間は南北が西側柱で北より1.9m+2.3mとなり、東西は2.0mの等間隔であり、南北4.2m、東西6.0mの規模となる。SB79掘立柱建物跡に比して梁行では0.3m短いが、桁行では0.8mも上回る。桁行方向は僧寺中軸線の南北方向と一致しており、すなわちSB79掘立柱建物跡と平行している。

柱穴のうち4-3柱穴は攪乱のため大半を欠損している。また2-3や3-3では柱穴上縁辺を破損している。しかし4-3柱穴以外はいずれも形状を捉え得るものである。しかもそれらでは柱痕も明瞭に認められる。なお柱痕は本掘立柱建物跡においても4辺ともほぼ直線的に並ぶ。柱穴の形状は不整円形を呈するものが多く、大きさはSB79掘立柱建物跡のものとはほぼ等しい。掘り込みはいずれもN層中まで達している。その深度は4-2柱穴など深いものは検出面より72cm、浅いものでも1-2柱穴のように47cmを測る。その掘り方の形状は一定せず、またSB79掘立柱建物跡にみられたような明瞭に段掘りされたものは見当たらない。だが、いずれもしっかりと掘り込まれている。柱穴内堆積土は、やはりローム土を混入した黒（褐）色土を基調としており、堅く締め固められている。そしてその埋めもどし土はほぼ水平に詰められている。

柱痕はいずれも円形を呈し、その直径は14～20cmを測るが、柱本来の大きさは直径18～20cm程度のものであったと推定される。その深さは、検出面より41～57cmを測り、一定していない。また1-1柱穴と1-3柱穴で柱穴下底にまで柱痕は達している。この2柱穴以外では50cm前後の深さから柱材が据えられている。柱材は柱穴の中心というよりも、全体にやや内寄りに配されており、1-1柱穴を除くと柱穴下底との位置とはほぼ対応している。

出土遺物は5点を数える。そのうち柱穴埋めもどし土中に混入していたものは、縄文土器と礫を除くと2点ある。すなわち、1-2柱穴より須恵器の蓋（16-3）及び3-3柱穴より須恵器杯（16-2）の破片が検出された。

なお建て替えについてはなされていない。

SB82掘立柱建物跡（図面9、図版9～10）

僧寺中軸線の東361～365m、北388.5～391.5mに位置し、4棟の掘立柱建物跡のうち最東端にある。西半ではSI329住居跡が位置しており、そのため柱穴の一部が住居跡と重複している。なおその切り合い関係から、本掘立柱建物跡が先行するものである。

南北2間、東西2間を数え、南北3.5m、東西4.2mの規模を測る東西棟である。柱間は南北1.7

5m等間隔、東西2.1m等間隔である。桁行方向は僧寺中軸線の南北方向に対し3度偏しているとはいえ、先述のSB79、81掘立柱建物跡とはほぼ平行している。しかもSB79掘立柱建物跡と桁行はほぼ等しい。

既述したように、SI329住居跡が重複しているため、1-1柱穴及び東側柱以外の柱穴は破損を受けている。柱穴の形状はいずれも不整形を呈している。その直径は40~60cmを測り、SB79、81掘立柱建物跡に比して柱穴は小さい。柱穴の下端はいずれもN層にまで達しているが、その深さは検出面より27~58cmを測り、30~40cmのものが多い。このように本SB82掘立柱建物跡の柱穴は規模において先述の2棟の掘立柱建物跡のものに比して小さいといえる。また柱穴内堆積土は、大半の柱穴で、茶褐色土を混入した黒(褐)色土単一層からなっている。

柱痕は、柱穴に破損を受けたものがあるにもかかわらず、全ての柱穴内に認めることができる。いずれも円形を呈しており、その直径は13~22cmを測るが、20cm程度のものが過半を占める。従って柱穴規模が小さいにもかかわらず、柱材はSB79、81掘立柱建物跡のものと同じ大きさの点においてほとんど変わらないのである。柱材は柱穴下端に達することはない。つまり柱穴を埋めもどしつつ柱材を据えたものといえる。柱痕の深さは検出面より1.9~2.2cmを測り、柱痕は4辺とも直線的に並んでいる。

このように、柱穴の規模が小さく、埋めもどし土も基本的に単一層であること、すなわちSB79、81掘立柱建物跡に比して稚拙な構造を採っていることは、梁行の短さに起因するとみるよりも、上屋構造に違いがあったのではないかと推測される。

出土遺物は検出されなかった。また建て替えもなされていない。

SB83掘立柱建物跡 (図面9、図版11)

僧寺中軸線の東355~359m、北388~391.5mに位置する。西側にはSB79掘立柱建物跡が、東側にはSB82掘立柱建物跡があり、両棟とは共に約1.6mほどの距離を保っている。土坑や攪乱と一部の柱穴が重複しているが、その影響は小さい。

南北2間、東西2間であるが、南北3.5m、東西4.1mの規模を測る東西棟である。柱間数や規模において、SB82掘立柱建物跡とはほぼ等しい。柱間は南北が西側柱で北より2.0m+1.5m、東側柱で北より2.3m+1.2mを測り、北半の間隔がやや広い。また東西では2.05m等間隔である。桁行方向は僧寺中軸線の南北方向に対し2度西偏しており、SB82掘立柱建物跡とは1度の違いにすぎない。またSB79、81掘立柱建物跡ともほぼ方向を揃えている。

柱穴のうち3-1柱穴が攪乱により東側を若干欠失している以外は、ほぼ旧形を保っている。その形状はいずれも不整形を呈しているが、1-3柱穴のみはSK849土坑との重複によるた

めかやや大きさのある長円形を呈するものと捉えられた。その1-3柱穴を除くと柱穴の直径は30~50cmを測るが、直径30cm強のものが主体を占める。また柱穴の下底はいずれもⅢ層内に留まっており、その深さは検出面より19~25cmを測る。このようにSB82掘立柱建物跡の柱穴に比してもやや小規模である。柱穴内堆積土は茶褐色土を混入した黒色土の単一層からなる。

3-2柱穴を除いて、柱痕を捉えることができた。平面形は円形を呈し、直径1.4~2.0cmを測る。なお2-3柱穴の柱痕は他に比して細いが、堆積土の壊れによると考えられる。1-3、3-1柱穴では柱材が柱穴下底にまで達しているが、柱穴の掘り込みが浅いことに起因しよう。柱痕の深さは17~24cmを測る。柱材は柱穴のほぼ中心に配されており、4辺ともほぼ直線に並ぶ。

検出遺物としては3-3柱穴より須恵器の坏(16-1)破片が出土したのみであり、他には礫なども認められなかった。建て替えはなされていない。

SD186溝跡(図面10、図版12)

本調査地区東側にあり、僧寺中軸線の東361~372m、北397mに位置する東西方向溝である。僧寺中軸線の東西方向とはほぼ平行している。この溝跡はゆるやかに屈曲しながら走行するが、東側は調査区外に延びており、全形を捉えることはできなかった。

溝幅は上面で30~40cm、底面で10cmほどであり、深さは20cmを測るにすぎない、細長く浅い溝跡である。幅や深さはほぼ変わるところはない。断面形はやや開き気味のU字形を呈している。遺構内堆積土はローム或いは茶褐色土を混入した黒褐色土よりなり、色調や包含粒子・混入土の違いにより分層されるが、本質的には等質土として差しつかえあるまい。またその堆積土は人為的な埋めもどしとは考えられない。

西端の立ち上がりはゆるやかであるが、端部は明瞭に捉えられる。また北側で2個の小穴と重複しているが、いずれも本溝跡が切っている。

出土遺物としては、土師器坏の小破片と礫が検出されたにすぎず、前者は図示し得ないほどの破片である。

SK827土坑(図面10、図版12)

本調査地区の西端にあり、僧寺中軸線の東317m、北402mに位置する。上面幅は長径100cm、短径87cm、底面幅は80cm前後を測り、平面形は不整形円形を呈している。深さは15cmを測るにすぎず、中央に向かってゆるやかに下がる。堆積土は上層の黒色土粒・ローム粒を含む黒褐色土(1、2層)と下層の茶褐色土を混入した暗褐色土(3層)とに大別される。出土遺物はなかった。

SK828土坑（図面10、図版12）

SK827土坑の南にあり、僧寺中軸線の東317m、北400mに位置する。上面幅80～90cm、底面幅63～76cmを測る不整形円形を呈している。深さは14cmと浅く、底面はほぼ平坦である。西壁に比して東壁の立ち上がりはややなだらかである。堆積土は黒褐色土を基調としているが、上層土（1層）にはローム土の混入はみられない。出土遺物はなかった。

SK829土坑（図面10、図版12）

SK827土坑の南、SK828土坑の東にあり、僧寺中軸線の東318m、北400mに位置する。北東—南西に主軸をとり、上面幅は長径122cm、短径97cm、底面幅の長径96cm、短径77cmを測る。平面形はやや不整形な隅丸形状を呈している。深さは10～13cmと浅い。底面はほぼ平坦であるが、南東隅で若干落ち込んでいる。壁部の立ち上がりは全体的にゆるやかである。堆積土は上層の黒色土（1層）と下層の黒褐色土（2、3層）とに大別され、下層は縞りに欠ける。出土遺物は女瓦の小破片が1点出土したにすぎない。

SK830土坑（図面10、図版13）

本調査地区南辺西寄りにあり、僧寺中軸線の東331m、北390mに位置する。南側が調査区域外に延びており、また東側は攪乱を受けている。そのため全体規模は捉え得ないが、上面幅の長径160cmほどの東西方向に主軸をとる隅丸方形を呈するものと考えられる。深さは10cm前後と極めて浅い。底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに下がっている。堆積土は黒褐色土を基調としており、茶褐色土混入の割合により上層（1～4層）と下層（5層）とに大別される。出土遺物は11点を数え、還元焰焼成須恵器破片4点、同瓶破片1点、酸化焰焼成須恵器破片2点、土師質土器破片2点、礫2点となる。これらには接合関係は認められなかった。また、いずれも小破片のため図示し得ないものである。

SK831土坑（図面10、図版13）

僧寺中軸線の東330m、北399mに位置する。北側から東側にかけて攪乱が入り、全形を捉えることはできない。現況からすると、東西方向にやや長い不整形を呈し、長径250cmほどを測るものと推測できる。それはまた、本地区当該時期の土坑のうち最も平面的に大きいものとなる。深さは15～24cmを測る。つまり底面は一定せず、北西側及び南側で若干深くなっている。堆積土は黒褐色土を基調とするが、黒色土粒を含む上層（1、5、6層）とそれ以下の層（2～4層）とに大別できる。出土遺物としては礫2点が認められたにすぎない。

SK833土坑（図面10、図版14）

SK831土坑の北東約5mのところであり、僧寺中軸線の東336m、北402mに位置する。上面幅の長径126m、短径109m、底面径の長径67cm、短径55cmを測り、また上面の長軸が北西-南東にあるのに対し、底面では北東-南西にある。その平面形は不整形形となっている。断面形はスリ鉢形を呈している。堆積土は上層の黒褐色（1～3）と下層の暗（黄）褐色土（4～6層）とに大別される。出土遺物はなかった。

SK835土坑（図面11、図版15）

僧寺中軸線の東346m、北392mに位置し、SB79掘立柱建物跡の西1mにある。上面幅の長径136cm、短径97cmを測り、南西-北東に主軸をとる長円形を呈している。深さは10cm前後と極めて浅い。底面はほぼ平坦であるが、僅かに北側へ傾斜している。堆積土は黒褐色土（1、2層）と黒色土粒やローム粒をほとんど含まない暗褐色土（3層）とに大別できるが、いずれも類似した土質である。出土遺物はなかった。

SK836土坑（図面10、図版14）

僧寺中軸線の東358m、北391mに位置し、SB83掘立柱建物跡の2-2柱穴と重複している。上面直径140～150cm、底面直径110～120cmを測り、平面形は不整形形を呈している。深さは18cmで、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりはゆるやかである。堆積土は上層の黒褐色土（1、2層）、茶褐色土・ローム土を混入した暗褐色土（4層）、下層の黒褐色土（3、5層）に大別される。出土遺物は須恵器破片3点が認められる。うち1点は口縁部から底部までほぼ捉えることのできるもの（16-4）である。

SK837土坑（図面10、図版15）

僧寺中軸線の東358m、北401mに位置し、SB83掘立柱建物跡の北20mにある。上面の直径110cm、底面の直径75～85cmを測る円形を呈している。深さは10～14cmを測り、底面には多少の起伏がみられる。壁の立ち上がりはなだらかである。堆積土は黒褐色土を基調とした上層（1、2、4層）と茶褐色土を含む暗褐色土の下層（3層）とに大別される。出土遺物はなかった。

SK839土坑（図面11、図版15）

僧寺中軸線の東355m、北404mに位置し、SK837土坑の北西3mにある。上面幅は長径90cm、短径74cm、底面幅は長径80cm、短径64cmを測り、南北方向に主軸をとる長円形を呈している。深

さは15cmと浅い。壁の立ち上がりは短かく、底部は中央に向かってなだらかに傾斜している。底面東側には長径25cm、短径15cmほどの小さな落ち込みがみられる。堆積土は黒色土粒を多包した上層の黒色土（1、2層）と、包含粒子量のやや少ない下層の黒褐色土（3、4層）とに大別できる。なお出土遺物はなかった。

SK843土坑（図面11）

僧寺中軸線の東370m、北391mに位置する。本調査地区の南東隅にあり、A地区で検出された土坑の中では最も東に所在するものである。上面では直径125cm前後、底面では長径100cm、短径84cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。深さは20cmほどで、底面はほぼ平坦である。また壁の立ち上がりはなだらかであり、底面との境は漸移的である。堆積土はローム粒を多包した上層の黒色土（1、2層）と下層の黒褐色土（3、4層）とに大別できる。出土遺物は6点を数える。そのうち、4点は土師器甕破片、2点は須恵器杯の破片である。甕破片は同一個体と考えられる。だがいずれも小破片のため図示することはできなかった。

SK844土坑（図面11、図版16）

僧寺中軸線の東331m、北401mに位置し、先述のSK831土坑の北50cmにある。上面幅は直径90～98cm、底面は直径55～58cmを測り、円形を呈する。深さは24cmを測り、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分けられるが、いずれも類似した土質である。出土遺物はなかった。

SK845土坑（図面11、図版16～17）

僧寺中軸線の東357m、北410mに位置する。僧寺中軸線の北410m、東357～361mにかけて3基の土坑が東西方向に並列しており、本土坑はその西端にある。上面幅は長径113cm、短径102cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。底面はやや南に偏し、長径45cm、短径35cmを測る。壁の立ち上がりは南側では垂直に近いが、北側では段状になっている。深さは54cmを測るが、検出面が下がっていることから、本来は70cm程度あったものと考えられる。底面はN層中に達している。堆積土にはローム土が多量に混入されており、人為的な埋めもどし土の可能性が高い。出土遺物は3点を数える。すなわち土師器甕破片2点、碟1点であるが、甕破片は共に小破片である。

SK846土坑（図面11、図版16～17）

僧寺中軸線の東359m、北410mに位置し、並列した3基の土坑の中央にあたる。上面幅110cm前後の不整形な隅丸方形を呈している。ことに北辺中央では15cmほど突出し、また南辺では内彎して

いる。底面は長径75cm、短径65cmほどを測るが、南側に狭くなっていく。また底面には若干の起伏がある。なお深さは最大で68cmを測る。堆積土はSK845土坑と同様で、ローム土を多量に混入した黒(褐)色土が大半を占めている。またはほぼ水平に堆積層が形成されている。このように本土坑は規模、形態、遺構内堆積土の様相などにおいてSK845土坑とほぼ共通するものである。なお出土遺物は6点を数える。うち3点は礫であり、これを除くと土師器環破片、須恵器環破片、須恵器蓋破片が認められるが、いずれも小破片である。

SK847土坑 (図面11、図版17)

僧寺中軸線の東360m、北410mにあり、SK846土坑の東側に近接して位置している。上面の長径172cm、短径145cmを測る隅丸方形を呈する。底面は長径110cm、短径90cmほどである。深さは75～85cmを測る。底面は起伏が激しい。壁の立ち上がりは垂直に近い。堆積土は各層ともローム土を混入しているが、上層の暗茶褐色土(1、2層)、ローム土を多く混入した中層の黒褐色土(3、4層)と暗味のある下層の黒色土(5～11層)とに大別することができる。しかも下層では水平に堆積土が形成されているのに対し、上・中層では互層の堆積となっている。そして下層の有様はSK845土坑やSK846土坑に共通する。すなわち、下層と中・上層の間には土質のみならず、堆積の仕方にも違いがみられるのである。しかし中・上層にあってもローム土の混入がみられることは、その堆積が一連の過程のものであったと考えられる。出土遺物としては、須恵器甕破片と土師器環破片の2点が検出されたにすぎない。

このようにSK845、846、847土坑は近接して並列し、平面形や規模が類似し、しかも遺構内堆積土の様相もほぼ共通する。こうしたことから、等しい用途目的を有し、比較的短期間に順次形成、埋めもどされたものといえよう。

SK848土坑 (図面11、図版18)

僧寺中軸線の東339m、北391mに位置する。東側が攪乱されており、また北端ではSB83掘立柱建物跡の3-3柱穴と重複しているため、全形は捉えられない。上面の南北方向での長さは114cmを測る。底面は攪乱により欠失しているが、中央北寄りにあるものと考えられる。深さは現況で最大22cmを測る。壁の立ち上がりはゆるやかで、凹凸がみられる。堆積土は上下2層に分けられる。出土遺物はなかった。

SK849土坑 (図面11、図版18)

僧寺中軸線の東355m、北391mに位置している。SB83掘立柱建物跡の1-3柱穴が北西隅で

重複しているが、全形を捉えるうえに影響はない。上面の長径191cm、短径151cm、底面の長径128cm、短径111cmを測り、平面形は不整形円形を呈している。ことに西側から南側にかけて歪である。深さは10cm程度で、極めて浅い。壁の立ち上がりはゆるやかで、底面との境は漸移的である。堆積土は、包含粒子量により2分される。大半を占める上層は締りに欠け、バサついている。出土遺物はなかった。

SK850土坑（図面11、図版18）

僧寺中軸線の東349m、北391mに位置し、SB79掘立柱建物跡の柱間の内側にある。上面幅は長径142cm、短径114cmを測り、南北方向に主軸をとる。平面形は極めて不整形長円形といえよう。底面の長径は92cm、短径は49cmで、上面と下面の主軸は直交する。底面及び壁面は凹凸が激しい。深さは9～15cmと浅い。壁の立ち上がりはなだらかであり、底面との境は不明瞭である。堆積土は2層に区分されるが、ともに類似した土質である。出土遺物はなかった。

小穴

A地区では73個の小穴が検出された。まとまりをもって構造物の柱穴になるような状況のものは認められない。また偏在するような傾向もみられなかった。唯し、調査地区南半の方に若干多く存在している。

規模は直径20～80cm、深さ10～60cmの範囲内にはば収まる。その中でも直径20～40cm、深さ20cm程度のものが大半を占める。平面形はいずれも円形或いは長円形を呈している。また断面形は坑形或いは鍋底形を呈するものが多い。堆積土は黒色土、黒褐色土が主体をなし、大半に黒色土粒の包含がみられる。また茶褐色土を混入することもある。なお掘立柱建物跡の柱穴のように柱痕の認められるものはなかった。

遺物の出土がみられたものは9個を数える。そのうち鏝のみが検出されたものは3個、縄文土器が混入していたものは2個ある。これら以外の4個の小穴ではいずれも須恵器破片が検出された。唯しP57小穴出土のもの（16-5）を除くといずれも小破片である。

(2) B地区（図面2）

S1323住居跡（図面2）

本住居跡はB地区北側にあり、僧寺中軸線の東447m、北369mに位置する。西半は攪乱により破損されている。また南東側にも溝状の攪乱が入っている。

本住居跡の所在する地点は、歴史時代遺構の確認調査だけで終える範囲にあるため、その規模

の把握を目的とした調査を行った。従って、そのための深さ5cmほどの試掘坑設定と、検出面において発見された遺物の取り上げが主たる調査内容である。

規模は北東-南西方向に対して66度東偏する。各隅は丸味を帯びており、長側辺では幾分緊張り気味である。

北西隅では攪乱により床面が若干露呈している。それからすると、構築時にはN層まで掘り込まれており、検出面より約40cmの深さとなる。床面に沿った浅い落ち込みがみられたが、周溝となるかは明らかにし得なかった。

焼土の存在から、東側中央にカマドがあるものと考えられる。その上面からは灰釉陶器の破片(19-1)、瓦完形品(19-2)、瓦破片(20-1、20-2)及び磔などが検出された。検出面において焼土が割合に認められることから、カマドの遺存状態は悪いものと推測される。また焼土に混じって白色粘土粒もみられた。

住居跡内堆積土は黒色土粒・ローム粒を包含した(暗)黒褐色土を基調としている。上面での堆積土は粘性にやや欠け、また黒色土粒が多包されている。そして下層ほど粘性・締りともに増していく。

北側でSK811土坑、西側でSK810土坑と重複しているが、いずれに対しても本住居跡が後出する。

SX35不明遺構(図面13、図版21)

僧寺中軸線の東446.5m、北357.5mに位置する。既述のSI323住居跡とは南へ9.5mほど隔っている。

本遺構は堆積土に焼土を含んだ小穴と、その周囲に点散する数点の小孔からなるものである。すなわち、小穴は直径26cm、深さ43cmを測り、N層中まで掘り下げられている。この小穴の堆積土は4層に分けられるが、最上層である1層に焼土が混入され、それ以下の各層には認められなかった。1層では焼土以外にローム粒や黒色土粒も包含されているが、炭化物は検出されなかった。焼土は小穴上面周辺にも及んでおり、径30~35cmの広がりを示している。そうした周辺の焼土は薄く積もっているにすぎない。小孔は小穴の北側に5点、南側に2点の計7点が検出された。それらの配置については規則性を認め難いが、小穴を囲むような状況にある。また大きさは直径5~12cm、深さ5~15cm程度である。堆積土は黒褐色土或いは明黒褐色土の単一層であるが、両者の土質はほぼ等しいものといえる。また小孔堆積土中には焼土は含まれていない。なお、焼土が如上のような状況で認められるが、その周辺で火を受けたような痕跡を示す部分は見当らなかった。

さて、以上のような様相を示す本遺構であるが、その性格については不明といわざるを得ない。ただ、周辺に火焼痕が認められないこと、小穴周辺に及ぶ焼土が薄いこと、そして炭化物が検出されないことからすると、小穴上面で直接に焼成行為を行ったというよりも、間接的、或いは僅かに高位置においてなされたものではなからうか、そして周辺の小孔はそれにかかわる構造物の痕跡ではないかと推測する。

SX36不明遺構（図面13、図版21）

本遺構は僧寺中軸線の東448m、北358mに位置し、SX35不明遺構の東1mにある。本遺構の様相はSX35不明遺構と等しいものである。

中心に位置する小穴は直径35～38cm、深さは最大21cmを測る。その下底はⅢ層中に留まる。小穴の堆積土は5層に細分されるが、焼土を混入するのは上層の1、4層のみである。この点は先のSX35不明遺構と共通している。焼土は小穴の上面よりも外側に広がり、長径90cm、短径70cmの東西方向に主軸をとる不整長円形を呈する。拡散した焼土は薄く積もっているにすぎない。小穴を中心として北側に4点、南側に3点の小孔が検出された。各小孔の直径は5～14cm、深さは4～8cmを測り、SX35不明遺構にみられた小孔よりもやや小振りである。小孔内堆積土は茶褐色土の混入の度合いにより2種に区分されるが、ともに類似した土質である。

小穴内堆積土中5層は細柱粒的な様相を呈している。そしてローム土を多く混入し、縮りの弱い土質は小孔内堆積土に似ているといえる。とすれば、小穴中心部や小孔には枕状のものが打たれていた可能性も考えられる。

ともあれ、SX35、36不明遺構は、形状の類似性からして、同様の遺構上の性格を有していたものと考えられる。

遺物集中地点（図面13、図版22）

僧寺中軸線の東446～448m、北354～355mにおいて比較的まとまって遺物が出土した。ほぼ完形の土師質土器杯（20-4）が逆位の状態で検出されたのをはじめ、土師器杯破片1点、土師器甕破片1点、須恵器杯破片12点、瓦破片2点、礫11点が認められた。しかし土師質土器杯を除くといずれも小破片であり、全形を捉えることはおろか、器形の特徴を捉えることもできないものであった。

須恵器破片及び瓦破片は北側に、礫破片は北西に片寄り傾向がみられた。唯しそうした偏りにおいて、その内に接合関係が必ずしも認められるわけではなく、遺物の分布は散在しているといえよう。

遺物はⅢb層からⅢc層にかけて包含されており、垂直分布幅は23cmに及ぶ。また接合関係は2資料にみられるが、その垂直分布は7cmと14cmを測る。このことは、少なくともこれらの遺物を包含した堆積土が比較的短期間のうちに形成されたものであるといえる。

小穴

B地区においては66個の小穴を検出した。そのうち遺構確認調査に留めたものは過半の40個に及ぶ。発掘調査された小穴は、規模、形状、堆積土においてA地区検出の小穴と大差ないものであり、本調査地区特有の特徴というものは見出せない。

(3) D地区 (図面2)

SK853土坑 (図面13)

D地区2区にあり、僧寺中軸線の東315m、北359mに位置する。東側及び西側は調査区外に延びており、従って遺構の全形を捉えることはできなかった。東西幅243cm、南北上面幅約70cm、同底面幅50cm前後を測る、東西方向に主軸をとる長円形を呈するものと考えられる。一見溝状遺構ともみることができようが、その両延長に於いて同遺構が検出されないことから、本調査区幅に若干の長さを加えた程度の土坑であると判断した。堆積土は、大半を占めるローム土を混入した上層(1、2層)とローム土をほとんど混入しない下層(3層)とに大別できるが、いずれも類似した土質といえる。なお検出面よりの深さは31cmを測り、断面境状を呈する。だが、南側に比して北側の壁の立ち上がりは垂直に近い。またいずれの壁も底面との境は漸移的である。なお出土遺物はなかった。

SK854土坑 (図面13)

僧寺中軸線の東315m、北358mに位置する。既述のSK853土坑により北側を切られている。主軸を東西方向にとる隅丸方形を呈し、短軸150cmを測る。東側が調査地区外に延びており、本遺構の全形を捉えることはできなかった。堆積土はほぼ水平に近い状態で形成されており、ローム土を混入した黒(褐)色土を基調としている。短径の上面幅は149cm、底面幅は95cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、また底面はほぼ平坦である。よって断面形は鍋底形に近い。検出面よりの深さは103cmを測り、底面はN層中まで達している。南東隅では小穴と重複しており、切り合い関係から本土坑が後出するものといえる。なお出土遺物はなかった。

2. 出土遺物

本調査により出土した歴史時代の遺物には、土器、瓦、金属製品などがある。総量はコンテナ8箱ほどである。住居跡出土のものが多く、遺構外包含層出土のものも比較的多く認められた。

遺物の記述は全て一覧表によったが、その表記について以下に補足説明を加える。

(1) 各遺物共通

- イ. 遺物番号は、図面番号と対照にした。例えば「20-4」とあれば、「図面20-4」を示す。
ロ. 出土位置の内、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「床上」は床面直上を意味する。
ハ. 計測値 記号なしは完数值、〔 〕は復原数值、() は残存数值、-は計測不可を表わす。また単位は全てcmである。

(2) 土器類

- イ. 種別 土：土師器、須：須恵器、土師質：土師質土器、灰：灰釉陶器
ただし須恵器杯・碗は還元焰焼成のものを須A、酸化焰焼成のものを須Bとした。

(3) 瓦

鏝瓦（本報告にないので省略）

字瓦（本報告にないので省略）

男瓦・女瓦

- イ. 布目本数 3cm四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす。
ロ. 縄叩き目本数 3cm四方内での縄を表わす。
ハ. 縄の撚り L：縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの。
R：縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの。
ニ. 粘土板合わせ目 佐原真氏の分類S・Zに準ずる。
ホ. 布合わせ目 粘土板合わせ目の分類S・Zに準ずる。
ヘ. 叩き締め円弧 A：叩き締めの円弧が一方のもの。
B：叩き締めの円弧が「八」字状をなすもの。

SI 329 住居跡 土器 一覽

図 版	面 版	種 別	出 土 位 置	口 徑 高 底 径 高台高	形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
14-1	図版 23	土一葉	覆土	(17.03 (8.3))	口縁部は細かく外反する。またはほとんど肥厚しない。体部の張り強い。	体部外面は加脂間のヘラ削り、内面はヘラナデ。口縁部内外面は横位ナデ。部分的に指押えを施す。	体部上半以上片残存。砂粒やや含む。焼成は良好、暗褐色。
14-2	図版 23	土一葉	カマド、 床上、 覆土	(14.43 (16.03) 6.4)	肥厚した口縁部より器厚を減じながら体部に至る。底部には輪状台が付く。体部の張りは強い。	体部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。体部と底部分との境には指押えを加える。口縁部内外面は横位ナデ。	片の破片。砂粒やや含む。二次焼成を受ける。淡褐色。
14-3	図版 23	土一葉	覆土	(21.13 (18.5))	体部はやや扁が強。口縁部は外反し、肥厚する。口唇部は丸味を有する。	体部外面は強いヘラ削り、内面はヘラナデ。削りは粗い。口縁部内外面は横位ナデ。	体部上半以上片残存。二次焼成はやや荒れている。焼成良好。灰褐色。
14-4	図版 23	須A一坏	覆土	(13.03 (7.03) 7.0)	厚手の底部より、軽く内彎して体部は立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、口唇部も肥厚する。	内外面ロクロ調整。底部周辺にヘラ削りを入れる。体部外面の下半に横位ナデ施す。	片の破片。口縁部に自然釉がかかる。白色砂粒多包する。器底内面はやや荒れている。暗灰色。
14-5	図版 23	須A一坏	覆土	— (3.8) (7.43)	平坦な底部から、やや内彎して体部は立ち上がる。底部は僅かに上げ底になる。	回転糸切りのもの、外周にヘラ削りを施す。	底部片の破片。白色砂粒多包する。黒灰色。
14-6	図版 23	須B一坏	覆土	— (1.9) (4.6)	ほぼ平坦な底部からやや内彎気味に体部は立ち上がる。体部に比して底部は薄い。	内外面ロクロ調整。底部は回転糸切りのもの軽いナデを施す。体部内外面にも不定方向のナデを加える。	体部下半以下片の破片。砂粒、赤色スコリア状物質やや含む。淡褐色。
14-7	図版 23	須B一坏	床上、 覆土	(12.63 4.3 (5.11)	やや厚い底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚する。体部の器厚は薄い。	内外面ロクロ調整。底部は回転糸切り。体部下半の内外面に横位ナデを施す。	片の破片。小石、砂粒僅かに含む。淡褐色。
14-8	図版 23	須B一坏	覆土	(12.73 3.8 4.7)	上げ底の底部よりほぼ直線的に体部は立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口唇部は肥厚する。	内外面ロクロ調整。体部下半の外面に横位ナデ施す。口唇部にもナデ加える。底部は回転糸切り。	片残存。砂粒、赤色スコリア状物質含む。暗褐色。
14-9	図版 23	須B一坏	床上、 覆土	(15.43 (4.4)	内彎して立ち上がる体部は、口縁部にかけて器厚を増す。口唇部は丸くおさまる。部分的に口縁部は外反する。	内外面ロクロ調整。口縁部内外面に強いナデ施す。小石を含むため、焼成時に器面に剥落した部分もある。	体部上半以上片の破片。小石、砂粒多く含む。焼成やや不良。暗褐色。
15-1	図版 24	須B一坏	床上	(16.03 5.2 6.7 0.6)	体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。口唇部は少し肥厚する。底部の器厚は薄い。	内外面ロクロ調整。高台貼付け後内面にナデ施す。体部にも部分的に不定方向のナデ加える。	ほぼ完形。砂粒、小石多包する。淡褐色。
15-2	図版 24	須B一坏	覆土	— (4.0) (5.93) 0.3)	体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部の器厚は薄い。	内外面ロクロ調整。高台貼付け後内面に粘土を充填し、内外面にナデ施す。底部内面に不定方向のナデ。	体部下半片残存。砂粒、小石多包する。灰褐色。
15-3	図版 24	須A一坏	覆土	— (3.0) 6.7 0.7)	全体に厚手の造りである。体部はやや内彎気味に立ち上がる。高台部分は平坦におさまる。また高台部は外反する。	内外面ロクロ調整。高台貼付け後内面にナデ施す。体部にも部分的に不定方向のナデ施す。	体部下半以下の破片。白色砂粒、黒色炭多包する。焼成やや不良。暗褐色。
15-4	図版 24	須B一坏	床上、 覆土	— (2.2) 4.7)	突起した底部から僅かに内彎気味に体部は立ち上がる。底部は不整形である。	内外面ロクロ調整。底部は回転糸切りのもの、調整外面から体部底下位にかけてナデ施す。	体部下半以下残存。小石、砂粒多包する。暗褐色。
15-5	図版 24	須A一葉	覆土	(29.43 (8.2))	口縁部は軽く外反して立ち上がるが、端部の外縁の度合いは小さい。	内外面ロクロ調整。口唇部にはつまえるように強いナデを施す。外面にカキ目状底が僅かに認められる。	口縁部端の破片。白色砂粒多包する。黒灰色。

SI 329 住居跡 土器 一 覧

図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 底 高 台 高	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
15-6 図版 24	土師質一 環	覆土	(12.9) 4.2 6.2	体部は球形直線的に立ち上がる。口縁部は丸くおさまる。底部は僅かに突起する。不整形な造りである。	内外面ロクロ調整。そのうち外部に部分的であるがナデを加える。また口唇部にもナデを施す。底部回転糸切り。	片成存。砂粒を多包する。赤色スコリア状物質を含む。外面にスス付着。淡褐色。
15-7 図版 24	土師質一 環	覆土	(12.8) 4.0 〔5.0〕	体部は直線的に大きく開く。口縁部は外反し、やや肥厚する。口唇部は丸くおさまる。底部はやや突起する。	内外面ロクロ調整。口唇部にナデ施す。底部回転糸切り。	片成存。砂粒を多包する。焼成はやや不良。淡褐色。
15-8 図版 24	土師質一 環	覆土	(12.8) 4.0 〔5.2〕	体部は直線的に大きく開く。口縁部は軽外反し、やや肥厚して丸くおさまる。底部はわずかに突起する。	内外面ロクロ調整。口唇部に強いナデ施す。底部回転糸切り。	片成存。砂粒を多包する。赤色スコリア状物質を含む。淡褐色。
15-9 図版 24	土師質一 環	覆土	(15.1) (5.5) —	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で僅かに肥厚して外反する。全体に丸味のある器形を呈する。	内外面ロクロ調整。そのうちナデを加える。口唇部にもナデ施す。	片の破片。砂粒、小石含む。外面に僅かにスス付着。淡褐色。
15-10 図版 24	土師質一 環	床上	— (2.6) 〔 6.4〕	ほぼ平坦な底部より、内彎気味に体部は立ち上がる。	内外面ロクロ調整。底部回転糸切り。	体部下半以下半の破片。砂粒、小石含む。2次焼成受ける。外面にタール状物質付着。褐色。
15-11 図版 25	土師質一 環	覆土	— (3.1) 〔 6.6〕	底部はほぼ平坦。体部はやや内彎しながら立ち上がる。	内外面ロクロ調整ののうち、外面には強いナデ、内面には丁寧な磨きを施す。平滑に仕上げている。	体部下半以下半成存。黒炭多量。淡褐色。
15-12 図版 25	灰一皿	覆土	— (1.4) 〔 7.1〕 0.5	平坦な底部に、やや内彎した高台が付く。底部は縦線など器厚を増すが、体部にかけて再び薄くなる。	ロクロ調整。高台付後内外面に強いナデ。高台部外面はナデにより接合部が快り込む。施釉は体部内面にみられる。	底部片の破片。砂粒微量を含むが、胎土は精選されている。裏地暗褐色。施釉部分灰色。

SI 329 住居跡 鉄製品 一 覧

図 面 図 版	種 別	出 土 位 置	寸 法	備 考
15-13 図版 25	釘	覆土	長さ (4.5) 厚さ 1.0×1.0	頭部は叩かれて壊れている。肩部は内側に角がっている。断面は丸味のある方形を呈する。先端部を欠失している。
15-14 図版 25	鉄鏝	床上	長さ (5.2) 0.3×0.2	切先の破片。鏝はやや丸味あり。鏝に向かうにつれ身幅及び重ね共に減じる。もとより細身造りであったと考えられる。刀子切先破片の可能性もあるが、身幅が狭いことより、片方鉄鏝とした。

SB 83 掘立柱建物跡 土器 一 覧

図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 底 高 台 高	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
16-1 図版 25	須A一 環	3-3柱 穴埋め 土	(12.5) 4.0 〔 6.6〕	体部は内彎し、器厚を減じながら口縁部に至る。口唇部は丸くおさまる。	内外面ロクロ調整。そのうち外面にナデを加える。口唇部にも強いナデが施されている。	片の破片。砂粒やや含む。黒灰色。

SB 81 獨立柱建物跡 土器一覽

図 面 版	種 別 形	出 土 位 置	口 徑 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
16-2 図版 25	須A一坏	4-1柱 穴埋め 土	(13.73 (3.4)	体部は直線的に開く。口縁部は僅かに外反するがほとんど自立たない。口唇部は丸味を有する。	内外面ロタロ調整。そのもの外面に横位ナデを加える。口唇部にもナデを施す。	珪の破片。砂粒僅かに含む。外面にスス付着する。暗灰色。
16-3 図版 25	須A一蓋	1-2柱 穴埋め 土	(20.6) (2.2)	やや扁平な形状を呈する。口縁部の前縁は鋭い。口唇部は平坦で、ナデにより内面側が微分突起している。	内外面ロタロ調整。そのもの天井部にヘラ削りを行なう。外面に部分的なナデを加える。口唇部に強いナデ施す。	珪の破片。砂粒多包する。焼成やや不良。灰色。やや線状あり。

SK 836 土坑 土器一覽

図 面 版	種 別 形	出 土 位 置	口 徑 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
16-4 図版 25	須A一坏	覆土	(12.3) 3.0 〔8.7〕	平坦な底部から体部は内彎気味とはいえずほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は内側より尖り気味におさまる。	内外面ロタロ調整。底部は回転糸切り状。面盤へラ削り。零分的に静止ヘラ削り加える。口唇部に指ナデ施す。	珪残存。砂粒多包する。暗青灰色。細味強い。

P 54 小穴 土器一覽

図 面 版	種 別 形	出 土 位 置	口 徑 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
16-5 図版 25	須A一坏	覆土	— (1.1) 〔7.1〕	平坦な底部から体部は僅かに内彎気味に立ち上がる。	内外面ロタロ調整。底部回転糸切りのも外周にヘラ削りを行なう。また底部内面には強い指ナデ施す。	底部珪の破片。小石若干含む。灰赤褐色。

A地区遺構外 土器一覽

図 面 版	種 別 形	出 土 位 置	口 徑 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
16-6 図版 25	土師質一 甕	I層	(17.03 (7.8)	体部の張りは弱く、ゆるく内彎して立ち上がる。口縁部は軽く外反する。がその前縁は鋭い。	外面は横位ハケののも横位ナデを施す。内面も横位ハケ後横位ナデ。調整は丁家で内外面とも器面は平滑。	体部上半以上珪の破片。砂粒若干含む。外面にスス付着。灰赤褐色。
16-7 図版 25	須A一坏	I層	(12.43 (3.9)	体部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸味を有する。底部はやや上げ底になる。	内外面ロタロ調整。回転糸切りのも底部外周及び体部最下位に削り施す。	珪残存。砂粒若干、また小石微量を含む。灰褐色。底部は内外面とも赤褐色。
16-8 図版 25	須A一坏	I層	(13.53 (3.9)	体部はやや内彎気味に立ち上がり。口縁部は軽く外反する。口唇部は僅かに丸味をもっておさまる。	内外面ロタロ調整。そのもの口唇部及び体部外面にナデを加える。	体部珪の破片。砂粒微量を含む。灰色。
16-9 図版 25	須A一坏	I層	(10.13 (3.8)	体部は強く内彎しながら立ち上がる。口唇部は僅かに肥厚し、丸味を有しておさまる。	内外面ロタロ調整。口唇部に強いナデを施す。底部は回転糸切りののも外周に削りを行なう。	珪の破片。砂粒を微量に含む。外面にスス僅かに付着する。灰色。

A地区遺構外 土 器 一 覧

図 面 図 版	種 別 形 状	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径 高 台 高	器 形 の 特 徴	底 ・ 形 形 の 特 徴	備 考
16 - 10 図 版 25	須A一坏	I層	⑬3.33 (3.6) —	体部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は僅かに肥厚し、丸味を有しておさまる。	内外面ロクロ調整。口唇部に強いナデを施す。	体部⑧の破片。砂粒を微量に含む。外面にスズベかに付着する。灰色。
16 - 11 図 版 25	須A一坏	I層	⑬1.77 —	体部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は肥厚し、丸味を有しておさまる。器壁は全体の薄い。	内外面ロクロ調整。そのうち強いナデを加える。	体部上半分の破片。砂粒、黒雲母やや含む。淡褐色。外面にスズベかに付着。
16 - 12 図 版 26	須A一坏	I層	⑬3.43 (3.8) —	体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部は僅かに外反し、内面より尖り気味におさまる。	内外面ロクロ調整。そのうち口唇部及び体部内面にナデを施す。特に体部内面のナデは強い。	体部⑧の破片。砂粒を微量に含む。灰色。
16 - 13 図 版 28	須A一坏	I層	⑬5.23 (2.8) —	口縁部は軽く外反し、口唇部は肥厚するとともに丸くおさまる。体部はやや開く。	内外面ロクロ調整。そのうち口唇部に強いナデが施される。また体部内面にもナデが加えられる。	体部上半分の破片。砂粒やや含む。淡褐色。焼成良好。
16 - 14 図 版 26	須A一坏	I層	— (1.6) (8.0)	平坦な底部から僅かに内彎気味に立ち上がる。	回転糸切りのもの、底部外周にヘラ削りを施す。ヘラ削りは強度が重複してなされている。	底部⑧の破片。砂粒やや含む。灰色。
17 - 1 図 版 26	須A一坏	I層上面	— (2.3) (7.7)	平坦な底部より内彎しながら体部は立ち上がる。	回転糸切りのもの底部外周及び体部最下位にヘラ削りを施す。体部内外面にはロクロ調整を認める。	体部下半以下⑧破片。砂粒、小石微量を含む。暗灰色。
17 - 2 図 版 26	須A一坏	I層	— (2.0) (7.9)	平坦な底部から一段を有して体部は立ち上がる。	回転糸切りのもの底部外周及び体部最下位にヘラ削りを施す。体部内外面にはロクロ調整を認める。	体部下半以下⑧破片。砂粒、小石微量を含む。暗灰色。
17 - 3 図 版 26	須B一坏	I層	— (1.2) (8.8)	平坦な底部より一段を有して体部は立ち上がる。	底部回転糸切りのもの外周にヘラ削りを施す。体部内外面にはロクロ調整を認める。	底部⑧の破片。砂粒微量を含む。底部中心にスズ付着。淡褐色。
17 - 4 図 版 26	須A一坏	II層上面	— (1.4) (8.8)	平坦な底部よりやや内彎気味に体部は立ち上がる。	底部回転糸切りのもの外周にヘラ削りを施す。体部内外面にはロクロ調整を認める。底部内面にはナデを加える。	底部⑧の破片。砂粒やや含む。黒灰色。
17 - 5 図 版 26	須B一坏	II層上面	— (1.8) (5.7)	底部は平坦で厚味がある。その内面中央はわずかに突起する。また僅かに丸味をもつて体部へと続く。	内外面ロクロ調整。底部回転糸切り。そのうち体部最下位から底部外周にかけてナデを加える。	底部⑧の破片。砂粒、小石やや含む。焼成やや不良。淡褐色。
17 - 6 図 版 26	須A一坏	II層上面	— (0.7) (9.4)	底部はほぼ平坦に近い。また底部内面においては中心部分がやや窪む。	回転糸切りのもの底部外周にヘラ削りを施す。	底部⑧の破片。砂粒やや含む。暗灰色。
17 - 7 図 版 26	須A一坏	I層	— (0.8) (8.0)	底部はほぼ平坦である。	回転糸切りのもの底部外周及び体部最下位にヘラ削りを施す。体部への削りは弱い。	底部⑧の破片。砂粒、小石僅かに含む。焼成やや不良。
17 - 8 図 版 26	須B一坏	I層	— (0.6) (7.4)	平坦な底部より僅かに一段を有して体部は立ち上がる。	回転糸切りのもの底部外周にヘラ削りを施す。底部内面には丁寧なナデを施す。	底部⑧の破片。砂粒やや含む。淡褐色。
17 - 9 図 版 28	須A一坏	II層上面	— (0.8) (8.8)	底部内外面ともほぼ平坦に近い。	回転糸切りのもの底部外周及び体部最下位にヘラ削りを施す。ヘラ削りは底部の大半に及ぶ。	底部⑧の破片。砂粒やや含む。灰色。

A地区遺構外 土 器 一 覧

図 版	種 別	出 土 層	口 径 底 径 高台高	形 状	特 徴	成・装 飾 形 特 徴	備 考
17-10 図版 26	須日一坏	I層	— (0.9) (7.9)	—	底部は平型である。また中央にかけてやや厚みを減じる。	回転糸切り、そのうち底部下位から底部外周にかけて丁寧なナデを加える。	底部の破片。砂粒やや含む。淡褐色～灰褐色。外面にスス付着。
17-11 図版 26	須A一坏	I層	— (0.8) (8.1)	—	底部はほぼ平坦である。全体に内彎気味である。	回転糸切りのうち底部外周及び底部最下位にヘラ削りを施す。底部へのヘラ削りはその大平に及んでいる。	底部の破片。砂粒、海綿骨針多包する。暗灰色。底部に重た焼きによる焼きむらがある。
17-12 図版 26	須日一坏	I層	— (1.3) (4.7)	—	突起した底部より僅かに内彎気味に体面は立ち上がる。	内外面コテ調整。底部は回転糸切り。そのうち底部最下位に強いナデを加える。	底部の破片。砂粒やや含む。外面黒灰色。内面は暗灰色～黒灰色。焼成やや不良。
17-13 図版 26	須A一蓋	Ⅲ層上面	(16.7) 3.0	—	扁平化した宝珠形つまみを有する。天井部から口縁部にかけて内彎し、口縁部はやや外傾する。	内外面コテ調整ののうち天井部にヘラ削りを施す。また天井部中程から口縁部にかけてナデを加える。	片残存。砂粒、小石多包する。黒色スコリア状物質含む。淡黒灰色。
17-14 図版 28	須A一蓋	I層	— (2.4)	—	扁平化した宝珠形つまみを有する。天井部から口縁部にかけてやや丸味をもって内彎する。	内外面コテ調整。そのうち天井部にヘラ削りを施す。	片残存。砂粒、小石やや含む。灰褐色。焼成やや不良。
17-15 図版 26	須A一蓋	I層	— (3.1)	—	宝珠形つまみを有する。平坦な天井部からやや粗曲を強めて口縁部へとびる。	内外面コテ調整ののうち、天井部にヘラ削りを施す。つまみ押合時に粘土を加えるため壁分厚高となる。	天井部片残存。灰色。砂粒、小石多包する。
17-16 図版 27	須A一蓋	I層	(19.0) (1.3)	—	扁平な形態を呈している。口縁部は外傾するがやや鈍い。	内外面コテ調整。そのうち天井部にヘラ削りを施す。やや強い。口唇部にナデ加える。	片の破片。砂粒やや含む。暗灰色。
17-17 図版 27	須A一蓋	I層	(11.8) (1.6)	—	やや小振り。厚手の造りである。壁分反気味に天井部から口縁部へと至り、口縁部では内凹しつつも外傾する。	内外面コテ調整。そのうち天井部にヘラ削りを施す。口縁部に横位ナデを加える。	片の破片。砂粒やや含む。暗灰色。
17-18 図版 27	須A一蓋	I層	(17.4) (2.0)	—	やや扁平な形態を呈している。厚味のある口縁部はやや鋭く外傾する。	内外面コテ調整。そのうち天井部にヘラ削りを施す。口縁部にナデを加える。	片の破片。砂粒やや含む。暗灰色。
18-1 図版 27	須A一瓮	I層	(6.4) 6.3 5.4	—	僅かに胴張りする。底部は平坦である。口縁部は平直に仕上げられている。体部と底部との間は明瞭である。	内外面コテ調整。のち外面に横位ナデ加える。底部は回転糸切りのうち静止ヘラ削り。口唇部には強いナデ加える。	片の破片。砂粒やや含む。焼成良好。灰色。
18-2 図版 27	須A一壺	Ⅲ層上面	(31.0) (3.0)	—	口縁部は外反し、その下縁は鋭く外傾する。口縁部内面においては僅かに一稜を認める。全体にシャープさを欠く。	内外面に横位のナデを認める。口唇部では特に強い。	口縁部の小破片。砂粒やや含む。暗灰色。
18-3 図版 27	須日一壺	Ⅲ層上面	(41.8) (2.9)	—	外反しながら立ち上がる口縁部は、その端部で鋭く外傾する。外面には太い皮線で見状3条に区画された波状文あり。	内外面に横位ナデを認める。特に口縁部では強いナデを施す。	口縁部の小破片。砂粒多包する。また赤色スコリア状物質も含まれる。淡褐色。
18-4 図版 27	須A一壺	Ⅲ層上面	(36.0) (9.4)	—	外反しながら立ち上がる口縁部は、その端部で鋭く外傾する。外面には太い皮線で見状3条に区画された波状文あり。	外面には叩きのうち丁寧にナデ削し、施文する。内面にもナデを行なうが、僅かに同心円文が現れる。	口縁部の小破片。砂粒多包する。暗褐色。

男瓦・女瓦一覽

図 面 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴						備 考	
			凹 面			凸 面		端 面		
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
18-5 図版 27	Ⅱ層上 面	— (4.1) 2.3	—	21×23			斜格子			青灰色。微砂粒多包する。赤色スコリア状物質混入。凹面に「在」の押型文字。
18-6 図版 27	Ⅰ層	— (7.5) 2.2	—	20×20			斜格子			明青灰色。砂粒多包する。硬質。凹面に「多」の押印文字。
18-7 図版 27	Ⅰ層	— (6.5) 8.2 2.7	—	21×24			斜格子		広端面ヘラナデ。	明赤褐色。微砂粒多包する。赤色スコリア状物質混入。凸面に「在」の押型文字。
18-8 図版 27		— (8.7) 2.5	—	18×21			斜格子			明青褐色。微砂粒多包する。やや軟質。凸面に「在」の押型文字。

SI 323 住居跡 土器一覽

図 面 版	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 高 底 径 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	備 考
19-1 図版 28	灰一平瓶	覆土	— (7.1) (15.5)	やや上げ底の底部より一線をなして体部は直線的に立ち上がる。	内外面ロクロ調整。そのうち外面に横位のヘラナデを加える。	1/3の破片。砂粒、小石多包する。焼成良好。灰色。

SI 323 住居跡 男瓦・女瓦一覽

図 面 版	出 土 位 置	狭端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴						備 考	
			凹 面			凸 面		端 面		
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
19-2 図版 28	覆土	24.6 (22.0) 34.5 2.4	粘土粗	24×26	全端縁やや幅広くヘラ削りする。		正格子	叩き締めは狭端から広端へ2度行なったのも逆方向に行なう。	全面一面ヘラ削り。	黒灰色〜赤褐色。微砂粒多包する。やや硬質。凹面に「入」のヘラ書文字。
20-1 図版 29	覆土	— 13.3 (16.4) 2.3	粘土板	24×24	狭端を除く3端縁に幅広くヘラ削りを施す。		斜格子	叩きは疎。	3端は一面のヘラ削り。	女瓦を焼成前に2分割。黄色味のある灰色。砂粒多包する。硬質。
20-2 図版 29	覆土	(10.5) (22.0) 1.8	粘土板	24×25	狭端・右側端部は幅広くヘラ削りを施す。		斜格子	叩きは疎。	狭端は一面、右側面は二〜三面のヘラ削り。	濃青灰色。砂粒多包する。白色微砂粒目立つ。硬質。凹面に「豊」のヘラ書文字。

B地区遺構外 土 器 一 覧

図 面 版	種 別 形 式	出 土 位 置	口 径 底 径 高 台高	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
20 - 3 図版 29	土一蓋 (内黒)	Ⅱ層上 面	(13.9) (1.4)	天井部は幾分丸味をもって立ち上がる。端部は鋭く屈曲し外傾する。端部正面はやや幅広く、下部に一線を有する。	外面は強いナデ。内面には斜位ヘラミガキ施す。端部はつまみ出しにする。	垢の破片。砂粒微量に含む。内外面とも黒色。焼成良好。
20 - 4 図版 29	土師質一 坏	Ⅱ層上 面	(13.0) 4.1 (5.6) 0.3	内彎して立ち上がる体部は、口縁部で強く外反する。体部上半から口縁部にかけて器厚を減じる。	内外面ロゴ調整。口縁部に更に指ナデ。高台貼付後内面に強いナデ施し接合部を強化するが、外面のナデは弱い。	1/2残存。砂粒やや含む。内外面とも2次焼成受ける。暗茶褐色。

B地区遺構外 男 瓦 ・ 女 瓦 一 覧

図 面 版	出 土 位 置	狭 端 広 端 全 長 厚 さ	成 ・ 整 形 の 特 徴				備 考	
			凹 面		凸 面			端 面
		材	布 目	特 徴	印 き	特 徴	特 徴	
20 - 5 図版 29	Ⅱ層上 面	一 一 (9.9) 2.0		18×18		斜格子		

明青灰色。砂粒多包する。白色微砂粒目立つ。硬質。凹面に「壘」のヘラ書文字。

3. 小 結

本調査により検出された歴史時代遺構のうち、主要遺構は住居跡2軒、掘立柱建物跡4軒を数え、発掘調査を行わなかったS I 323住居跡1軒を除くといずれもA地区にある。以下にそれらの年代付けをなしたのち、その性格について考えることにしたい。

住居跡について

まずS I 329住居跡の年代的な位置付けについてである。S I 329住居跡出土土器のうち、図示したものは土師器甕3点、還元焙焼成須恵器杯3点、酸化焙焼成須恵器杯7点、土師質土器杯6点、灰釉陶器皿1点を数える。完形品はなく、全形をほぼ捉え得るものは酸化焙焼成須恵器杯3点、土師質土器杯3点の6点にすぎない。

須恵器杯3点の器形はともに類似しており、口径・底径比 $1/2.4 \sim 1/2.6$ 、径高指数 $30 \sim 34$ を示す。底部は回転承切りのままである。土師質土器杯も近似した形態を示しており、口径・底径比は $1/2.1 \sim 1/2.6$ 、径高指数は $31 \sim 33$ となる。このうち14-7と15-1は床面直上の出土遺物であり、従ってこれらの土器は本住居跡の年代を最もよく示すものといえる。

ところで、A地区においては遺物包含層より回転承切り後底部外周にヘラ削り調整の施された須恵器杯が、本調査地区周辺の中にあっては比較的多く検出された。本住居跡も、遺構が確認された時点では、そうした遺物が数多く出土するものと予測された。だが実際には14-5をはじめ2~3点が認められたにすぎない。しかも、それらはいずれも床面より5~10cmほど浮いた状態で出土したものである。これらを、その出土レベルのみからして、本住居跡廃絶後の堆積土混入品と認定してしまうのは早急かも知れない。例えば、14-2は12点の破片からなり、大半が床面直上のものであるが、中には床面より15cmほど高位のものも含まれていた。このようにレベル差があり、しかも堆積層を越えた接合がみられるような状況にあっては、床面直上の遺物でないといえども、それら全てを後出的な混入品と限定するわけにはいかないであろう。だがこの底部周辺ヘラ削りの杯類の場合、遺物全体に占める割合が極めて少なく、かつこれら以外の土器類と編年上の異相を示すことから、共伴遺物の可能性は極めて低いものとしても差しつかえないと考えられる。

床面直上の遺物では、他に14-2がある。口縁部は肥厚し、ゆるやかに「く」字状に外反する。体部中程を欠くが、張りのある球形を呈するものと考えられる。底部は細く狭まり、輪状の台が付く。器面調整は、外面では頸部以下にヘラ削り、内面にはヘラナデが施されている。

また14-3は大半の破片が堆積土の中位に含まれているが、少量破片は床面直上にある。体部から口縁部にかけて強く屈曲し、外反する。体部の肩の張りは強く、底部へ直線的に転がらぬように、外面は頸部以下にヘラ削り、内面ではヘラナデを行っており、14-2と調整技法において

共通している。

さて、こうした土器に示されたS I 329住居跡の年代観であるが、まず須恵器についてみると、形態や調整技法から南多摩窯址群出土須恵器編年におけるG 5 窯式跡からG 14 窯式にかけての時期に対応できるものと考えられる。実年代としては10世紀後半から11世紀初頭の頃となろう。しかしその時間的幅の中にあっても、より古い段階に位置するものと考えられ、10世紀代に留まるものといえる。

では、このS I 329住居跡が本調査地区周辺の住居跡とどのような関係にあるかについて次に考えたい。

既述したように、周辺の5調査地区において26軒の住居跡が検出されている。繰り返すことになるが、第3次調査で7軒、第51次調査で4軒、第72次調査で7軒、第107次調査で5軒、そして第108・190次調査で3軒となる。

まず平面形についてであるが、本S I 329住居跡は南北3.5m、東西3.9mを測り、東西方向に長軸をとる長方形を呈している。同様に東西方向に長軸をもつものは、26軒中12軒とほぼ半数に及ぶ。しかし同等の規模をもつ住居跡は見当たらない。一方、短軸に対する長軸の割合についてみると、S I 329住居跡ではその指数が1.11となり、12軒の住居跡においても第51次調査検出のS I 147住居跡（指数1.08）や第168・190次調査検出のS I 321住居跡（指数1.09）がある。唯し実数においては前者はS I 329住居跡より一回り大きく、後者は一回り小さい。

次に住居跡の方位について述べる。ここでは、住居跡の方位は、その南・北側辺と僧寺中軸線南北方向との間の角度差をいう。S I 329住居跡の場合は11度東偏している。26軒の住居跡も、大半が東偏しており、西偏するものは僅かに第107次調査で検出された4軒を認めるにすぎない。東偏するものの角度は、最小3度、最大で26度となり、その範囲内に各例は散在するが、ことに10～14度の間にはS I 329住居跡例も含めて6軒の住居跡があり、やや集中する傾向がみられる。しかしこの中でS I 329住居跡と形態的にも近いものは、先述のS I 147住居跡1軒だけであり、また規模の判然としないS I 152住居跡を除くと、南北方向に長軸をとるものである。このように、大半のものが東偏する状況の中で、その角度を特定化して取り出すことは困難である。ともかくも、S I 329住居跡の方位に類似するものが、少なくとも周辺においては普遍的にみられるという事実を呈示しておきたい。

最後にカマドの位置についてである。大半のものが住居跡北側辺或いは東側辺にカマドを設けており、二分され得る。すなわち、東カマドを設けたものは15軒、北カマドを設けたものは9軒を数え、東カマドのものが量的には上回っている。また北カマドといっても、S I 34住居跡やS I 304住居跡のように、住居跡隣近くに寄ったものもある。

以上、住居跡における特徴的な属性を3点ほど取り上げてみた。この3点いずれにおいてもS

I 329住居跡と一致するというような住居跡は、周辺26軒中には見い出せなかった。ただその中でも、比較的類似したものとしては既述のS I 147住居跡や第72次調査検出のS I 190住居跡などが挙げられる。

ところで、第51次調査では4軒の住居跡が検出され、北カマドを設けたものはS I 147住居跡1軒だけであるが、規模不明の1軒を除くといずれの住居跡も東西方向に長軸をとる平面形を呈している。そしてその方位も、各住居跡とも東偏しており、3度から17.5度の間にある。さらにまた、この第51次調査では4軒の掘立柱建物跡も検出されているが、その方位も住居跡とはほぼ揃っており、しかも内3棟は東西方向に長軸を採っている。このように第51次調査では、住居跡のカマド位置を除くと、ほぼ同形態の住居跡や掘立柱建物跡が向きを揃えて並んでいることが明らかとなっている。

第51次調査検出の4軒の住居跡は、南多摩窯址群出土須恵器編年におけるG 5窯式(崎)からG 14窯式にかけての時期に比定されており、S I 329住居跡の年代観と合致するものである。またそうした年代観はS I 190住居跡にもあてはまる。

一方、G 5窯式(崎)以前に遡る住居跡は、これまでみてきた本調査地区周辺に位置する26軒の住居跡の中には見い出せない。すなわち、本S I 329住居跡や第51次調査検出の住居跡が僧寺々城外北方に所在する住居跡の中で、現在判明している限りでは最も古い段階のものとなる。唯し、先述したようにS I 329住居跡付近から底部周辺へラ削りの須恵器坏類などが多く検出されていることから、更に古い段階の住居跡がこの周辺においても発見される可能性は極めて高いといえる。

このようなことから、S I 329住居跡は、僧寺々城外北方に位置する住居跡としては比較的古い段階において築造されたものであり、しかも第51次調査検出の住居跡や掘立柱建物跡、第72次調査検出のS I 190住居跡などと共に併存していた可能性が高いといえる。

掘立柱建物跡について

本調査により検出された4棟の掘立柱建物跡のうち、出土遺物の認められたものはS B 81掘立柱建物跡とS B 83掘立柱建物跡の2棟だけである。しかも前者で2点、後方で1点の計3点の須恵器破片が検出されたにすぎない。出土はいずれも柱穴埋めもどし土内であることから、遺物の年代観が比較的よく遺構の年代観を示すものと考えられるが、各遺物とも破片資料のため、その年代観も明確さに乏しいものである。

これら4棟の掘立柱建物跡は互いに接することなく東西方向に並列し、しかも桁行方向を僧寺中軸線南北方向にほぼ揃えて位置している。このことは、これら4棟が企画性をもって構築された可能性のあることを示している。しかも各掘立柱建物跡の南側桁部分は僧寺中軸線の北368～369mではほぼ揃っていることにも表れているといえる。なお本調査前に行なった試掘調査におい

て、これらの掘立柱建物跡の南側約3mのところに、幅約1mほどの硬質面が東西方向に直線的に延びていた。これは道路状遺構と考えることのできるものである。つまり掘立柱建物跡は南側桁行を意識して企画的に構築されたものといえ、しかもそれらが同時的に存在したものであったことを裏付けよう。

だが一方、4棟の掘立柱建物跡の間隔は同一ではない。すなわち最西端にあるSB81掘立柱建物跡とその東側にあるSB79掘立柱建物跡との間が最も広く7mを測り、SB79掘立柱建物跡とSB83掘立柱建物跡の間及びSB83掘立柱建物跡と最東端のSB82掘立柱建物跡との間はともに1.5mほど離れている。ところが、SB79掘立柱建物跡とSB82掘立柱建物跡との間はやはり7mほどである。このことは、7mおきに計画的に配された3棟の掘立柱建物群の中に、やや後出してSB83掘立柱建物跡が2棟の掘立柱建物跡の間に割り込むように構築された可能性を示唆している。それはまた、SB83掘立柱建物跡の南側桁行が、他の3棟に比べて0.5~1.0m南方に出しており、やや不均整な配置になっていることにも示されているといえよう。

ところで、SB82掘立柱建物跡はSI329住居跡と重複しているが、その柱穴と住居跡との切り合い関係から、掘立柱建物跡が先行することが確かめられている。そして先述したようにSI329住居跡は南多摩窯址群出土須恵器編年のG5窯式(新)からG14窯式に比定し得るものである。従ってSB82掘立柱建物跡はそれよりも古く遡ることになる。

ことにSB81掘立柱建物跡の1-2柱穴埋めもどし土内から須恵器蓋が出土しており、南多摩窯址群出土須恵器編年のG5窯式(新)以前に遡るといえる。

以上のことから、SB79・81・82掘立柱建物跡は10世紀前半に比定でき、SB83掘立柱建物跡も後出的とはいえ、ほぼ時期を等しくしたものと考えられよう。

本調査地区周辺においては、第51次調査で5棟の掘立柱建物跡が検出されているのをはじめ、第72次調査で1棟、第168・190次調査で2棟が発見されている。このうち第168・190次調査で検出されたSB75・76掘立柱建物跡は僧寺中軸線南北方向の北573~578mにあり、武蔵国分寺跡における掘立柱建物跡の中で最北に位置するものである。しかし大半が調査区外に延びているため、全形を把握することはできなかった。

これら8棟のうち、いま述べたSB75・76掘立柱建物跡を除いて、第51次調査検出のSB49掘立柱建物跡以外ではいずれも東西方向棟である。しかも僧寺中軸線東西方向に對し桁行方向は11~15度東偏する。またSB49掘立柱建物跡の桁行方向も僧寺中軸線南北方向に對して13度東偏しており、いずれの掘立柱建物跡も傾きをほぼ等しくしている。加えて、第51次調査検出の住居跡や本調査におけるSI329住居跡の方位とも一致している。このことは、本調査検出の4棟の掘立柱建物跡の傾きとは不等であることを示している。

この方位の違いは、構築時期差に起因するものと考えられる。すなわち、SI329住居跡に先行

することから、本調査検出の4棟の掘立柱建物跡は、周辺の掘立柱建物跡より古く構築された可能性が高いのである。このことはまた、SB79・81掘立柱建物跡の柱穴の大きさや、その柱穴内埋めもどし土にみられる丁寧さなどの点からも背首されよう。

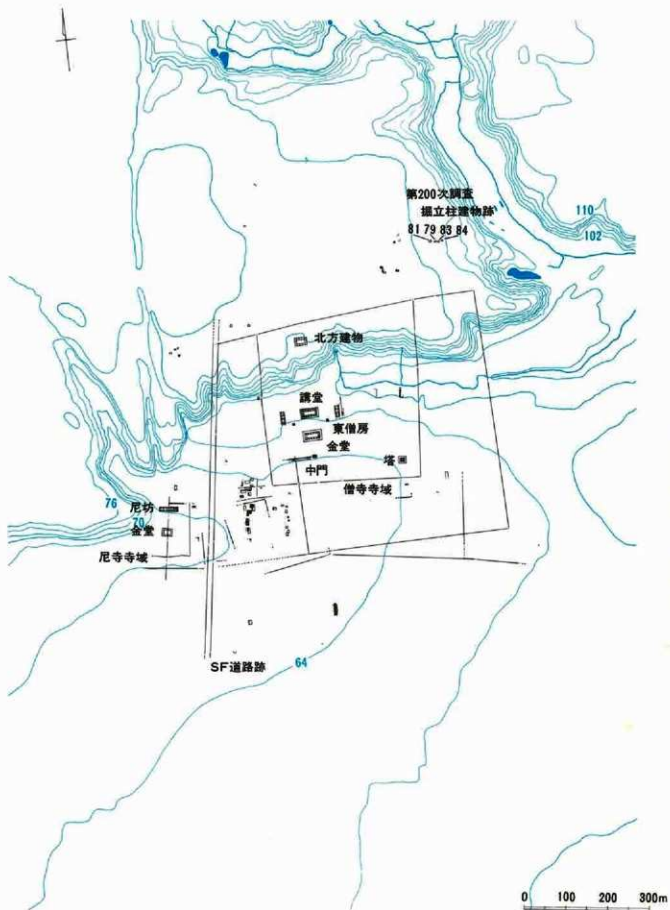
ところで、掘立柱建物跡の検出例は、調査対象地点の密度との関係もあろうが、既して僧寺南方に多く、僧寺々城外北方においては既述したような様相である。こうした有様の中で、掘立柱建物跡が並びを揃えて整然と位置している様相は注目される。これらの建物がどのような正確を有していたかは明らかにし難いが、これらの位置する武蔵野段丘上にあっても、僧寺の機構を担う構造物が構築されていた可能性の高いことを示している。

さてこれまでのことより、少なくともA地区において検出された歴史時代の遺構は2時期に大別できることが明らかになった。そして4棟の掘立柱建物跡は、僧寺々城外北方の構造物の中でも最も古く位置付くものと考えられるのである。

参考文献

- ニ 西脇俊郎・山口辰一 「武蔵国府・国分寺出土土器の変遷(試案)」『文化財の保護』12 1980
- 西脇俊郎 「小結 出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘概報』Ⅳ 1981
- ハ 服部敏史・福田健司 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』6 1979
- ” 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』12 1982
- 早川泉 「小結 出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅳ 1980
- フ 福田信夫 「武蔵国分寺出土の土師質土器について」『東京考古』2 1984
- ” 「武蔵国分寺 四十九年以降調査の成果」『国分寺市史』1986
- ム 武蔵国分寺遺跡調査団 『武蔵国分寺遺跡調査年報1974』 1979
- 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅳ 1980
- 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅴ 1981
- 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅵ 1982
- 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅶ 1985
- 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』Ⅷ 1985

第7図 獨立柱建物跡分布図



V 縄文時代

工事による掘削がⅢc層よりも下位に及ぶ部分について、縄文時代の遺構の発掘調査を行った。当該時期の遺構は調査対象地区全域にみられた。調査対象面積との関係から、遺構の偏在度については明言し難い。なお遺構の検出はⅢc層上～中位面で行ったが、遺物はそれよりも高位のⅢa・Ⅲb層に大半が含まれていた。

I. 検出遺構

本調査により検出された当該時期の遺構は、全調査地区合わせて堅穴状遺構1基、集石3基、土坑9基及び小穴86個を数える。それらは検出面及び遺構内堆積土により当該時期の遺構と判断した。

SX38堅穴状遺構（図面23、図版30、31）

A地区南側西寄りに位置する。南半は調査対象区外に延びていたが、区域を拡張して遺構の全形を捉えた。

規模は東西4.05m、南北4.42mを測り、南北方向に主軸をとる長円形を呈するが、北側にいくに従い、幅の狭まりを強くしており、下肥れ状を呈している。北側では横走する攪乱が入り、また南東側及び南西側にも攪乱を受けているが、形状の把握にはほとんど支障をきたさない。

遺構の掘り方はⅢc層で留まっている。底面は幾分堅固であり、遺構内堆積土やⅢc層とは明瞭に区分される。深さは20cm前後であり、底面はほぼ平坦である。また縁辺部はなだらかに立ち上がる。

遺構内堆積土は上層の黒褐色土（1、2層）と汚れたローム土よりなる下層の暗褐色土（3層）とに大別できるが、各層とも焼土粒や炭化物などは全く含まれていなかった。

底面には11個、上縁辺に接して5個の小穴が検出された。中でも比較的深さのある小穴は4個を認めるが、いずれも底面に掘り込まれたものである。しかも内3個は比較的壁に近い位置にある。小穴の深さは24～47cmを測る。小穴内堆積土は各々で違いはあるが、基本的には遺構内堆積土と共通したものである。

遺物は明確さを欠くが、早期と思われる土器片2点、中期の土器片2点及び礫14点が出土したにすぎない。攪乱による影響もあろうが、本来的に包含遺物量が少なかったのであろう。遺物は遺構内全体に散在している。また土器片は底面よりいずれも高位にあり、しかも小破片であるため本遺構の年代観を示す資料となし難いものである。

さて本遺構の性格であるが、第249次調査では不整形円形を呈し、壁の立ち上がりの低い住居跡2軒が重複して検出された。包含遺物量は少ないが、早期の土器がその中では主体を占めていた。第51次調査でも隅丸長方形を呈すると考えられる住居跡が1軒検出されている。その壁の立ち上がりは検出面より26cmを測るにすぎない。出土した土器数は多く、180点を数える。そしてその中でも燃糸文系土器が74パーセントを占める。また本遺構及び第51、第249次調査で検出された住居跡はⅢb層から掘り込まれたであろうとの予測がなされながらも、検出はⅢc層上面でなされたものである。このようなことからすると、本SX38竪穴状遺構もまた縄文時代早期に属する竪穴住居跡の可能性が高いといえよう。

SS27集石（図面24、図版32）

B地区南西側に位置する。礫の平面分布は東西2.7m、南北1.8mの範囲内におさまるが、西半に密集する傾向が認められる。垂直分布は20cmほどの幅にあり、しかも大半の礫は検出面より10cm以内に含まれている。また垂直分布幅の狭さは、3点の接合資料の高低が最大3cmであることにも示されている。なお礫はⅢb～Ⅲc層中に包含されていた。

第3表 集石構成礦属性表

集石	属 性	破 損 率							造 成				スス・タール状 物 質 付 着				焼 け 面 と スス・タール 付着の合致度				形 態				石 材	
		完 非 完 形							無 表 内面まで				無 表 内面まで				円 形 長円形				砂 岩	チ ヤ ト				
		軽 破 損			重 破 損		の し	み	下	度	の し	み	下	度	の し	み	下	度	の し	み			下	度	の し	み
		一回性 破 損	複数性 破 損	重 破 損	面	表															表	面				
		核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核	割片	核
SS27	60	4 (6.5)	6 (10.4)	1 (1.7)	19 (30.7)	9 (15.0)	8 (13.3)	13 (21.7)	1 (1.7)	4 (6.6)	2 (3.4)	53 (88.3)	21 (35.0)	19 (31.7)	20 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	38 (62.4)	1 (2.0)	9 (15.0)	9 (15.0)	31 (51.7)	11 (18.3)	47 (78.3)	13 (21.7)	
SS28	105	29 (27.5)	10 (9.5)	6 (5.7)	18 (17.2)	13 (12.4)	8 (7.6)	21 (20.0)	13 (12.4)	23 (21.9)	5 (4.8)	64 (60.9)	76 (72.4)	25 (23.8)	3 (2.9)	1 (0.9)	1 (1.0)	18 (17.2)	10 (9.5)	17 (16.2)	16 (15.2)	49 (46.7)	23 (21.9)	85 (81.0)	20 (19.0)	
SS29	604	51 (8.4)	60 (9.3)	9 (1.5)	132 (21.9)	85 (14.1)	60 (9.9)	207 (34.3)	6 (1.0)	66 (10.9)	14 (2.3)	518 (85.8)	133 (22.0)	180 (29.8)	188 (31.1)	103 (17.1)	105 (22.3)	242 (51.4)	124 (26.3)	83 (13.7)	133 (22.0)	214 (35.5)	174 (28.8)	566 (93.7)	38 (6.3)	

第4表 集石構成埋込大きさと別点数表

集石 大きさ (単位:cm)	S S 27		S S 28		S S 29	
	長 径	短 径	長 径	短 径	長 径	短 径
0-0.9	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.2)
1.0-1.9	0(0.0)	3(5.0)	1(1.0)	12(11.4)	1(0.2)	48(8.0)
2.0-2.9	2(3.3)	5(8.3)	23(21.9)	42(40.0)	45(7.5)	167(27.6)
3.0-3.9	2(3.3)	10(16.7)	27(25.7)	19(18.1)	109(18.1)	174(28.8)
4.0-4.9	6(10.0)	12(20.0)	18(17.1)	11(10.4)	138(22.8)	138(22.8)
5.0-5.9	13(21.7)	13(21.7)	10(9.5)	2(1.9)	144(23.8)	61(10.1)
6.0-6.9	4(6.7)	6(10.0)	4(3.8)	4(3.8)	81(13.4)	11(1.8)
7.0-7.9	9(15.0)	4(6.7)	1(1.0)	1(1.0)	43(7.1)	3(0.5)
8.0-8.9	9(15.0)	5(8.3)	3(2.9)	3(2.9)	26(4.3)	1(0.2)
9.0-9.9	2(3.3)	2(3.3)	1(1.0)	1(1.0)	9(1.5)	0(0.0)
10.0-10.9	2(3.3)	0(0.0)	2(1.9)	6(5.7)	5(0.8)	0(0.0)
11.0-11.9	6(10.0)	0(0.0)	4(3.8)	2(1.9)	2(0.3)	0(0.0)
12.0-12.9	2(3.3)	0(0.0)	4(3.8)	1(1.0)	0(0.0)	0(0.0)
13.0-13.9	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.2)	0(0.0)
14.0-	3(5.0)	0(0.0)	7(6.6)	1(1.0)	0(0.0)	0(0.0)

第5表 集石構成埋込重量別点数表

集石 重量 (単位:g)	S S 27	S S 28	S S 29
	0-50	16(26.6)	74(70.6)
51-100	11(18.3)	10(9.5)	152(25.2)
101-150	7(11.6)	3(2.9)	77(12.7)
151-200	2(3.3)	0(0.0)	25(4.1)
201-250	4(6.7)	0(0.0)	8(1.3)
251-300	2(3.3)	1(0.9)	5(0.8)
301-350	3(5.0)	0(0.0)	3(0.5)
351-400	4(6.7)	0(0.0)	3(0.5)
401-450	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)
451-500	4(6.7)	1(0.9)	2(0.4)
501-550	2(3.3)	0(0.0)	0(0.0)
551-600	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)
601-650	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)
651-700	1(1.7)	0(0.0)	0(0.0)
701-	1(1.7)	15(14.3)	1(0.2)

集石の下には土坑は検出されず、また、僅かに暗い色調であることを除けば、礫包含土はⅢb或いはⅢc層と変わるところはなかった。従って本集石はほぼ水平に礫が分布するだけのものである。

礫のほかには土器片3点が検出された。条痕文系土器、堀之内式土器と型式不明の土器片であり、いずれも小破片である。

SS28集石（図面24、図版32）

B地区北側の中央に位置する。礫の平面分布は東西2.2m、南北2.0mの範囲にあるが、ほぼ中心の東西0.6m、南北0.4mの間に密集している。垂直分布は約30cmの間にあるが、中心部ほど下位のものが認められ、側面から見るとスリバナ状を呈している。

集石下には土坑が検出された。土坑は北東-南西に主軸をとり、長径181cm、短径119cmを測る。礫のほとんどはこの土坑の範囲上にある。深さは最大31cmを測る。底面は凹凸が激しい。また壁の立ち上がりはゆるやかである。

土坑内堆積土は3層に分けられる。うち礫を含むのは最上層（1層）のみである。また含まれた礫は比較的小振りのものが多い。

本集石の礫は割合に完形品が多い。また接合作業に努めたが、接合した資料は認められなかった。

出土遺物としては土器片13点がみられた。その内分けは条痕文系土器片1点、阿玉台式土器片1点、加曾利E式土器片1点、称名寺式土器片1点、堀之内式土器片5点（うち1点は31-21）、型式不明土器片4点となり、中期以降のものが多い。これらの土器片は礫と混在していた。

この集石の所属時期は、堀之内式土器片が多いとはいえ5片を数えるにすぎず、またいずれの土器片も同様の出土状態にあることから、後期のものとは一概には決し難い。

SS29集石（図面24、図版33）

A地区北西隅近くに位置している。南側が調査対象区外に延びていたため、対象区を拡張して全体を把握した。平面分布は東西4.3m、南北4.5mを測る。中心部で僅かに密集しているものの全体的に散在する傾向にある。垂直分布は25cmの範囲内にあるが、ことに検出面より15cmの間に集中している。

集石下に土坑が検出された。土坑は集石分布範囲の西寄りに位置している。その規模は東西244cm、南北279cmを測る不整形を呈している。深さは15cm前後と浅い。底面は凹凸が激しい。壁の立ち上がりはなだらかで、底面との境は漸移的である。断面形は皿状を呈している。

土坑内堆積土は3層に区分されるが、層間の境はやや不明瞭である。また各層とも礫を混入し

ておらず、礫は土坑内堆積土上面にのみ認められる。従って同じく集石下土坑が検出されたとはいえ、SS28集石のように土坑内に礫が落ち込んだものとは様相を異にしている。

本集石の礫は完形のもの少なく、概して破損され小さくなったものが多い。接合資料は3点認められた。それらは、平面分布においては20～28cm、垂直分布においては1～3cmの距離があるにすぎない。

出土遺物としては土器小破片2点が検出されたが、ともに型式不明のものである。従って本集石の所属時期も明らかにはし難い。

SK851土坑（図面25）

A地区北側中央に位置する。西半は調査対象区外に延びており、全形を捉えることはできなかったが、南北方向に主軸をとる長円形を呈するものと考えられる。上面幅は南北方向で136cm、底面幅は119cmを測る。底面にはやや凹凸がみられる。深さは20cm前後で、壁の立ち上がりはなだらかである。堆積土はローム土を混入した上層の明黒褐色土（1、2層）、同じくローム土を混入した下層の暗黄褐色土（3、5層）、そして壁際のローム土をほとんど混入しない明黒褐色土とに大別できる。出土遺物はなかった。

SK852土坑（図面25、図版34）

A地区北側中央に位置し、SK851土坑の東6mにある。西側に2個の小穴が重複しているが、形状の把握に支障はない。上面の長径133cm、短径118cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。底面は土坑のほぼ中心にある。底面の長軸は49cm、短軸は19cmを測り、東西方向に主軸をとる不整形長方形を示している。上面に比して底面は狭い。深さは59cmを測り、壁の立ち上がりは歪である。堆積土は9層に区分されるが、ローム土を主体とした黄褐色土が基調をなしている。なお本調査で検出された縄文時代土坑の中で、このSK852土坑が最も深く掘り込まれたものである。出土遺物はなかった。

SK855土坑（図面25、図版34）

A地区南西側に位置し、SX38堅穴状遺構の西4.5mにある。大半が調査対象区外南に延びているため、北側上縁辺の一部を検出したにすぎない。現況における上面東西長は197cm、深さは28cmを測るが、最大径及び深度は更にそれを上回るものといえる。壁はゆるやかに立ち上がりつつ、上縁辺近くでは直立気味となる。堆積土は暗味のある上層（1～3層）とローム土を主とした下層（4層）とに大別できる。なお出土遺物はなかった。

SK856土坑 (図面25、図版34)

A地区南側中央に位置する。北側には攪乱が入り、また北東側は調査対象区外に延びている。そのため全形の4分の3を捉えたに留まるが、上面幅150~160cmほどの不整形形或いは隅丸三角形を呈するものと考えられる。深さは最大39cmを測り、底面にはやや起伏がある。壁は直線的に立ち上がる。堆積土は上部中央の黒褐色土(1、2層)と壁際及び底面上の黄褐色土を中心とした層(3~7層)とに大別できる。また後者は包含粒子量の少ないものである。出土遺物はなかった。

SK812土坑 (図面25)

B地区中央東寄りに位置する。上面幅は95cm、底面幅88cmほどを測り、平面形は隅丸方形を呈している。深さは約10cmと浅い。底面は中央に向かって僅かに下がっていくが、その傾斜は余り目立たない。堆積土は2層に区分されるが、ともに類似した土質である。出土遺物はなかった。

SK813土坑 (図面25、図版35)

B地区の中央僅かに西寄りに位置する。上面幅は東西長118cm、南北長119cmを測り、平面形は隅丸三角形を呈している。底面は長軸76cm、短軸64cmを測り、南北に主軸をとる不整形隅丸長方形である。深さは12cmと浅い。しかしこれは検出面が下がりすぎていることにも原因の一端があり、本来は25~30cmほどを測るものと考えられる。壁の立ち上がりはなだらかで、床との境は漸移的である。断面形は皿状を呈する。堆積土は上下2層に区分され、下層でローム土がより多く混入されていた。出土遺物はなかった。

SK814土坑 (図面25)

B地区中央僅か東寄りに位置する。上面幅長径145cm、短径136cm、底面幅長径126cm、短径122cmを測り、平面形は南北に主軸をとる長円形を呈する。しかも丸味のある整った形状をしている。深さは13cmと浅い。底面は平坦であり、壁の立ち上がりは角度がある。つまり底面と壁との境は明瞭である。底面の面積が広いにもかかわらず、落ち込みなどは見当たらなかった。堆積土は締まりに欠ける上層の暗褐色(1層)とローム土を主体とした下層の黄(褐)色土とに大別される。出土遺物はなかった。

SK815土坑 (図面25、図版35)

B地区南側の中央に位置し、南壁より40cm北方にある。上面幅長径98cm、短径81cm、底面幅長径79cm、短径62cmを測る。平面形は長円形を呈し、北東-南西方向に主軸をとる。深さは最大12

cmと浅い。また南側に僅かに傾斜している。堆積土は上層の暗褐色土（1、2層）と下層の暗黄褐色土（3、4層）とに大別できる。出土遺物としては土器片2点が検出された。1点は加曾利E式土器の破片であり、他の1点は型式不明である。

S K 816土坑（図面25、図版35）

B地区南側の中央に位置し、南壁とはほぼ接している。上面幅長径157cm、短径122cm、底面幅長径78cm、短径45cmを測る。平面形は南北方向やや東寄りに主軸をとる楕円形を呈している。その北側は南側に比して幅をより狭めている。また南側では小穴2基が重複している。深さは18cmほどで、底面は中央に向かって若干下がっていく。北側の壁はほぼ直立している。堆積土は上下2層に区別される。出土遺物はなかった。

小穴

縄文時代に属すると考えられる小穴は全地区合わせて86個を数える。だが縄文時代発掘対象地域には制限があるため、どの地区にあっても鳥瞰視の見方はなし難い。従って本調査における小穴の位置付けも難しいものである。

小穴の規模は概して上面径20～60cm、深さ10～50cmを測る。また堆積土は褐色土或いは黄褐色土を基調としたものが多く、しかもローム土やローム粒を混入する傾向にあるといえる。なお底面はいずれもⅣ層中に留まっており、Ⅴ層まで達したものは認められなかった。

上述したように、小穴の分布についての全体的把握がなし得ないため断定することはできないが、小穴の分布が偏在するという傾向にある地点はみられなかった。

遺物が出土した例は極めて少なく、礫出土のものを除くと、P81小穴で阿玉台式土器の破片1点、P90小穴で勝坂式土器破片1点、そしてP93小穴で沈線文系土器破片1点の出土がみられたにすぎない。それらはいずれも小破片であり、図示し得なかった。

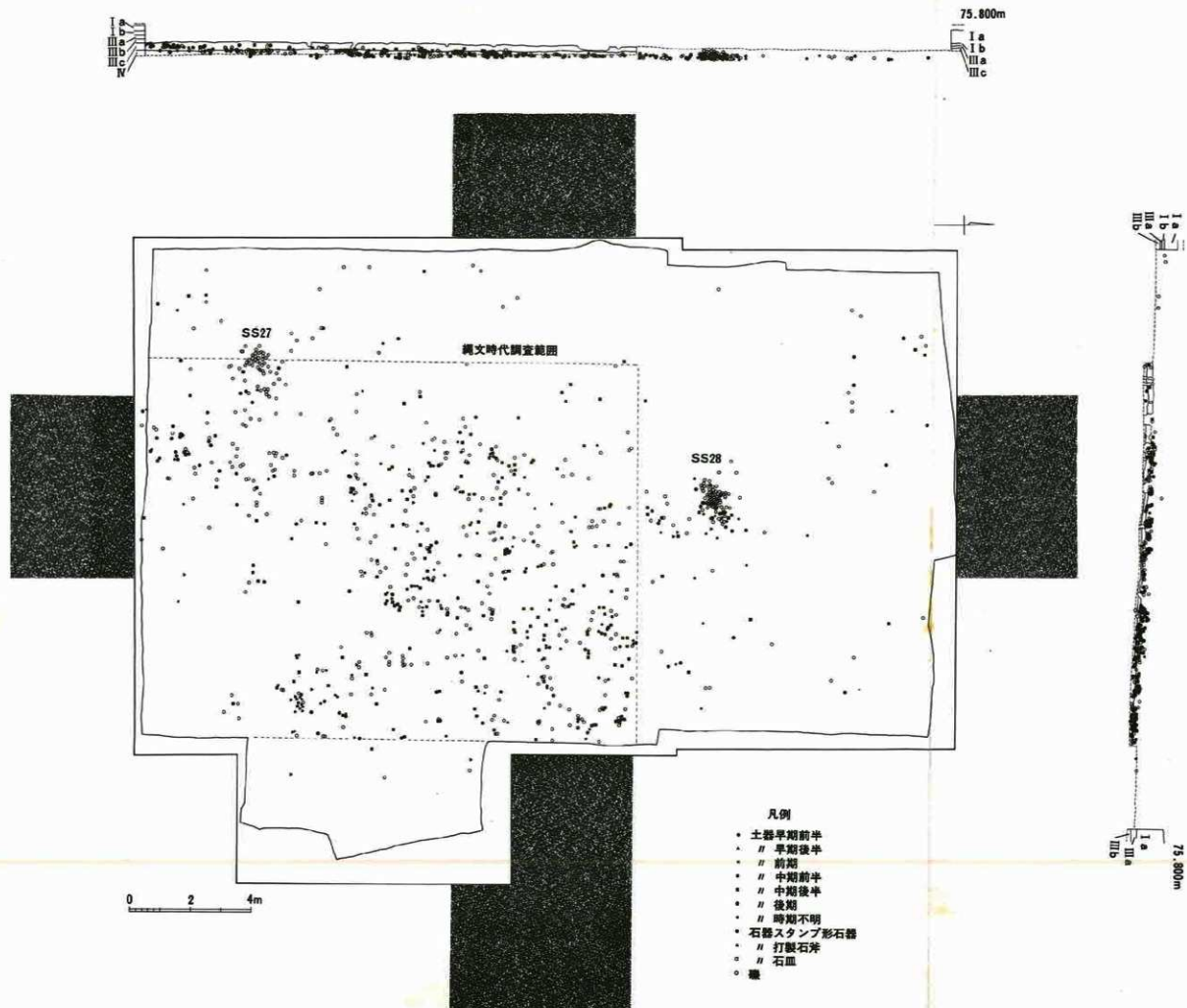
こうした小穴の機能についても、明らかにし難いというのが実情である。唯し、検出された小穴の中で、何らかの構造物の一部をなすようなものは認められなかった。

2. 遺物包含層の発掘

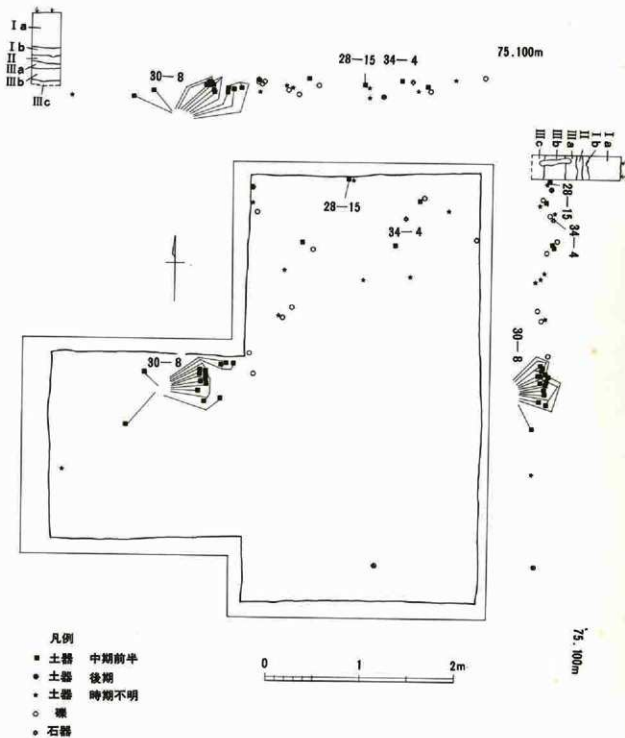
(1) B地区（第8図）

縄文時代発掘調査対象部分がまとまりをもって広がる本調査地区では、当該時期の遺物が数多く検出された。その数量は土器片496点、石器24点、礫796点に及ぶ。土器型式の内訳は第3表に依られたいが、型式不明土器を除くと勝坂式土器破片が突出して多い。また加曾利E式土器や沈線文系土器の破片数も、勝坂式のものと比べると3分の1ほどにすぎないが、全体の割合からす

第8図 B地区縄文時代遺物出土分布図



第9图 D地区3区縄文時代遺物出土分布图



ると多いものである。石器では打製石斧が最も多く、12点を数える。次いで磨石4点となる。

土器の平面分布についていえば、南側中央には検出点数は少なく、それに対し調査地区中央に集中する傾向が認められる。ことに中期後半の土器が多い。また中期前半の土器は本調査地区南辺やや西寄りに数十点まとまって検出され、早期前半の土器も西辺南寄りにかたまつて出土した。しかしこうした地点的集中の様相は顕著なものではなく、大局的には本調査地区全体に各型式のものが散在するといえよう。そのことはまた石器についてもいえ、石器の種類により偏在するという状況はみられない。

次いで垂直分布であるが、調査地区全体が東から西へ傾斜しており、また僅かながら南方へも下降していることから、投影図による表示では捉え難い面もある。だが遺物は概してⅢb層からⅢc層上面にかけて大半が包含されているものといえる。そしてまた、土器型式や石器の種類の違いによる層位差は認められない。

(2) D地区3区(第9図)

本調査地区においても比較的まとまりのある遺物群を検出した。すなわち土器片29点、石器1点、礫8点を数える。

土器片のうち中期前半のものが最多を占め23点を数える。しかも本調査地区の西側に突出した部分の東寄りで見出された一群は、大半が接合しはほぼ完形品となった(30-8)。中期前半の土器に次いで型式不明土器片9点、後期の土器片5点となる。唯し、その内には一括して取り上げたものも含まれている。

石器は打製石斧(28-15)を検出したのみである。礫は8点検出された。いずれも破損礫であり、またそれらに接合関係は認められなかった。

これらの遺物の平面分布は、まず北半に偏在しているといえる。だが30-8が集中するのを除けば幾分散在している。また30-8の破片の広がり東西50cm、南北40cmの範囲におさまる。

ところで本調査地区は西から東へ緩傾斜する地形にある。従って東西投影図では大半がⅢc層上部に含まれているように映るが、南北投影図からは、多くがⅢb層に含まれている様相が窺われる。結論的にいえば、これらの遺物はⅢb層に含まれるものが主体的であり、一部Ⅲc層上面にかかるものもあるという状態といえる。またこうした状況は、先述のB地区やその他の地区の有様にも共通したものである。

3. 出土遺物

A地区、B地区をはじめ、調査区全域において土器、石器、礫などの出土をみた。遺物は表土、黒色土、Ⅲa層～Ⅲc層より出土したが、Ⅲc層では量的に少なくなる。またA地区よりも調査

面積の狭いB地区での出土遺物量が多かった。

特定の遺物や同時期の土器が偏在するというような傾向はみられず、いずれの遺物も包含層中全体に散在していた。また垂直分布にあっても、時期差のある遺物が層位を異にして集中することもなかった。

(1) 土器

出土土器の大部分は遺構に伴わない包含層中のものである。よってここでは遺構の内外を問わず、一括して扱うことにする。

出土した土器のうち、口縁部から底部まである程度原形を知り得たものは29-1の1個体にすぎない。大半のものは小破片となって出土したものである。また出土量はB地区が多く、次いでA地区となる。

さて本調査により出土した土器は型式不明のものを除いて次に示す11群に大別することができる。

第1群	早期前半	糞米文系土器
第2群	早期前半	押型文系土器
第3群	早期前半	沈線文系土器
第4群	早期後半	条痕文系土器
第5群	前期	諸磯B式土器
第6群	中期初頭	五領ケ台式土器
第7群	中期前半	阿玉台式土器
第8群	中期前半	勝坂式土器
第9群	中期後半	加曾利E式土器
第10群	後期	称名寺式土器
第11群	後期	堀之内式土器

型式不明のものが多いが、それ以外では8群が最も多い。次いで9群、3群、7群、11群、4群、6群、5群、10群、1群、2群となり、2群の押型文系土器は僅かに1点を検出したにすぎない。

		1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	8群	9群	10群	11群	型式不明
A 地 区	SX38						1	1					2
	SS29												2
	遺構外	3		18	6	10	13	21	67	32	3	19	73
	小計	3		18	6	10	14	22	67	32	3	19	77
B 地 区	SS27			1	1							1	1
	SS28				1			1		1	1	5	4
	SK815									1			1
	小穴			1				1	1				
	遺構外	5	1	46	17	5	8	29	141	56	9	21	158
	小計	5	1	48	19	5	8	31	142	58	10	27	164
C 地 区	遺構外												
D 地 区	1区												
	2区												
	3区								23		1	4	9
総計	8	1	66	25	15	22	53	232	90	14	50	246	

第6表 縄文時代出土土器一覽表

第1群 早期前半 鬚文系土器 (図面26)

26-1は底部と体部下位の破片資料であり、接合はしないが、器面調整技法および色調・胎土から同一個体の破片であると判断した。まず器面調整からみると、両破片とも外面はヘラ状工具により強くナデられ研磨されている。唯し体部下位破片で縦位方向に施されているのに対し、底部では縦位を基調としながらもやや不定方向の調整となっている。内面においても、強いヘラナデがなされており、また底部には指頭圧痕がみられる。色調は外面淡褐色、内面黒灰色。胎土に砂粒を多包する。丸底の大型深鉢形を呈するものと考えられる。本資料は鬚文系土器終末期の無土器に比定し得るものである。

第2群 早期前半 押型文系土器 (図面26)

26-2は1つ1つの山が大きい山形押型文で、横位に密接に施文されている。拓影左上にみられるのは原体の末端加工か、楕円押型文であるのかは判然としない。山形押型文は1山が大きく、鋭角的である。陰部(原体の陽部)の方が陽部(原体の陰刻部)よりも幅広い。原体は反復箇所が不鮮明のため復元しづらいが、一周1山の場合6.4mm、一周2山の場合は12.7mmとなり、後者で

あるとすれば極めて太い原体となる。色調は内外面淡褐色。焼成は良好である。砂粒が多包されている。

第3群 早期前半 沈線文系土器 (図面26~27)

1類 田戸下層式に比定し得るものを一括した。

26-3、4は口縁部破片資料である。接合はしないが同一個体であるとみられる。口縁部は外反しながら立ち上がっており、キャリバー形を呈すると考えられる。口唇部内面を肥厚させ、内側に強く張り出させている。また頂部は平坦に仕上げられている。頂部には2列の爪形の連続刺突文(以下爪形文と呼ぶ)を施したのち、その間に2条の沈線文を、そして内側の爪形文の更に内寄りに1条の沈線文を施している。口縁部から体部にかけては3条の沈線文、爪形文、沈線文がみられる。なお爪形文の施文は沈線文に先行している。色調は淡褐色を呈する。砂粒を多包しており、少し脆い。

26-5も口縁部破片資料である。口唇部内側への屈曲は強く、かつ頂部はゆるやかな肥みをもっており、26-3、4に比して造りはよい。口縁部の頂部には、連続刺突文とそれを挟んだ左右に3条の縦位沈線文が認められ、更にその外側には横走する2条の連続刺突文と、その内側の刺突文を挟んだ2条の沈線文が施されている。口縁部から体部にかけては、上から3条の沈線文、爪形文、3条の沈線文そして矢羽根状文が認められる。また沈線文は爪形文、矢羽根状文に後出して施文されている。色調は暗褐色を呈する。砂粒を多包しているが、26-3、4に比して堅緻である。

26-6~13は体部の破片資料である。何れにも爪形文や矢羽根状文、沈線文が認められる。しかし26-6~8に比して26-9~13では施文間隔が広がっている。まずは各資料についてみていく。

26-6は爪形文を挟んで上下に3条の沈線文を施す。沈線文に直交した縦位の沈線文に区画された部分には、最下位の沈線文を切って横走する爪形文、その下には1条と2条の沈線文とそれに挟まれた爪形文、2条の沈線文の下方の爪形文とがそれぞれ斜位に施されている。横走する2列の爪形文のうち上列は沈線文に先行しているが、下列は下位の3条の沈線文よりも後出する。そして下列の爪形文を切って斜位の爪形文が施されているが、斜位の爪形文は2列ともに斜位の沈線文に先行している。このように26-6や、先述の26-3~5の例では、爪形文と沈線文とを1つの組合わせと捉えた場合、爪形文の施文ののち沈線文が施されているのである。なお26-6は砂粒を多包しているが、割合に焼成はよく、堅緻である。色調は外面黒褐色、内面淡褐色を呈している。26-7、8はともに体部の小破片である。色調や胎土・焼成具合から同一個体の破片であると思われる。すなわち、色調は内外面ともに淡褐色を呈し、砂粒・小石を多包している。

焼成は良い。26-7には横位の沈線文と爪形文、斜位の沈線文がみられる。また26-8ではいずれも横位の矢羽根状文、沈線文、爪形文が認められる。これらの文様の先後関係を直接示した箇所は見当たらないが、恐らく上記の例と等しいものと考えられる。

26-9では沈線文が認められるにすぎない。色調は外面赤褐色、内面黄褐色を呈している。砂粒を多包しており、また焼成も悪く、極めて脆くなっている。

26-10~13の破片資料も同一個体のものと思われる。いずれも内外面橙褐色を呈しており、砂粒や小石を多包しているが焼成はよく堅緻である。また黒色雲母粒が少なからず含まれている。26-10では上から現状3条の沈線文、爪形文、4条の沈線文、爪形文、4条の沈線文が認められるが、その施文間隔は広くなっている。また沈線文は部分的に途切れ、接続する沈線文との間には不整合がみられる。ところで、施文間隔の広がったにもかかわらず、爪形文と沈線文とが重複する部分が1箇所ある。そこでは沈線文に遅れて爪形文が施されていることが明らかである。26-6のように沈線文を切って施された爪形文もあることを考慮しつつも、下半の爪形文と沈線文とを少なくともひとつの組み合わせと捉えるならば、26-6~8にみられた施文順序とは逆転することになろう。すなわち本例の場合では沈線文を施したのち、沈線文間に爪形文を配していったものと考えられる。26-11も横位の沈線文と爪形文とが認められる。沈線文には不整合部分が顕著に見られる。26-12は外反し立ち上がることから、体部上半の破片であると思われる。斜行する沈線文と爪形文、そして刻目文が認められる。刻目文はその上下の沈線文を切っており、沈線文施文後に刻目文が施されていることを知る。最下位の斜走沈線文の更には横位の沈線文が現状で3条みられる。26-13は小破片であり、斜位と横位の沈線文が認められるにすぎない。

以上のように26-6~8と26-10~13とは明らかに異なった様相が窺われる。まず施文順序についていえば、前者は爪形文施文後に沈線文が施されているのに対し、後者では沈線文が先で爪形文が後出している。施文間隔は、前者では狭いが後者では広い。また前者には矢羽根状文が施されているが、後者では刻目文となっている。また後者においては、沈線文に不整合な部分が見られる。そして沈線文の間隔も、前者では条間0.2~0.3cm程度であるが、後者では0.4~0.8cmとなり、爪形文の施文帯は前者で0.9cm、後者では1.0cm以上となる。

26-14は口縁部破片資料である。外面に文様は認められないが、横位を基調として強く研磨されており、器壁外面は平滑になっている。口縁部内面は削がれており、一稜を有して体部へと続くが、口縁部内面にも横位を基調とした磨きがなされている。また口縁部は僅かに外反する。内外面黒褐色を呈する。砂粒を多包し、ことに金雲母粒が多く認められる。焼成はよい。研磨のおよばない部分の器面は少し粗い。

26-15は底部破片資料である。外面には比較的幅広の原体による縦位の研磨がみられる。胎土には砂粒を多包する。焼成は良い。色調は内外面とも暗茶褐色を呈している。

26-16~28及び27-1~9は同一個体の破片資料或いは極めて類似性の高い資料である。いずれも内外面赤(茶)褐色を呈し、胎土には砂粒を多包する。焼成はやや不良で、器面は脆い。全体に厚手の造りである。

26-16~20は口縁部外面の破片資料である。いずれも口縁部に断面三角形の凸帯を貼付することで口縁部外面を肥厚させており、その上に施文している。しかし資料間には形態上、文様上の差異も認められる。唯し、その差異が個体差であるか、部位差であるかについては、現況では明言し難い。26-16は口縁部破片資料中最も造りの良いものである。一稜を有して張り出す口縁部の上面には太目の沈線により屈曲した文様が施され、下面にはそうした文様と更に直交した沈線文が加えられ、一見縦方向の鋸歯文状を呈している。口縁部下端には太い沈線文、そしてその下には円形刺突文とやや太目の沈線文とがみられる。26-17、18の口縁部の張り出しは、上面の広さに比して下面は0.5cmほどと狭く、よって施文は上面のみになされている。それ以下の文様構成は26-16と変わらない。なお26-16・17と26-18とでは口縁部上面の施文方向が逆になっている。26-18も口縁部張り出しの下面幅は狭いが、施文されている。すなわち上面の太沈線による屈曲した文様の下には同方向の刺突状の沈線文が加えられており、26-16にみられた文様構図とはやや趣を異にしている。だがそれ以下にみられる太目の沈線文、円形刺突文は変わるところはない。なお円形刺突文についていえば、いずれも竹管状の工具を強く押し当て、離しながら右方向に引くことによって施文している。この施文方法は、口縁部張り出し部の文様の施文方向の違いにかかわらず等しいものである。26-20は、その形態においては既述の26-16~19とはほぼ変わりはないが、文様において若干の違いを示している。すなわち、張り出した口縁部の上面には、やや太目の沈線文が縦位に0.2cmほどの間隔で施されており、また張り出し部以下には斜位の沈線文がみられ、円形刺突文は認められない。

26-21~28、27-1~9は体部の破片資料である。部位による残存文様の違いはあるが、横走する太くて浅い沈線文と斜位の短かい沈線文、横位沈線文に挟まれた円形刺突文(26-21~24、27-1)が基本的な文様構成であると考えられる。その中にある、斜位沈線文の間に横位沈線文を挟んで羽状の文様構成をとる場合(26-21、22)、横位沈線文・円形刺突文・横位沈線文を挟む場合(26-23)などがある。

27-10~12は同一個体の体部破片資料であると考えられる。いずれも外面淡橙褐色、内面明灰褐色を主とする。砂粒を多包するが焼成は良好であり、器面は堅緻である。27-11と27-12との内面にはススが付着している。施文の状況は先の26-10~13に近似し、すなわち鋭くつけられた細い沈線文による文様区画と、その間に配された刻目文からなる。27-10は2本1対の沈線文間に挟まれた斜位の刻目文がみられる。刻目文は沈線文に後出する。27-11は2列の縦位刻目文により文様が区画されており、左半では左上がりした3列の刻目文と2条の沈線文を、右半ではや

や右上がりした2列の刻目文と2条の沈線文とその下の右下がりした2条の沈線文とを認める。但し、右半の下2列目の刻目文は連続的に施文されているため、不整で太い沈線文状を呈している。本資料では縦位刻目文、沈線文、斜位刻目文の順に施文がなされている。27-12は横位及び斜位の沈線文と刻目文とからなる。刻目文はその上下を沈線文に挟まれているが、施文は沈線文に後出する。また斜位沈線文も横位沈線文に後出するが、刻目文との先後は不明瞭である。このように文様帯の基調をなす沈線文がその間に配する刻目文などに先行して施文されていることは、26-10~13に共通しており、またその文様構成も類似していること、更に刻目文帯の幅も広いことなどから、本類の中でも両者はより相似性が高いものと考えられることが可能であろう。

27-13・14も同一個体の小破片資料であると考えられる。色調は内外面とも茶褐色を呈している。砂粒を多包する。器面はやや粗い。内面の脆さに比して、外面は幾分平滑である。ともに浅い沈線文のみみられるだけであるが、26-21~28や27-1~9に比して沈線文の幅は狭くかつ浅い。小破片資料であるにもかかわらず、文様の途切れた箇所が幾所にもみられることから、沈線文は短いものであったと考えられる。

27-15、16は同一個体の口縁部破片資料と考えられる。外面は暗茶褐色、内面は黒褐色を呈する。砂粒を多包するが焼成は良く、器面は内外とも研磨されて堅緻である。ともに横位~斜位の浅沈線文が認められるが、端部のみがみられることから27-13、14の場合と同じく、短い沈線文であったと考えられる。27-15の口縁端部はわずかに外反するとはいえ、体部よりほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は平坦となる。また口縁端部内面は強くナデられており、そのため内辺は若干歪になっている。27-16は小破片であり、端部の外反の度合は判然としない。口唇部にナデが施されているが、なお丸味を残している。

27-17は口縁部破片資料である。現況では器面に文様を認めない。但し、外面においては縦位~斜位の強いナデによる研磨がなされており、また内面には横位を基調としたナデを認める。残存部分はほぼ直線的に立ち上がっている。そして外面より幾分尖り気味におさまっていくが、口唇部は丸味をなお有している。内外面とも淡橙褐色を呈している。砂粒を多包する。焼成がやや不良なためか、内外面とも脆くなっている。

27-18は体部破片資料である。本資料も現況では文様はみられないが、内外面に研磨がなされているのを認める。

2類 田戸上層式に比定し得るものを一括した。

27-19は素文の口縁部破片資料である。全体に厚手の造りといえる。口縁部は外反するとともにやや肥厚する。また口唇部は面取りがなされ、平坦に仕上げられている。よって口唇部内辺が頂部となる。内外面とも横位方向に研磨されており、ことに外面では強く施されているため削りとする方が適当かも知れない。外面には幅1.5cmほどのヘラ状工具による擦過痕が認められる。

色調は内外面とも茶褐色を呈するが、内面は赤味が強い。胎土には、小石を多包するが、焼成は良好であり、内外面とも堅緻である。

27-20は体部破片資料である。並走する浅沈線文や、その2条に挟まれた波状文（沈線文を施した原体と同一であると思われる）、結接する浅沈線文の間に施された貝殻腹線文を認める。内外面とも淡茶褐色を呈する。胎土に砂粒を多包するが、焼成はよく堅緻である。ことに外面は平滑な仕上げになっている。

第4群 早期後半 条痕文系土器（図面27）

1類 無文土器を一括した。

27-21は体部上半以上と体部下位の破片資料よりなる。口縁部は強く外反して張り出す。口唇部は面取りされており、平坦となっている。口縁部から体部にかけて鋭く屈曲するが、体部はほとんど脹みをもたず底部へと至る。体部下位では器壁を徐々に増しており、底部は丸味のある尖底となろう。明確な文様は認められないが、不規則な刺突痕を数箇所で見ることが出来る。但しその刺突も一定した形状を呈してはいない。そして、体部上半及び口縁部に横位の削り状の擦過痕を、体部下半には縦位の擦過痕を認める。なお縦位擦過痕が先行している。また内面にあって、上半には横位の、下半には横位～斜位の削り状の擦過痕が認められる。またそれに先行して指押えが施されていたようである。胎土に砂粒や小石を多く含み、また焼成もさほど良くないが、器面調整が比較的丁寧になされているため、器面は内外ともに平滑になっている。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈する。

2類 沈線文と刺突文により文様構成されたものを一括した。

27-22と27-23は同一個体の口縁部破片資料である。小波状を示す口縁部はやや丸味を有しておさまり、口唇部全体に刻目が施されている。27-22では波状口縁頂部からの縦位の沈線文と、その下端より延びる横位の沈線文によりなされた左右の区画の中に沈線文と、沈線文間の隆起帯部分に施された刺突文とがみられる。なお刺突文は各隆起帯部分に施されているのではなく、不規則である。色調は内外面とも明茶褐色を呈している。胎土に砂粒が多包されている。焼成は良好である。

第5群 前期 縞線日式土器（図面27）

1類 縞糸文施文のものを一括した。

27-24～28は同一個体の破片資料と考えられる。27-24、25、28には縞糸Lの縦位施文が明瞭に認められるが、27-26、27では縞糸文がナデにより消されている。また27-24では縞位を基調としながらも若干角度を違えた2方向の施文がみられる。いずれの破片資料とも内面は横位の研

磨が比較的丁寧になされている。色調は外面赤褐色、内面淡橙褐色を呈する。胎土には砂粒が多く含まれているが、ことに石英粒が目立つ。焼成はさほど良くないが、器面は内外とも堅緻である。

2類 爪形文のみられるものを一括した。

27-29は半載竹管の内皮押し引きによる連続爪形文を2列施している。そして爪形文の上には原体LRの単節縄文を、下には細沈線文を認める。爪形文はこれらに後出する。内面は研磨されている。色調、胎土などは27-24~28に類似している。

第6群 中期初頭 五領ヶ台式土器 (図面28)

1類 沈線文や刺突文により文様が構成されているものを一括した。

28-1は口縁部の破片資料である。口縁部内側が肥厚しており、その内面より尖り気味におさまっていく。いま3条の沈線文が認められ、その第1と第3の沈線文の上に刺突文が施されている。しかも下位部分ではやや器壁を厚くしているとともに、瘤状突起が付けられている。そして、刺突がその上端になされたところでは、そこに刺突工具の傷痕としての沈線が残っている。色調は淡茶褐色を呈する。焼成はよい。28-16は口縁部下半から体部にかけての破片資料である。いま7条の細沈線文がみられ、上より3、4条目に刺突文が認められる。また瘤状突起の上端にも刺突文が施されている。加えて、瘤状突起の上に縦位沈線文2条を認める。焼成は良く、橙褐色を呈している。胎土に小石を多く含む。

2類 連続刺突文を施したものを一括した。

28-2は口縁部破片資料である。細竹管による刺突を連続的に施して沈線文状の文様を造り出している。2条の横位施文と、それに直交した縦位施文とを認める。上位の横位施文に比べ下位のはやや雑で、押し引き状に施文がなされている。また縦位施文においてもその傾向は強い。口縁部は内面が僅かに肥厚している。口縁部は面取りされており、平坦である。また胎土に砂粒を多く含み、ことに金雲母粒が顕著である。色調は外面茶褐色、内面橙褐色を呈する。内面は研磨されて平滑である。28-18では散隆帯の間に半載細竹管による連続刺突を施している。刺突は比較的丁寧になされ、現状では押し引きされた部分はみられない。本資料の胎土中にも金雲母が多く含まれている。

3類 角押文を施したものを一括した。

28-3は口縁部破片資料であり、かるく波状を呈している。口縁部は若干外側に張り出し、口唇部は幅1.5cmほどの平坦面となっている。そしてその平坦面に2条の角押文が施されている。また口唇部外辺には斜位の刻目文が加えられている。口唇部以下から体部にかけては無文であり、縦~斜位の研磨痕が顕著に認められる。内面には明らかな研磨の痕跡はみられないが、ナデられ

て平滑に仕上がっている。色調は内外面黒褐色である。砂粒を多包し、小石もやや含まれる。

4類 沈線文とキタビラ文により文様が構成されたものを一括した。

28-4~14及び17は同一個体の破片資料である。半截竹管端に切り込みを入れ、内皮側を押し当てて引いたと思われる半肉調の隆帯を造り出す沈線文が横線と縦・斜線を描いており、文様区画を形成している。文様区画は、基本的には28-13、14にみられるような正・逆位の三角形と28-5~7にみられる長方形であると考えられる。前者の場合、3条の沈線文に縁取られた三角形の中に、更に半截竹管の連続刺突による相似した三角形が施文され、その間にキタビラ文が加えられている。これを単位として文様が形成されていくが、隣接する場合には沈線文は共用されているため3条を越えることはない。後者の場合、28-6から判断して、3条の沈線文により長方形が描かれていると考えられる。しかしその内側の文様は単一ではない。すなわち、28-5では沈線文に縁取られた長方形の中に半截細竹管による刺突文を縦方向に1列4段施文しており、現状では5列までを認める。キタビラ文はこれに先行して長方形内辺に沿って施されている。これに対し、28-6、7、9では長方形の内辺に沿ってキタビラ文を描き、長方形の中心に横走する波状文を加えている。従って28-5に比して長方形の幅はやや狭くて済んでいる。また28-9にみられるように、同じ文様構成をとる長方形が重なる場合がある。なお28-6では長方形を縁取る沈線文のうち、外側のものに沿った刻目文をもつ隆帯が認められる。隆帯のある破片はこの1点であるが、それも文様要素といえよう。ところでキタビラ文であるが、太竹管半分以上に切截した施文具を押し引きにより施文しているが、施文間隔は比較的密である。但し施文時の押圧は弱い。口縁部破片資料は28-4の1点のみである。ほぼ直線的に立ち上がる口縁部は、端部を外側に張り出させている。口唇部は面取りされ、平坦になっている。張り出した口縁部端の正面には刻目文が施されている。口縁部以下は素文である。28-4~14の破片資料の内側はいずれも横位の研磨がなされており、平滑になっている。28-17は底部破片資料である。底部の4分の3を遺存している。底面は平坦で、不定方向のナデ調整がみられる。底面から体部への立ち上がりは僅かに残っているが、そこには細沈線文がみられる(28-17拓影左や右上など)。その細沈線文は底面周辺まで及んでいる。なお施文単位については不明である。以上12点の破片資料はいずれも内外面茶褐色(内面の方が暗味強い)を呈している。胎土には砂粒を多く含み、ことに白色砂粒が顕著に認められる。焼成は良好である。

5類 三角押文を施文したものを一括した。

28-15では、横走する2列と、その下から左寄りに垂下された1列及びその右側にあって右下に延びる3列の三角押文を認める。但し、右下に延びるもののうち最上のは一度施文されたのち、重ねて施文されており、重複した部分がみられる。またいずれの三角押文も比較的密に施されている。三角押文に挟まれた部分では、浅い細線文が斜行している。色調は外面暗黄褐色、

内面橙褐色を呈する。胎土には砂粒・小石を含む。内面は研磨されている。

第7群 中期前半 阿玉台式土器（図面29）

1類 隆帯より文様区画されたものを一括する。

29-1は同一個体の破片資料と考えられる。文様が認められるのは、口縁部を欠損しているが、体部上位から下位にかけての部分である。低く張りのない断面三角形を呈する隆帯により区画されている。隆帯によって逆三角形に区画された内には、2列の並走した刺突文が施されている。この区画上辺の隆帯の上には粘土帯を加え舌状の隆起を1対貼付しているが、左側のものは剝落している。刺突文を開く隆帯の左右には現状2条の波状文がみられる。但し右側の波状文は左側のものに比して高位にあり、下に更に1条加わる可能性もある。横走する隆帯の端には粘土帯を貼付し、両端の立ち上がった横長楕円形の突起を造っている。その下端は垂下した隆帯文と繋がる。また上端は強くナゲられて器面との段差が解消されている。この突起の中程には角押文が加えられている。内面は横位の研磨がなされている。そして底部から体部下位にかけての破片資料が続く。その体部には文様はみられないが、縦位の研磨がなされており、内面においても斜〜横位方向に施されている。底部は平坦である。また底部には網代痕が認められる。両破片資料とも胎土に小石・砂粒を多く含み、ことに石英粒・金雲母粒が目立つ。内面に比して外面はやや粗い。色調は体部資料では外面が黒褐色、内面が橙褐色、底部資料では内外面とも淡赤褐色を呈している。

2類 角押文が施されたものを一括した。

29-2は断面三角形の低い隆帯の下端に2列並走の角押文が施されている。角押文は施文時の引きが強いために沈線化している。外面黒褐色、内面淡褐色を呈する。胎土に砂粒・小石を含み、金雲母粒や石英粒が多い。

29-12は口縁部破片資料である。口縁端部は外傾し、口唇部は面取りされ平坦におさまっている。口縁端部外面に隆帯を貼付し、その下端に2列並走の角押文を施している。色調・胎土は29-2に類似する。

29-13も口縁部破片資料である。口縁端部で内外面肥厚させ、口唇部は平坦におさめている。角押文は肥厚した口縁部下に2列並走して施されている。29-2・12に比して1つの角押文の長さは短かいが、3点いずれも文様幅は細い。色調は内外面橙褐色。胎土に砂粒・小石を含むが、29-2、12ほど金雲母粒は含まれない。浅鉢の口縁部であると考えられる。

第8群 中期前半 勝板式土器（図面29～31）

1類 縄文及び隆帯に沿った爪形文のみられるものを一括した。

29-3~7は同一個体の破片資料と考えられる。29-3は口縁部の破片資料である。ほぼ直立して立ち上がり、口唇部は平坦である。僅かに器壁を厚くした素文の口縁端部の下に横走る爪形文を施し、そして波状沈線文で区画した下に縄文を地文として垂下する隆帯とそれに沿う爪形文及びそれを囲う波状沈線文を施している。横位の爪形文が比較的密に施されているのに対し、隆帯に沿うものはやや粗い。縄文は単節縄文R.L.L.を横走させたものである。29-5も縄文を地文とし、爪形文とそれに沿う波状沈線文がみられる。29-4では隆帯が楕円形に貼付され、その内側に沿って爪形文が施されている。更にその中程に横位の波状沈線文が加えられている。29-6では角押文は隆帯の端部に沿って施されるものと、中程に施されるものがあり、後者の場合には細かな三角押文が更に隆帯端部に沿って施されている。また隆帯には、その頂部に刻目文が施されたものと、平坦に仕上げられたものがある。これら29-3~6の破片資料にみられた文様は、いずれも明瞭さに欠けている。また爪形文は比較的幅広いものである。29-7は底部の破片資料である。文様は認められない。底面は平坦で強いナデによる調整がなされている。底面から体部への立ち上がりは若干丸味を有している。本個体の器形は円筒形の深鉢である。色調は内外面淡褐色を呈するが、内面はやや暗い。胎土には砂粒を多包している。焼成は良い。但し文様に明瞭さが欠けているため、脆弱な感じを受ける。勝坂Ⅱ式に比定し得るものと考えられる。

2類 隆帯に沿った爪形文のみられるものを一括した。

30-1~7は同一個体の破片資料と考えられる。30-2~6は低くやや細い隆帯の内外に沿って比較的幅の広い爪形文が密に施文されている。爪形文の幅は1cmほどである。30-1は口縁部破片資料である。外反しながら立ち上がり、口唇部は内側より尖り気味におさまっていく。口唇部は面取りされている。口唇部から8cmほどの間は素文で、その下に爪形文が認められる。これらの爪形文は密に施文されているとはいえ、30-1や30-3の左下、30-5の下部にみられるようにやや間隔の広がったものもある。30-7は底部の破片資料である。破片上端に爪形文が認められる。体部から底部へは若干丸味をもって移行する。これらの破片はいずれも内外面淡褐色を呈している。胎土には砂粒、ことに白色砂粒を多包している。器面はやや暗い。勝坂Ⅰ式に比定できようが、やや新相に属そう。

31-7・8も同一個体の破片資料と考えられる。31-7ではやや幅広く厚さのある隆帯に沿って爪形文が施されている。30-8では隆帯に沿う爪形文に並走して更に爪形文が施文されている。但し隆帯に沿う爪形文の方がやや丁寧に施されているといえる。また左下がりの爪形文2列では施文方向が逆転しており、文様単位としては異なるものであることを示している。両破片資料とも色調は外面暗茶褐色、内面橙褐色を呈している。内面は丁寧に研磨されている。胎土に砂粒を多包し、ことに金雲母粒が多い。焼成は良い。本資料は勝坂Ⅱ式に比定し得るものと考えられる。

3類 角押文及び三角押文の施されたものを一括した。

29-14は口縁部破片資料である。やや内彎しながら立ち上がり、口縁部は肥厚する。口唇部は丸くおさまる。角押文で囲まれた中に縦位の三角押文を配している。角押文は密に施文されている。外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。砂粒をやや含む。焼成は良い。なお口縁部は若干波状を描く。

4類 横走する隆帯に沿って角押文のみられるものを一括した。

30-8は唯一口縁部から底部まで図上復原し得たものである。器高38.2cm、口径37.8cm、底径13.6cmを測り、キャリパー形を呈する深鉢である。横走する隆帯に沿って角押文が施文されており、角押文に沿って或いは角押文間に三角押文が加えられている。三角押文はゆるやかな波状を呈している。また口縁部は波状を描き、そこに貼付された隆帯の上には刺突文が施されている。また底部破片資料では垂下された隆帯に沿って角押文が施文されている。隆帯は底部手前で止まっている。施文はいずれも比較的丁寧になされている。色調は内外面暗褐色を呈する。胎土に砂粒・小石を含む。焼成は良好である。勝坂Ⅰ式に比定できよう。

5類 隆帯に沿った角押文のみられるものを一括した。

29-8~11は同一個体の破片資料と考えられる。29-10、11では横・斜走する隆帯に沿って角押文が施されている。角押文の施文間隔は若干広い。29-8、9では隆帯は貼付されておらず、角押文のみが認められる。29-8では横走する角押文とその上にあって大きく波状を呈する角押文とが認められる。29-9でも大きく波状を呈する角押文のみられるが、29-8、10、11に比して施文間隔はやや狭い。いずれも内外面明茶褐色を呈している。胎土に砂粒・小石を含んでいる。勝坂Ⅰ式に比定できよう。

30-10では隆帯に沿って角押文が2列施文され、更にその内側に波状沈線文が加えられている。角押文の幅はやや狭い。色調は外面黒褐色、内面灰褐色を呈している。胎土に砂粒や小石を多包し、器面は粗い。黒色雲母粒が多い。焼成はやや不良で、脆弱となっている。勝坂Ⅱ式に比定し得るものと考えられる。

31-6は口縁部の破片資料である。やや幅広い隆帯に沿って2列の角押文が施されている。本破片資料の文様幅も比較的狭い。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。勝坂Ⅱ式に比定し得るものである。

6類 角押文のみがみられるものを一括した。

30-11~14は同一個体の破片資料と考えられる。器形は浅鉢形を呈する。30-11は口縁部破片資料である。口縁部内面がやや突起し、また口唇部は平坦に仕上げられている。外面には文様は認められない。口唇部平坦面には細い2列の角押文が施されている。また口縁部内面にも2列の角押文が認められ、更に端部より5.5cm下がったところにも同様の文様がみられる。器面内側の角押文も比較的細かくかつ短間隔で施文されている。30-13も口縁部破片資料である。口唇

部は著しく磨耗しているが、僅かに2列の角押文を認め得る。本例も外面には文様がみられず、内面において角押文により縦位の楕円文、その両側に横位の楕円文、そして下に横線文が施されている。なお外面を正面にした場合の右隅に補修孔が1孔穿たれている。30-12では横走する角押文が認められる。30-14も内面にのみ文様がみられる。すなわち、2列の角押文が縦走し、その両側辺にL字状を呈した角押文が組合わさっている。側辺の角押文は強く引かれて施文されているため、半沈線文となっている。以上の破片資料はいずれも内外面淡橙褐色を呈している。胎土に砂粒・小石を多く含み、器面は極めて脆くなっている。焼成もやや不良である。勝坂Ⅱ式に比定できよう。

7類 キョタピラ文のみられるものを一括した。

31-9は口縁部破片資料である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部は平坦になっている。口縁部下には幅広の隆帯を波状に貼付している。その下には低隆帯を加え、そしてキョタピラ文をその下端より施している。キョタピラ文の下には更に波状沈線文がみられる。なお縦位細隆帯はキョタピラ文施文以前に貼付されている。色調は内外面茶褐色を呈している。内面は研磨され平滑である。胎土に砂粒・小石を多包するが、焼成は良く堅緻である。勝坂Ⅱ式に比定し得る。

8類 地文に燃糸文の施されたものを一括した。

31-1~5は同一個体の破片資料と考えられる。いずれも地文として燃糸Rを縦位に施文したものである。また文様も沈線文や波状沈線文が各資料にみられる。例えば31-1では隆帯による横位の楕円文で区画された中に相似する沈線楕円文が2重に描かれており、また隆帯にも斜位の刻目文が加えられている。隆帯の外側には並走する沈線文と波状沈線文とがみられ、更にその下に、地文である燃糸文を挟んで波状沈線文が施されている。また31-2では平行した沈線文に区画された中に屈曲した波状沈線文が施されており、波状沈線文の内側には燃糸文が認められる。31-3や31-4は波状沈線文間の燃糸文が比較的良好に認められる資料である。いずれの破片資料も色調は内外面淡橙褐色を呈している。胎土は砂粒を含むが、その量は少ない。勝坂Ⅱ式に比定し得るものである。

9類 細文及び沈線文のみられるものを一括した。

31-10は口縁部破片資料である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部は面取りされて平坦になっている。地文にRLLの単節細文を施文し、その上半截竹管の外皮を押圧した幅広い沈線文と、細い波状沈線文とを描いている。文様は、口縁部下の横位波状沈線文と、その下の沈線文・波状沈線文各2重の同心円文とからなる。同心円の中心には地文が残存している。また外側の沈線文に比して内側のものはやや幅が狭い。内面は研磨されて平滑である。内外面茶褐色である。胎土に含まれる砂粒は僅かである。焼成はよく堅緻である。器形は円筒形の深鉢である。

勝坂Ⅱ式に比定できよう。

第9群 中期後半 加曾利E式土器(図面31)

1類 条痕文及び沈線文のみられるものを一括した。

31-11~14は同一個体の破片資料で、浅鉢である。31-11、12は口縁部破片資料である。内彎して口縁部は立ち上がり、端部は肥厚する。外面には条痕文が施され、それを切って端部下に横位沈線文が加えられている。31-11では沈線文はやや弧状を描いている。31-13では条痕文を切った縦位の波状沈線文が認められる。31-14では条痕文の一部がナデにより僅かに消されている。いずれも外面暗灰褐色、内面暗黄褐色を呈している。含まれる砂粒は少ない。内面は良く研磨されており、平滑に仕上がっている。

2類 縄文及び縦位区画文の施されたものを一括した。

31-15~17は同一個体破片資料と考えられる。いずれもLLRの単節縄文を施文して地文とし、幅0.4cmほどの縦位沈線文により区画されたものである。31-15では2条の沈線文の間が磨り消され、素文となっている。31-16においても同様であるが、素文帯の幅は31-15に比して狭い。また31-17では沈線文の右側が現状では全て素文帯となっている。色調は外面褐色、内面黒褐色を呈している。胎土に砂粒・小石を多包し、また焼成もやや不良で脆弱な造りとなっている。

第10群 後期 称名寺式土器(図面31)

31-18は口縁部破片資料である。口縁部は内側に強く張り出し、口唇部に平坦面をとっている。そして口唇部に粘土を重ね波状口縁部を形成するとともに、その頂部の内側に刺突を加え小孔を設ける。また頂部から一方の口唇部に鋸手状の沈線文を施す。対峙する口唇部は素文である。器面は内外とも研磨されており、極めて平滑である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土に砂粒を若干含む。焼成は良好であり、堅緻な造りである。器壁は薄い。

第11群 後期 壺之内式土器(図面31)

1類 沈線文のみられるものを一括した。

31-19は口縁部把手の破片資料である。内彎しながら立ち上がり、ほぼ直立する。沈線文や円形刺突文とそれを繋ぐ沈線文により文様が形成されている。器面の剝落が著しく文様構成は明確ではないが、円形刺突文を繋ぐ沈線文の下に縦位の沈線文を施し、更にその両側には平行する幾条かの沈線文を加えたものと考えられる。色調は内外面黒褐色を呈する。胎土に砂粒を多包する。焼成は良い。

31-20では縦位の沈線文と、その右側に0.7×0.4cmほどの浅い押圧文が2点認められる。外面

は施文以前に研磨されている。内外面とも暗黄褐色を呈する。砂粒を多包しているが焼成は良い。

2類 条痕文のみられるものを一括した。

31-21では器表面に条痕文が認められる。色調は外面暗茶褐色、内面赤褐色を呈している。胎土に砂粒を多包する。焼成は良く堅緻である。

(2) 石器

出土石器はいずれも遺構に伴わない、包含層中のものである。従ってここでは出土地点にかかわらず種類ごとに掲載した。これらの石器は次の10種類に分けられる。

- 1類 石鏃
- 2類 加工痕のある剝片石器
- 3類 ペンダント形石製品
- 4類 打製石斧
- 5類 礫器
- 6類 磨石
- 7類 敲石
- 8類 スタンプ形石器
- 9類 凹石
- 10類 石皿

これらのうち、図示したものでは4類が多い。それはまた、種類のわかる破損品においても同様の傾向が認められた。

1類 石鏃 (図面32)

32-1の1点が認められたにすぎない。基部の挟り込みが深い有脚石鏃である。長さ2.6cm、最大幅1.4cm、最大厚0.35cmを測る完形品である。石材はチャート製である。

2類 加工痕のある剝片石器 (図面32・34)

32-2は最大長4.5cm、最大幅6.4cm、最大厚11.5cmを測る。やや粗い加工により器形を整え、長端辺に細かな調整を加えて刃部を造っている。チャート製である。石材の歪さはさほど解消されることなく調整がなされている。34-3は長さ7.4cm、最大幅8.2cm、最大厚1.2cmを測る。連続した細調整加工を外周に施し、器形及び刃部を形成している。刃部裏面は磨耗しており、光沢があり平滑になっている。石材は砂岩である。34-4は横長剝片の長端辺に調整加工を施し、刃部を造り出したものである。最大長3.6cm、最大幅10.0cm、最大厚1.4cmを測る。刃部対辺は10cm近く挟り込まれている。本品も砂岩製である。

これら2類の石器は、刃部の有様などから搔器、或いはそれと同様の機能を果す石器として大

過ないであろうと考える。

3類 ペンダント形石器 (図面32)

32-3の1点のみ検出されたにすぎない。丸味のある撥状を呈し、最大長5.7cm、最大幅3.8cmを測る。厚さは3.5cm前後ではほぼ一定している。扁平な形態である。全面ともよく磨かれており、調整加工の痕跡を留めない。各面は光沢があり、平滑に仕上がっている。石材は砂岩であるが、材質は硬固である。重量は25gである。

4類 打製石斧 (図面32~33)

16点を図示した。形態及び大きさから細分することができるが、まず各資料についてみていきたい。

32-4は長さ10.8cm、最大幅5.0cm、最大厚1.3cmを測る。最大幅は基部より3分の2にあり、最大幅部より刃部にかけて幅を狭めていき、刃部端は尖っている。32-5は長さ12.4cm、最大幅4.7cm、最大厚1.7cmを測る。32-4に比して長さに対する最大幅の割合は小さいが、形態的には類似している。なお刃部端は右側に寄り、刃部は切出し状となっている。32-6は長さ12.5cm、最大幅5.4cm、最大厚2.3cmを測る。刃部側半分に原石面を残し、厚味を増すことで重心を刃部に寄せている。また刃部端は幅2cm、基部幅は3cmを測る。32-7は最大長10.2cm、最大幅5.0cm、最大厚2.3cmを測る。本資料もまた原石面を刃部側半分に留めており、器厚を増している。32-8は最大長9.4cm、最大幅5.3cm、最大厚1.2cmを測る。最大幅は基部より2.5cmのところであり、以下刃部まで厚味を減じていき、側面形は鋭角である。また裏面左側辺、右側辺下半及び刃部には細調整加工が丁寧に施されている。32-9は刃部片側を若干欠損したものである。最大長8.2cm、最大幅5.0cm、最大厚1.6cmを測る。最大厚は基部より3.6cmのところにある。すなわち基部より最大厚部まで厚さ1.0cm前後であり、最大厚部以下では両面より鋭角に狭まって刃部に至る。正面形、側面形とも32-8に近いものである。33-1は基部側半分のみ資料である。基部には丁寧な調整加工が施されており、左右均衡のとれた円頭形を呈している。恐らく全形は木葉形に近い形状であったと推測される。現存長9.1cm、最大幅5.4cm、最大厚2.7cmを測り、割合に厚味があるものといえる。33-2は長さ8.7cm、最大幅6.5cm、最大厚1.6cmを測り、最大幅は刃部にある。なお基部幅は4.1cmを測る。刃部は丸味をもっており、また裏面は研磨され平滑になっている。33-3は最大長11.7cm、最大幅4.6cm、最大厚1.6cmを測る。両面ともに調整加工が施され、原石面を全く留めない。刃部は丸くおさまり、片側に寄っている。33-4は最大長9.9cm、最大幅5.6cm、最大厚2.1cmを測り、最大幅部と最大厚部がほぼ一致している。最大幅は刃部より3.4cmのところにあるが、刃部側3分の1や基部側3分の1のところでも5cm以上の幅がある。それに対し中央部では4.8cmと幅狭になっている。また最大厚が刃部側3分の1のところにあることから、重心は刃部に寄ることになる。33-5は基部側半分の遺存資料である。現存長12.3cm、最大幅6.

4cm、最大厚2.9cmを測るが、本来は全長20cmを越えるものと考えられる。側辺及び基部端部は直線的で、現況の正面形は長方形を呈している。33-6は基部を若干欠損している。現存最大長9.9cm、最大幅7.3cm、最大厚3.0cmを測る。幅や厚さはほぼ一定しており、現況正面形は方形を呈している。また刃部幅は5.6cmと広い。ところで、欠損部分より表面で2.4~2.8cm、裏面では1.9~2.2cmの範囲では、磨耗のため器面が平滑になっている（実測図網目部分）。しかも表面では右上がり、裏面では左上がりする状況が僅かながら認められる。こうしたことから、この磨耗は石斧に着けられた木柄の擦過痕と考えられる。しかも木柄は石斧に対して直角に着装されたものではなく、若干斜行させていたものと考えられる。33-7~9は基部の破片資料である。中でも33-7は破損部幅6.4cmを測り、本来は比較的幅広の形態を示すものと考えられる。また33-9は破損部幅4.7cmであるのに対し、厚さは2.4cmを測り、厚味のある資料といえる。

このように、打製石斧には個体により形態や大きさに違いがみられたわけであるが、以下に正面形、側面形、大きさの点から若干の分類・整理を行うことにする。

まず正面形であるが、大きく短冊型（32-4~9、33-3、5、6）、換型（33-2）、分銅型（33-4）とに分けられる。中でも短冊型は刃部の形状により更に細分され得る。すなわち、刃部が尖り気味におさまるもの（32-4、5）、平端におさまるもの（32-6、33-6）、丸味をもっておさまるもの（32-7~9、33-3）となる。

側面形については両面から刃部へと尖り気味におさまるもの（32-4、5、8、9、33-2、3）、片面が段をもって肥厚し、そのうち刃部へと至るもの（32-6・7）、長方形を呈し、厚味のあるもの（33-1、5、6、8）、刃部近くに最大厚をもち下脹れ状を呈するもの（33-4）とに分けることができる。

大きさの点からは、小型品（32-7~9、33-2、4）、中型品（32-4~6、33-3、6）、大型品（33-5）となる。

なお各打製石斧とも石材は砂岩である。

5類 礫器（図面34）

34-1は円礫と半截し、切断面の端部に調整加工を施して刃部を造り出しているものである。長さは10.1cm、最大幅7.5cm、最大厚3.6cmを測る。刃部の潰れは明瞭ではない。なお原石面には多数の細亀裂が入っている。石材は砂岩である。34-2は礫の表裏に加工を施し、やや幅広の木葉形を呈する形状に仕上げている。最大長13.1cm、最大幅7.2cm、最大厚4.0cmを測り、厚味がある。また基部側比して刃部側の方が厚く、重心を刃部に寄せている。だが刃部は打製石斧ほど整っていない。石材は変成岩である。

6類 磨石（図面34~35）

打製石斧に次ぐ7点を図示し得た。石材はいずれも砂岩である。34-5は端部を欠損している。

現存最大長9.9cm、最大幅5.8cm、最大厚3.9cmを測る。正面形・側面形とも長方形を呈するが、表裏面より若干丸味をもって刃部へとおさまっていく。磨耗部分は底面長軸に合っており、その幅は1.5~1.8cmである。なお石質はやや脆い。34-6は長円形の礫である。長さ9.9cm、最大幅6.3cm、最大厚3.9cmを測る。磨耗部分は底面長軸に直交するようにみられ、側面にも及んでいる。34-7は長さ12.8cm、最大幅7.4cm、最大厚3.9cmを測る。最大幅は下端より3分の1のところであり、下凹れ状の形態を呈している。磨耗部分は小さく、底面の片側に寄っている。34-8は長さ8.2cm、最大幅0.2cm、最大厚5.2cmを測る。磨耗部分は底面長軸と合い、その幅は1.2~1.9cmである。小さい割には磨耗部分は大きい。35-1は4分の1ほどが遺存しているにすぎない。現存長6.8cm、最大幅2.8cmを測る。磨耗部分は底面長軸に一致しており、幅は0.5~0.7cmと狭いが、側面にまで及んでいる。35-2も半分ほどを欠損している。現存長8.0cm、最大幅3.3cmを測る。磨耗部分は底面長軸に合っており、側面にまで及んでいる。なお石材は極めて脆く、器面も粗い。35-3は2分の1の破片資料である。現存最大長8.6cm、最大幅11.1cm、最大厚3.5cmを測る。磨耗部分は底面長軸に一致しているが、側面にも認められる。但し底面にみられたほどの磨耗の度合はない。

7類 敲石 (図面35)

35-4は2分の1以下の破片資料であるが、端部に敲打痕が認められる。現存長9.6cm、最大幅6.7cm、最大厚4.9cmを測る。敲打痕は先端面片側に寄っている。なお打撃による器面の剝離は認められない。35-5も破片資料である。頂端部は僅かに欠けている程度と思われる。現存長10.5cm、最大幅5.0cm、最大厚3.7cmを測る。本資料は縦長の原石を半載したもので、側面形は逆三角形を呈している。先端部は敲打によりほとんど欠失している。

8類 スタンプ形石器 (図面35)

35-6は最大長6.0cm、底面幅7.4cm、最大厚2.0cmを測る小型品である。底面には2箇所剝離部分を認めるが、その剝離の後に磨耗している。つまり、本資料は打製石斧の基部が転用された可能性も払拭できないのである。底面の磨耗度は高く、平滑である。35-7は長さ9.3cm、底面幅11.8cm、最大厚5.9cmを測り、大型品の部類に属す。底面は平坦であるが、35-6に比して磨耗度は低く、さほどの平滑さはない。また側面には調整加工痕は認められず、底面以外は全て原石のままである。なお35-6・7ともに石材は砂岩である。

9類 凹石 (図面36)

36-1の1点が検出されたにすぎない。長さ11.0cm、最大幅9.2cm、最大厚7.3cmを測り、球形の度合いの高いものである。広面のほぼ中央部に長径2.4cm、短径1.8cm、深さ0.3cmほどの凹部が認められる。また側面や裏面には僅かな擦過痕がみられる。石材は砂岩である。

10類 石皿 (図面36)

36-2は4分の1ほどの破片である。磨り部の窪みはさほど明瞭ではないが、よく磨かれており、平滑になっている。最大厚は5.8cmを測る。36-3は4分の1以下の小破片である。36-2と同様、窪みは判然としないが、よく磨かれている。最大厚は6.0cmを測る。36-4は半分が遺存している。磨り部の窪みは明瞭で、0.5cmほどの深さがある。しかしその窪みはやや不整形をしている。なお本資料は焼成を受けており、器面は脆くなっている。またこれら3点の石皿はいずれも砂岩製である。

VI 先土器時代

1. 出土遺物

V層上部からⅣ層の下部にかけて出土した石器類は総数46点である。その内集中地点からは44点出土した。内訳はナイフ形石器5、使用痕のある剝片(U剝片)2、石核1、剝片23、砕片13。また単独で尖頭器1、スクレイパー1点が出土している(図面38・39)。

ナイフ形石器(2・5・45・4・24・41)

2、45、4、24は石材はホルンフェルスを用いている。2は縦長剝片の二側縁に刃直し加工を施し、先端および基部を尖がらせている。45は先端部欠損しているが、基部と一側縁に調整加工を施し、細身ナイフ形石器に仕上げている。4は打面を残した幅広の縦長剝片の先端部を切り取りその切り取った部分に加工を施し、二側縁を刃部としたものである。24は縦長剝片を利用しているが打痕部分で欠損しているため形状は不明である。一部に刃直し加工が残されている。5は頁岩を石材としている。打痕を除去した部分に加工を施し二側縁を刃部としたものである。41は透明度の高い黒曜石を石材とし、基部のみの残存であるが、剝片の先端部を基部として尖がらせていることから同様の縦長で二側縁加工のナイフ形石器と思われる。

使用後のある剝片(6・48)

48は緻密な頁岩を石材としている。縦長剝片の二側縁に連続した剝離痕がみられる。6は石材を黒曜石に用い、剝片の離面に一部刃こぼれ状の剝離痕が観察される。

石核(16)

一部に自然面、節理面を残した頁岩を石材とした石核。打面は石核の上下両端に残存し、複剝離打面である。この石核には38の剝片が接合される。

剝片(13・17・19・38・49)

石材は頁岩、ホルンフェルスが主で長さはほぼ一定していた4～5cm前後であるが、幅は細身、幅広と揃いの縦長剝片である。特にホルンフェルスは節理のある石核から剝離された欠損品が多い。

13・17・19は頁岩の同一母岩から剝離された剝片である。49はホルンフェルスの縦長剝片であるが、節理により欠損している。

碎片

黒曜石、チャート、頁岩、ホルンフェルスの石材がある。碎片は1.5cm前後のすづまりで横長が多く、ナイフ形石器や他の石器を制作に作出される碎片とはちがひ、剥片を剥離する際に生ずる調整の碎片と思われる。

尖頭器 (53)

石材は良質で透明度の高い黒曜石を石材とした縦長剥片である。裏面は主要剥離面を生かし一部に細かい加工をしたのみであり、表面は先端および基部に調整加工を施こし木葉形に仕上げている。

スクレイパー (54)

53同様の黒曜石を石材としている。頭部のみの残存であるが、縦長剥片の側縁に刃部（スクレイパーエッジ）としての加工が施こされている。

2. 集中分布

Ⅱ層下部のソフトローム層からⅤ層上面のハードローム層にかけて出土した石器類は、北東から南東に7.0m、北西から南東にかけて4.5mの楕円形に分布する。この分布はさらに石材別のまとまりをもち、頁岩を主体とする分布、ホルンフェルスを主体とする分布、黒曜石、頁岩、ホルンフェルスの石材を混在する分布の3ヶ所の小分布に分けることができ、その他、分布を離れて単独で出土するチャートなどがある。この分布を各々ユニット1、ユニット2、ユニット3と呼んでおく（図面37）。

ユニット1 頁岩を主体とする分布で、大分布の北側に位置し2×1.8mの円形に点在する。出土遺物は石材1、剥片8、碎片3点が出土している。頁岩製の石核（16）は上下打面をもつ石核で4m程離れたユニット3の剥片（38）に接合する。その他頁岩製の剥片類は長さ6cm、幅2cm前後の縦長剥片で上下打面をもつ石核から剥離された剥片類であるが、石材質の緻密差、風化の度合いからして石核（16）とは別の母岩から剥離された剥片類である。

ユニット2 ホルンフェルスを主体とする分布で、ユニット1の南側に位置し、2×1.6mの大きさである。ナイフ形石器2、剥片10、碎片6点が含まれる。ユニット内のホルンフェルスの石器類は同一の母岩で、頁岩の剥片同様に上下打面をもつ石核から剥離された剥片である。

ユニット3 黒曜石、頁岩、ホルンフェルスの石材をもつ分布で、ユニット2の西側に位置し、1.5×1.5mの規模である。ナイフ形石器3、剥片2、碎片6が出土している。

3. 小 結

本遺跡の石器類は、ほぼ全面調整剥離を行い、打面を上下両端に残す石核、この同様の石核から剥離された剥片。ナイフ形石器は二側縁に調整加工を施し先端と基部を尖がらせ鋭利な刃部をもつもの。また剥片の先端を斜めに切断しその切断面に調整を加え、二側縁をに刃部としたナイフ形石器がある。これらの剥片剥離の特徴は、所沢市砂川遺跡の石器群にみられる「砂川型刃器技法」としてとらえられている。周辺の遺跡では小金井市前原遺跡跡Ⅱ中文化層や本遺跡の107次調査地点でもⅡからⅤ層にかけて同様の石器類が出土している。層位的石器類の製作技術からして本調査地区の石器群は先土器時代第Ⅱb期に相当する。

単独に出土した尖頭器は、良質の透明度の高い黒曜石を石材とし、縦長剥片の先端部と基部のみ加工を施した尖頭器である。近隣遺跡では、小平市鈴木遺跡Ⅲ層、調布市仙川遺跡Ⅲ層に出土して、形状が3cm前後の菱形を呈する例がある。しかし本遺跡の尖頭器は約2倍の6cm大の大きさであり、むしろ台地より奥に進んだ丘陵地帯に出土する両面加工の大形の尖頭器に近い。また本遺跡の石器集中地点から同質の黒曜を利用したナイフ形石器や剥片が出土しているところから時期的には先土器時代第Ⅱb期に近い第Ⅲ期初頭に当たる尖頭器であろう。

引用・参考文献

- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代の研究」第四紀研究10-4
小田静夫 1975 「日本の先土器時代」I・C・U Occasional Papers Number 2
小田静夫・織笠昭 1976 「前原遺跡」前原遺跡調査会
小田静夫・C・T・キーン他 1974 「仙川遺跡」東京都埋蔵文化財調査報告2
鈴木遺跡調査団 1981 「鈴木遺跡Ⅱ」鈴木遺跡調査会
砂川遺跡調査団 1974 「埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡——第2次調査の記録——」
戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」考古学集刊4-1
福田信夫・樋口喜重子 1982 「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ——Ⅶ先土器時代」武蔵国分寺遺跡調査会
吉田格・肥留間博 1970 「狭山・六道山・浅間谷遺跡」東京都瑞穂町文化財調査報告

番号	図番号	層位	器 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	破 損	接 合	備 考
1		Y	割片	頁岩	3.1	1.2	0.6	1.8			A地区
2	36	※	ナイフ形石器	ホルンフェルス	4.7	1.4	0.5	2.8			※
3		M	砕片	黒曜石	1.6	1.7	0.3	1.5			※
4	36	※	ナイフ形石器	ホルンフェルス	5.6	4.8	0.6	7.6			※
5	36	Y	※	ホルンフェルス	4.6	1.8	0.7	4.5			※
6	36	※	U割片	黒曜石	3.3	1.4	0.2	2.3			※
7		※									※
8		Y	砕片	珪岩	1.3	1.1	0.2	0.9			※
9		※	※	頁岩	1.5	1.8	0.2	0.7			※
10		※	割片	頁岩	1.7	3.8	0.7	2.4			※
11		※	※	頁岩	2.8	3.1	1.0	10.8			※
12		M	砕片	頁岩	1.0	2.3	0.2	0.5			※
13	36	※	割片	頁岩	4.1	1.1	0.5	3.9		19	※
14		※	※	頁岩	3.3	3.2	0.6	5.0			※
15		Y	※	頁岩	2.0	1.4	0.4	0.9			※
16	36	※	石核	頁岩	4.6	2.8	3.8	61.5		38	※
17	36	※	割片	頁岩	4.1	1.7	0.4	3.9			※
18		M	砕片	ホルンフェルス	1.8	2.2	0.3				※
19	36	Y	割片	頁岩	4.2	1.4	0.2	3.0		13	※
20		※	※	ホルンフェルス	8.0	3.4	0.4	4.7			※
21		※	※	ホルンフェルス	3.1	3.4	1.1	10.2		25	※
22		※	※	ホルンフェルス	2.5	3.1	0.5	4.7			※
23	36	※	ナイフ形石器	ホルンフェルス	4.0	1.9	0.6	4.0		49	※
24		※	割片	ホルンフェルス	5.1	4.7	1.0	19.5		22	※
25		※	砕片	ホルンフェルス	1.1	2.0	0.1	0.8			※
26		※	割片	ホルンフェルス	4.4	3.3	1.8	7.6		35	※
27		※	砕片	ホルンフェルス	2.2	2.0	0.3	1.8			※
28		※	※	ホルンフェルス	1.4	1.1	0.3	1.8	基部		※
29		※	割片	ホルンフェルス	4.0	1.9	1.0	6.5			※
30											※
31		Y	砕片	ホルンフェルス	1.0	1.0	0.2	0.3			※
32		※	※	珪岩	1.8	1.5	0.4	1.3			※
33		※	割片	珪岩	1.9	2.8	0.5	2.4	下半部		※
34		Y	割片	ホルンフェルス	4.1	3.2	1.4	12.9		27	※
35											※
36		Y	割片	ホルンフェルス	0.7	1.5	0.5	0.4			※
37	39	※	割片	頁岩	4.0	2.5	0.8	6.3		16	※
38		※	砕片	※	1.8	0.7	0.2	1.1			※
39	36	※	※	黒曜石	0.9	1.1	0.3	1.6			※
40		※	砕片	※	0.5	0.7	0.3	0.6			※
41		M	割片	※	1.2	2.6	0.4	2.3			※
42		Y	砕片	※	0.5	0.9	0.2	0.8			※
43	36	※	ナイフ形石器	ホルンフェルス	6.2	2.0	0.7	7.9	先端部		※
44		M	砕片	頁岩	2.0	1.1	0.7	1.8			※
45											※
46	36	Y	U割片	頁岩	7.0	2.6	0.7	12.4			※
47	36	M	割片	ホルンフェルス	3.1	3.9	0.9	10.3		24	※
48		Y	※	頁岩	2.5	2.2	0.5	1.9			※
49		※	※	ホルンフェルス	3.2	1.8	0.5	3.6	基部		※
50		※	砕片	※	1.0	1.7	0.3	1.7			※
51	39	M	尖頭器	黒曜石	6.2	2.5	0.6	7.3	先端部		D地区
52	39	M	スタレイバー	※	3.2	2.4	0.7	6.1	下半部		※

第7表 先土器時代石器一覧表

結 語

武蔵国分寺址では、僧寺伽藍区域を限る四周が確認されているが、その北限は台上の対端に近く東西に走っていて、現在の薬師堂（本尊薬師仏は龍精一氏によれば平安末の作かというが現存建物は江戸時代）の中央下を通っている。堂から東へ郵政住宅地を通りリオン株式会社内に延び、一本は直角に曲って南に向い崖を降りて塔址の東側を走り、他の一本は直線状に台上を東に向う。

この北限の溝の北側が国分寺との関係で、どのようになっているかは考究上大いに興味のある処であるが、現状は郵政住宅の戦後応急に建てた木造建物群（そのうちかなりの数は既に空家になっている）。さらにその北、道路（国分寺→国立）を隔てて鉄道研究所の大敷地である。これらの地については、研究上からも是非調査を許して貰いたいし、一部分は既に先方の好意によって発掘調査を了えている。

国分寺僧寺の主要建物は、府中に面する低地に大方の規格に添う形で置かれていたが、背後（北側）のこの台上にも一二の建造物があったことが予想され、既に仮称北院と名付けた北方建物址が現薬師堂に近い一段おりた傾面地を整地して建てられていたことが確認されている。現仁王門はその建物址のさらに一段下の斜面中段にある。

この北限の溝の東西に走る大地は、薬師堂の西に八幡社があり、斜面地にかけて樹林であるので、発掘はかなり限られた部分しか行っていなかったが、この十数年、溝を越えた北側で、林を切り開いて宅地にする計画が相次ぎ、はじめの四階建一棟はかなり前に事前調査を経ないまま建てている。その先例があるので以後は、慎重に対処し、リオン株式会社はじめ各位の好意によりかなり詳細な調査を繰返してきた。今回の調査は、既調査の結果、この地には先土器・縄文以降の遺跡が重複しさらに奈良平安に及ぶことを知った。従って、所有者側からみれば迷惑であろうが、今回の調査に至った次第である。

一方、調査の内容もかなり一層精度を加えたこともあり、そのため一般論として、調査日数、経費などの増加にはやむを得ないものもあり、両者共に好意を持ったとしても、工事計画と調査計画が噛み合わない事例は多くなっている。（これについては、何とかどこかで基本的な形をとりまとめる必要があるが、何度か試みられたことを聞くが結論づけられてはいない。文化財保護が空転する日が近づいてきたようにも思われ、危惧するものである）。

調査は、一応順調に進んだ。予測するように先土器・縄文についてそれぞれ資料を得ることができた。殊に縄文では早期以降後期に至る遺物が出土し、本文中に示すような成果があった。と

ここで、焦点になる国分寺関係でもいくつかの貴重な資料が検出された。その主になるものは、調査区南部で発掘された四棟の掘立柱建物である。

かねてから、僧尼寺を含む一帯が、国分寺建設地として設定されて以来、寺自体の組織による人の居住、又これに伴う人びとの生活がどのように営まれていたのかを、遺構建物の面からどの程度解明することができるのか、奈良時代以降、新田義貞の鎌倉攻めのころまでをひと区限として、明らかにしたいという目標をたてているので、今回の調査による資料も貴重な役割を果たすものといえる。

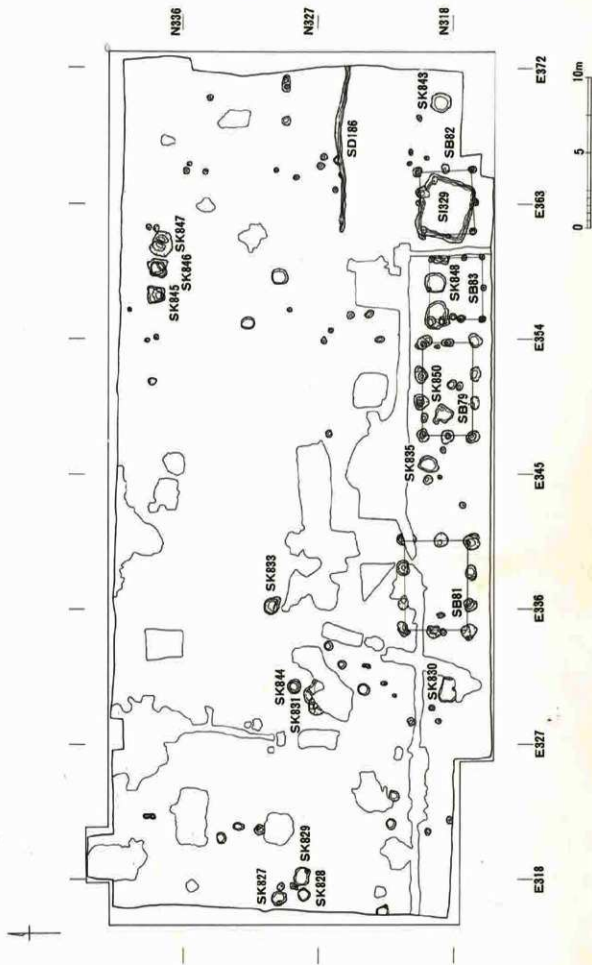
調査結果では、北限を示す台上の溝の北120mほどが調査区域の南限であり、そこに四棟の掘立柱建物が確認できたのである。それらを仮に西からA B C Dとすると、Bはやや奥行が狭いがA Bは共に三間二間の掘立造り、間隔7mほどで略東西に並ぶ。共に径20cmほどの柱を10本使っており同時期とみられる。次にBの東に同じく間隔7mほどでDが建てられているが、これは二間二間のやや奥行のせままった掘立造りでA Bと同時のものと判断できよう。さらに次にBとDの中間空き地にDと同型の二間二間の掘立造りを置いている、中心をB Dの中心よりやや前(南)にずらしているので建物全体が心もち南に張り出している。この点いくらかの時間差を認めなければならないかとも思うが、それもさ程大きなものではなかろう。なお、Dの廃絶後ここに竪穴式の一屋が建てられたが、これは四棟廃絶後と考えるのが順当であろう。とすれば、四棟の建造年代を10世紀前半におき、竪穴を10世紀後半以後とすることは至当である。

なお、四棟共に建て替えはしていないので、これらの建物は同時又はずれがあるとしても近接した時期に東西に軒を連ねていたといえよう。建物にはいずれも炉・カマドの施設を欠くので、屋瓦を載せない土間式の小屋と考えられるが、本文中で考証しているように、僧寺北辺の構造物中最古に属するものといえる。さらに、この四棟の建物群の南側約3mで建物に平行して東西に走る幅1mほどの道路状遺構が発見されていることも併せて考察の助けになるものである。

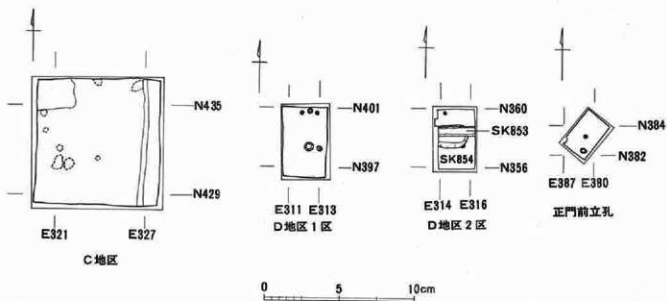
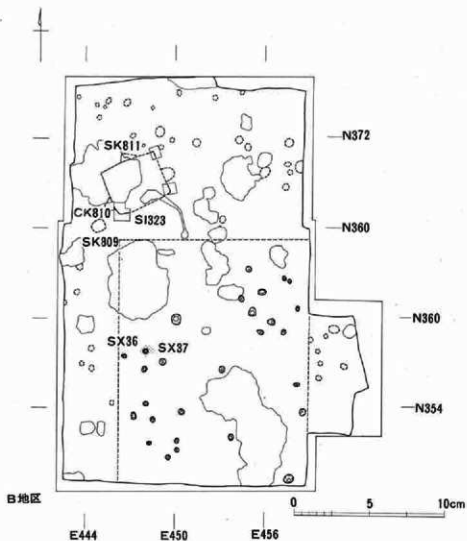
(調査団長 滝口 宏)

圖 面

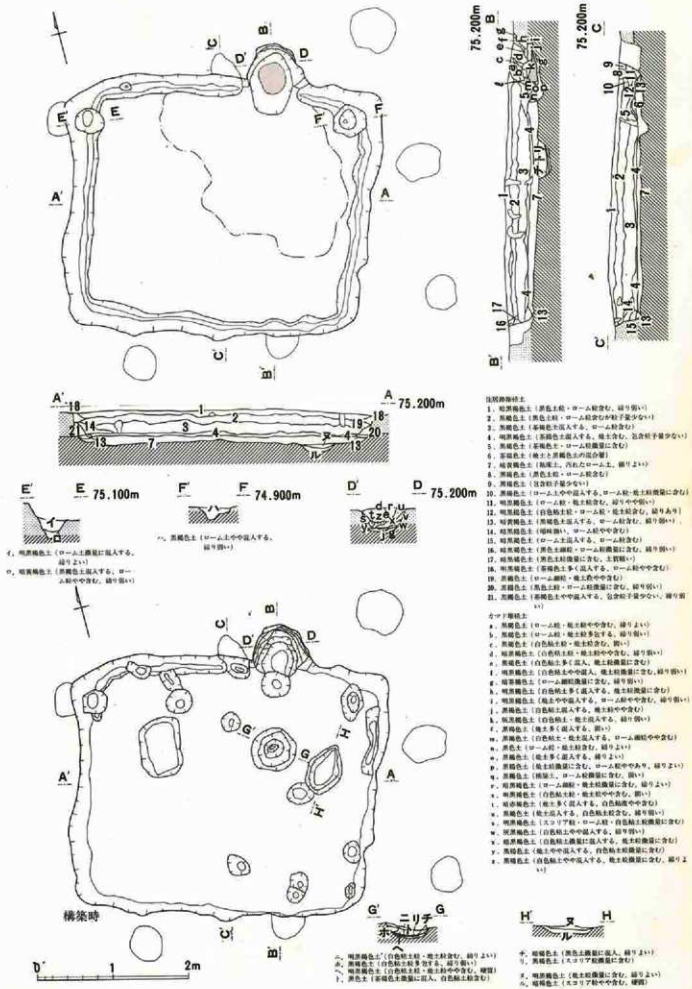
図面1 A地区歴史時代遺構配置図



図面2 B・C・D地区歴史時代遺構配置図



図面 3 SI 329住居跡実測図



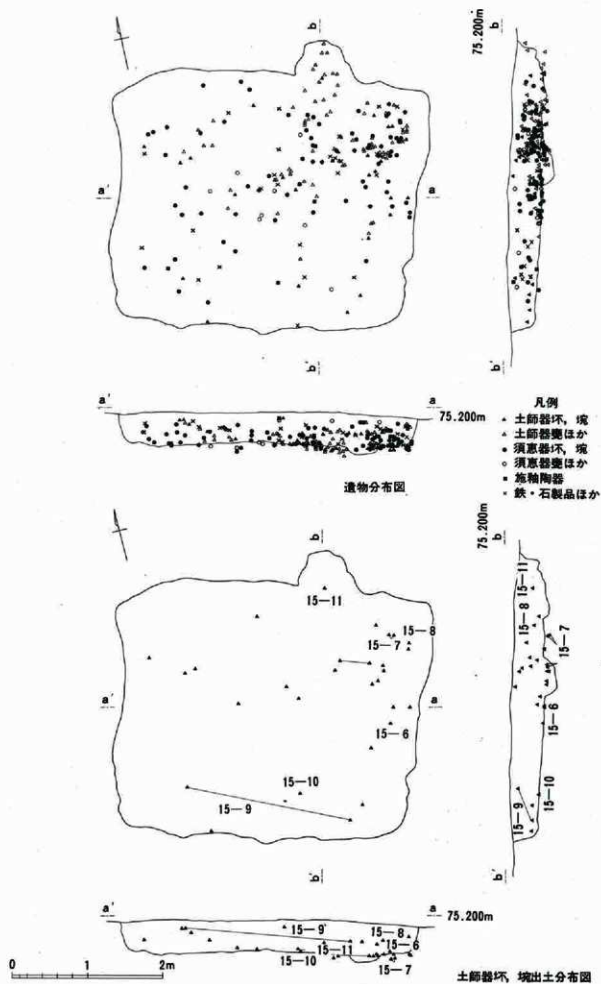
- 住居跡層序表
1. 灰黒褐色土 (黒色土層・ローム粒含む、緩り弱い)
 2. 黒褐色土 (黒色土層・ローム粒含む砂子量少ない)
 3. 黒褐色土 (茶褐色土層入下層、ローム粒含む)
 4. 灰黒褐色土 (茶褐色土層入下層、堆土含む、包含砂子量少ない)
 5. 黒褐色土 (茶褐色土・ローム粒層含む)
 6. 茶褐色土 (堆土上層褐色土の混合層)
 7. 灰黒褐色土 (黒褐色土、穴れたローム土、緩り弱い)
 8. 黒褐色土 (黒色土層・ローム粒含む)
 9. 黒褐色土 (包含砂子量少ない)
 10. 黒褐色土 (ローム土の中層入下層、ローム粒・堆土粒層に含む)
 11. 灰黒褐色土 (ローム粒・堆土粒含む、緩り弱い)
 12. 灰黒褐色土 (白色粘土層・ローム粒・堆土粒含む、緩り弱い)
 13. 灰黒褐色土 (茶褐色土層入下層、ローム粒含む、緩り弱い)
 14. 灰黒褐色土 (堆土層)、ローム土の中層含む)
 15. 灰黒褐色土 (ローム土層入下層、ローム粒含む)
 16. 灰黒褐色土 (黒色土層、ローム粒層に含む、緩り弱い)
 17. 灰黒褐色土 (堆土層に含む、土質弱い)
 18. 灰黒褐色土 (茶褐色土層入下層、ローム粒の中層含む)
 19. 黒褐色土 (ローム層、堆土の中層含む)
 20. 黒褐色土 (黒色土層・ローム粒層に含む、緩り弱い)

- 土中下層土
- a. 黒褐色土 (ローム粒・堆土粒の中層含む、緩り弱い)
 - b. 黒褐色土 (ローム粒・堆土粒多量含む、緩り弱い)
 - c. 黒褐色土 (白色粘土層・堆土粒含む、弱い)
 - d. 灰黒褐色土 (白色粘土層・堆土粒の中層含む、緩り弱い)
 - e. 灰黒褐色土 (白色粘土層多量含む、堆土粒層に含む)
 - f. 灰黒褐色土 (白色粘土層に含む、堆土粒層に含む、緩り弱い)
 - g. 灰黒褐色土 (ローム層に含む、堆土層に含む、緩り弱い)
 - h. 灰黒褐色土 (白色粘土層入下層、堆土粒の中層含む)
 - i. 灰黒褐色土 (堆土層入下層、弱い)
 - j. 黒褐色土 (堆土層入下層、ローム層の中層含む)
 - k. 黒褐色土 (ローム層・堆土層含む、緩り弱い)
 - l. 黒褐色土 (堆土層多量含む、緩り弱い)
 - m. 黒褐色土 (堆土層に含む、ローム粒の中層含む、緩り弱い)
 - n. 黒褐色土 (堆土層に含む、ローム粒の中層含む、緩り弱い)
 - o. 黒褐色土 (堆土層に含む、ローム粒の中層含む、緩り弱い)
 - p. 黒褐色土 (堆土層に含む、ローム粒の中層含む、緩り弱い)
 - q. 黒褐色土 (堆土層、ローム層に含む、弱い)
 - r. 灰黒褐色土 (ローム層・堆土層層に含む、緩り弱い)
 - s. 灰黒褐色土 (白色粘土層・堆土粒の中層含む、弱い)
 - t. 灰黒褐色土 (堆土層入下層、白色粘土層の中層含む)
 - u. 灰黒褐色土 (ローム層・堆土層層に含む、緩り弱い)
 - v. 灰黒褐色土 (白色粘土層入下層、堆土粒の中層含む)
 - w. 灰黒褐色土 (白色粘土層に含む、堆土層層に含む)
 - x. 灰黒褐色土 (堆土層入下層、白色粘土層層に含む)
 - y. 灰黒褐色土 (堆土層入下層、白色粘土層層に含む)
 - z. 灰黒褐色土 (白色粘土層の中層含む、堆土層層に含む、緩り弱い)

イ、灰黒褐色土 (ローム土層層に堆土入する、緩り弱い)
 オ、灰黒褐色土 (茶褐色土層入下層、ローム粒の中層含む、緩り弱い)

イ、灰黒褐色土 (白色粘土層・堆土粒含む、緩り弱い)
 オ、灰黒褐色土 (白色粘土層多量含む、堆土粒含む)
 カ、灰黒褐色土 (白色粘土層・堆土粒の中層含む、緩り弱い)
 キ、灰黒褐色土 (茶褐色土層層に堆土入、白色粘土層含む)
 ク、灰黒褐色土 (白色粘土層に含む、堆土層層に含む)
 ケ、灰黒褐色土 (堆土層入下層、堆土層層に含む)
 コ、灰黒褐色土 (堆土層入下層、堆土層層に含む)
 ケ、灰黒褐色土 (堆土層層に含む、堆土層層に含む)
 コ、灰黒褐色土 (堆土層層に含む、堆土層層に含む)
 ケ、灰黒褐色土 (堆土層層に含む、堆土層層に含む)
 コ、灰黒褐色土 (堆土層層に含む、堆土層層に含む)

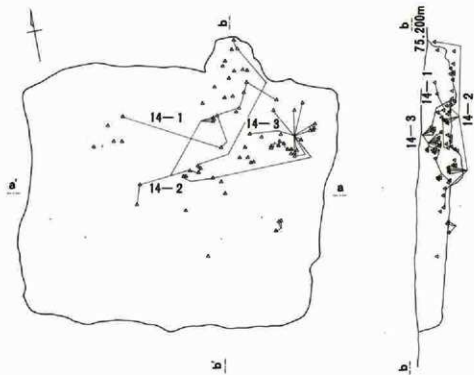
図面4 SI 329住居跡実測図



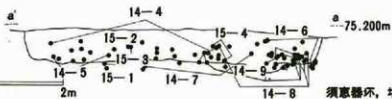
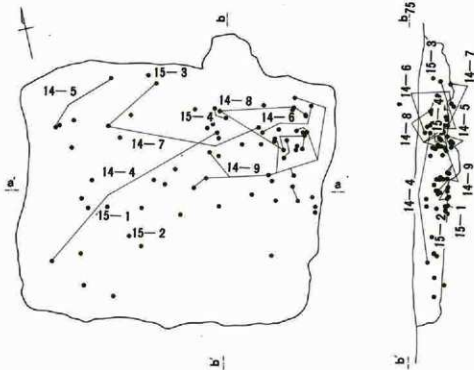
遺物分布図

土師器坏, 埴出土分布図

図面 5 SI 329 住居跡実測図

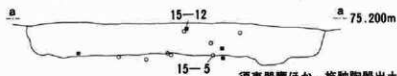
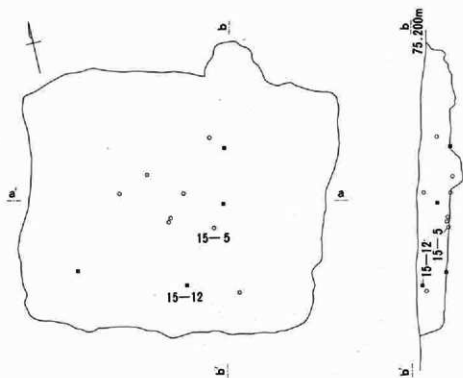


土師器壺ほか出土分布図

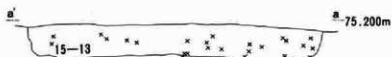
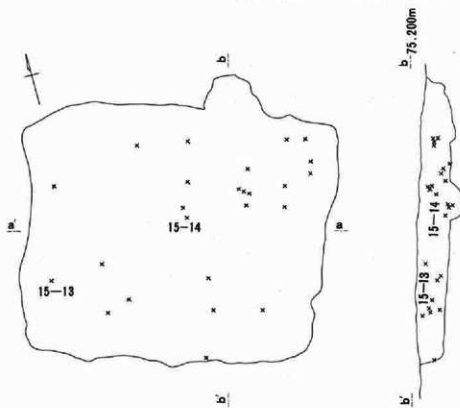


須恵器坏, 出土分布図

図面 6 SI 329住居跡実測図



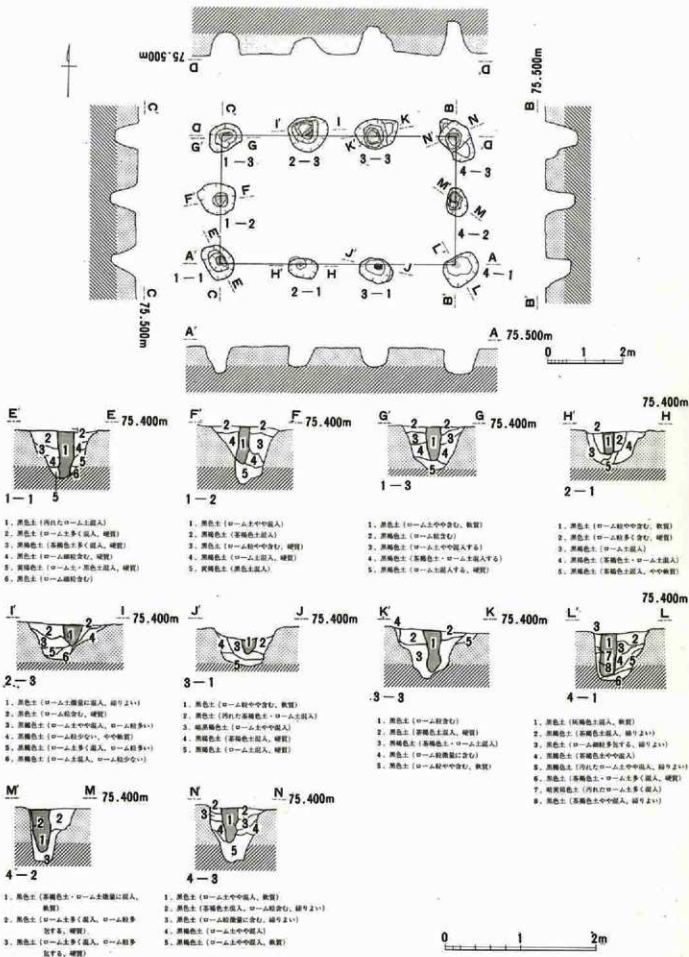
須恵器壺ほか、施釉陶器出土分布図



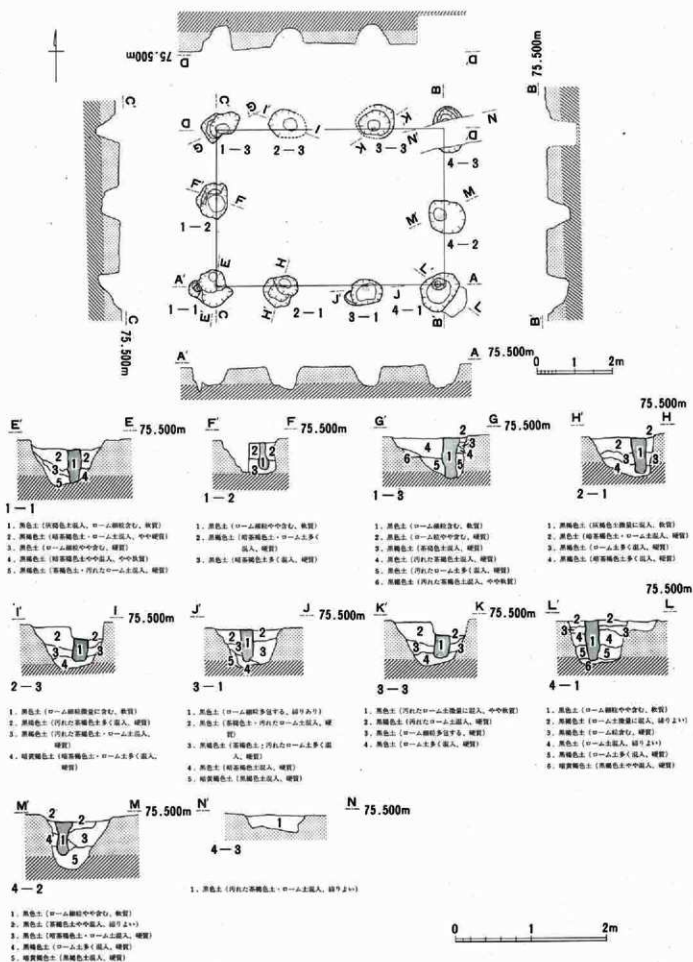
鉄・石製品ほか出土分布図



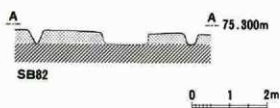
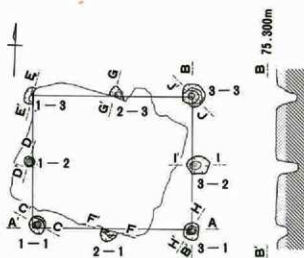
图面7 SB 79獨立柱遺物跡実測圖



図面 8 SB 81 掘立柱建物跡実測図



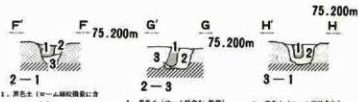
図面9 SB 82・83竪立柱建物跡実測図



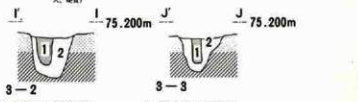
SB82



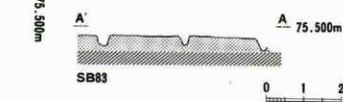
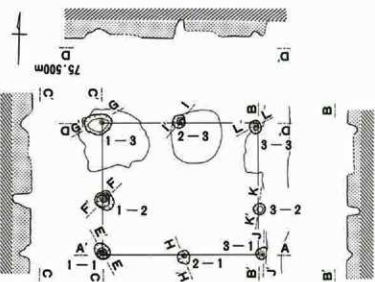
- 1. 黒色土 (ローム組織多量存在、盛り土?)
- 2. 黒色土 (暗茶褐色土混入、硬質)



- 1. 黒色土 (ローム組織微量に含む)
- 2. 黒色土 (暗茶褐色土混入、やや軟質)
- 3. 暗茶褐色土 (黒褐色土中混入、硬質)



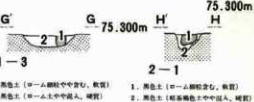
- 1. 黒色土 (ローム組織含む)
- 2. 黒色土 (暗茶褐色土多量混入、硬質)



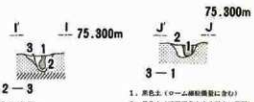
SB83



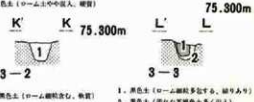
- 1. 黒色土 (ローム組織含む、盛り土?)
- 2. 黒色土 (汚泥状ローム土混入、硬質)



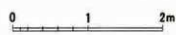
- 1. 黒色土 (ローム組織微量に含む)
- 2. 黒色土 (暗茶褐色土中混入、硬質)



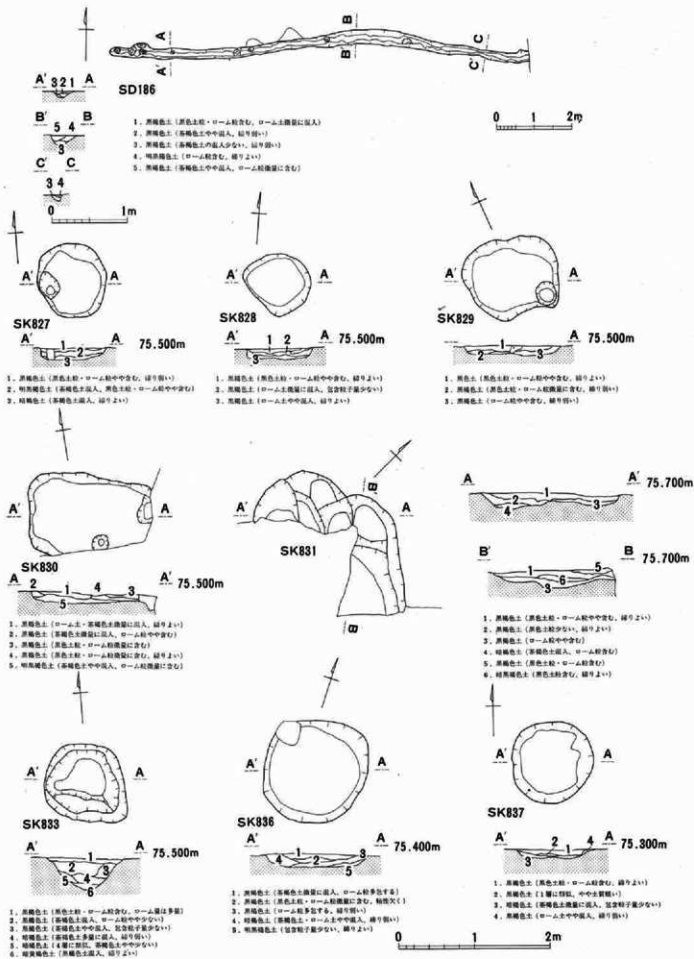
- 1. 黒色土 (軟質)
- 2. 黒色土 (暗茶褐色土混入、硬質)
- 3. 黒色土 (ローム土中混入、硬質)



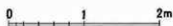
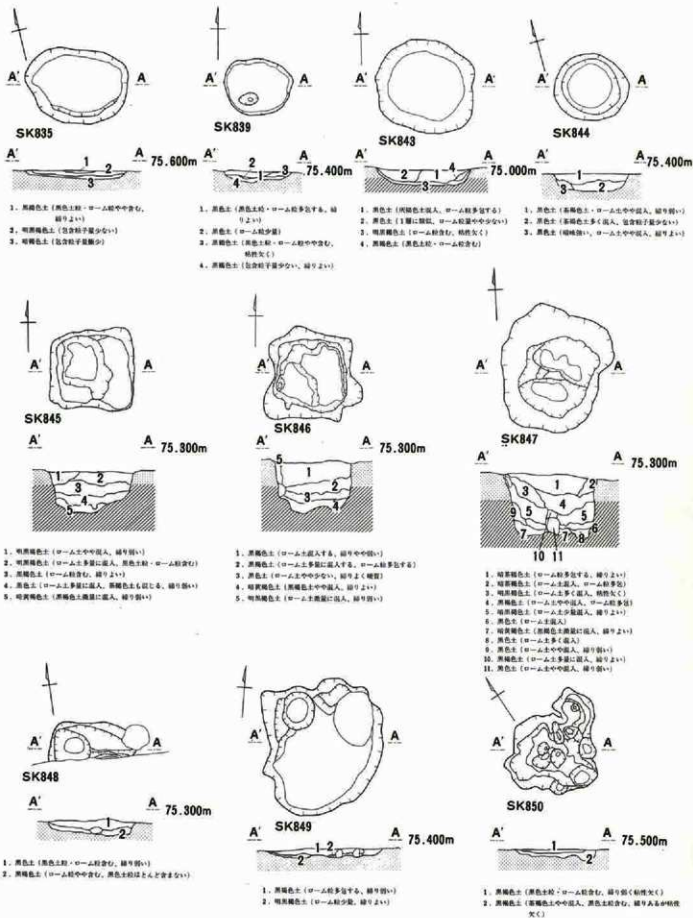
- 1. 黒色土 (ローム組織多量存在、盛り土?)
- 2. 黒色土 (汚泥状暗茶褐色土多量混入)



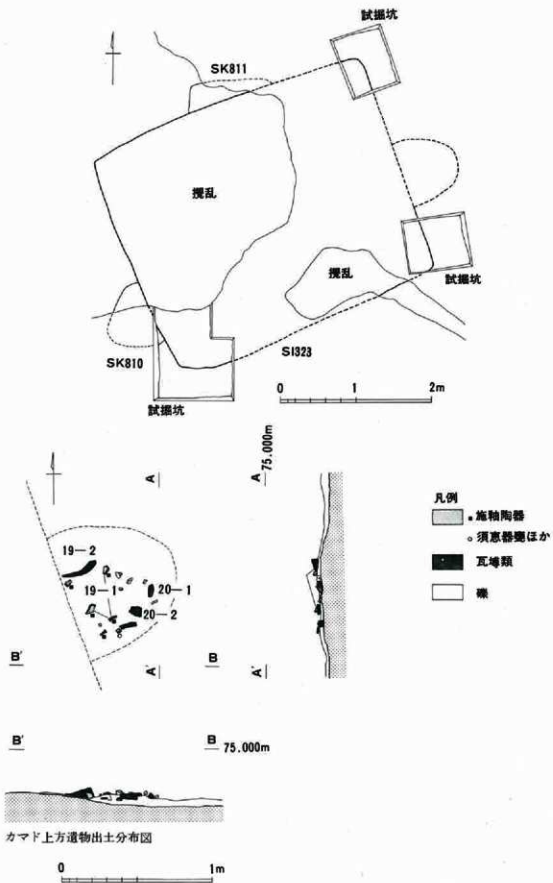
図面10 SD 186溝跡、A地区歴史時代土坑突測図



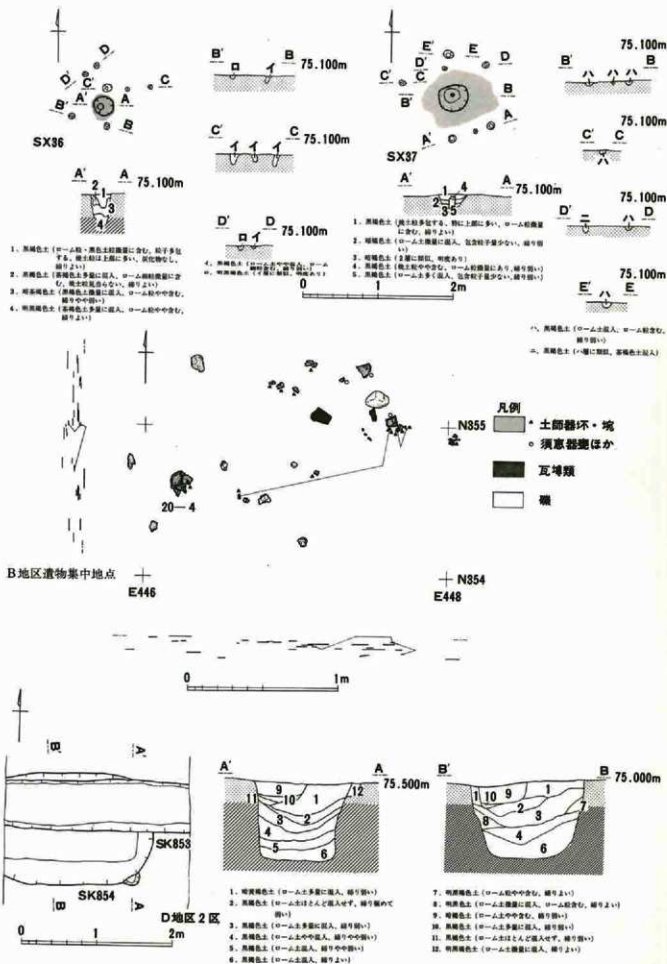
圖面11 A地区歴史時代土坑実測圖



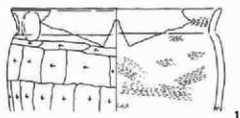
図面12 SI 323住居跡実測図



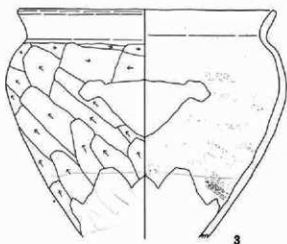
図面13 B地区SX 36・37不明遺構、遺物集中地点、D地区2区歴史時代土坑



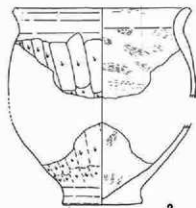
図面14 SI 329住居跡出土遺物



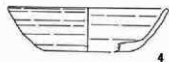
1



3



2



4



5



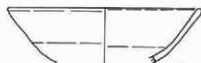
6



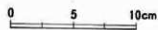
7



8

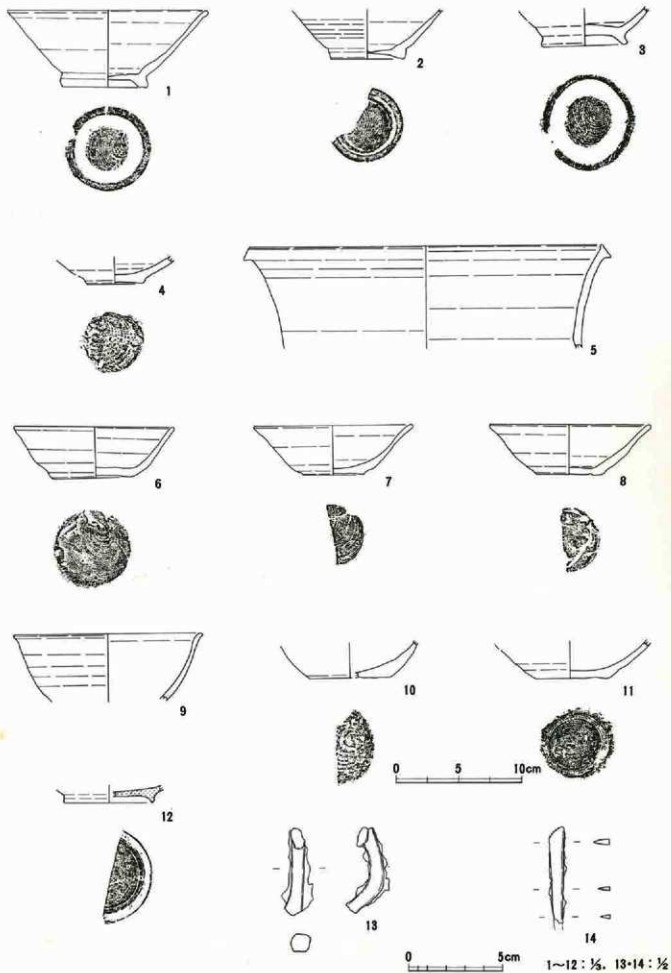


9

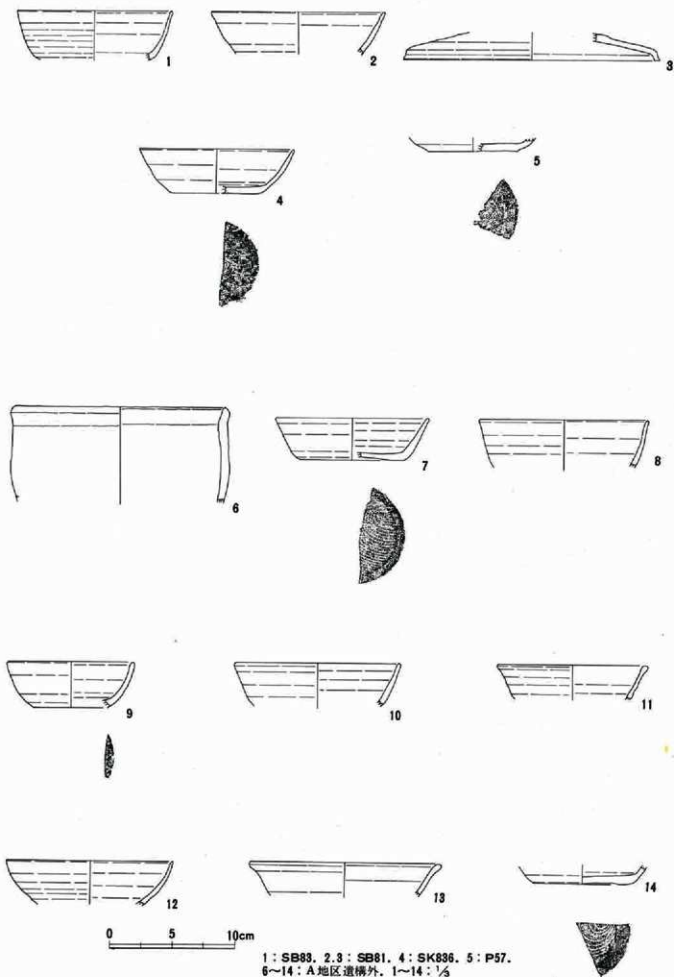


1~9: 1/2

図面15 SI 329住居跡出土遺物

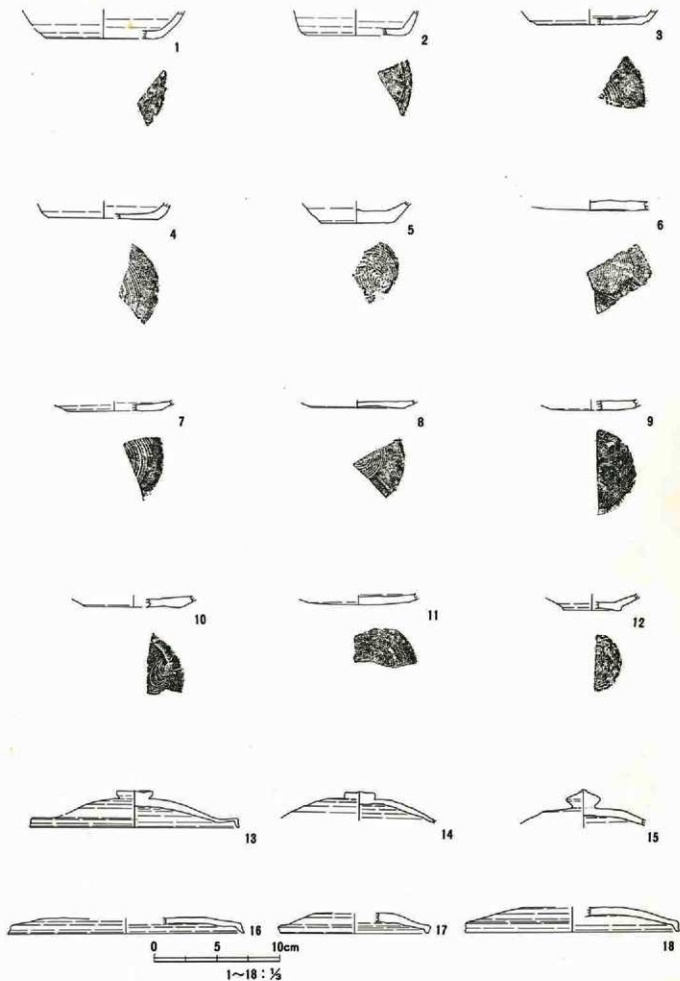


图面16 SB 81・83掘立柱建物跡、SK 836土坑、P 57小穴、A地区遺構外出土遺物

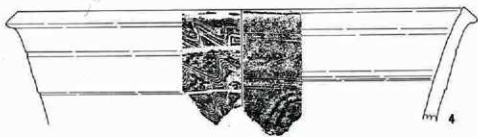


1 : SB83. 2, 3 : SB81. 4 : SK836. 5 : P57.
 6~14 : A地区遺構外. 1~14 : 1/5

图面17 A地区遺構外出土遺物



图面18 A地区遺構外出土遺物

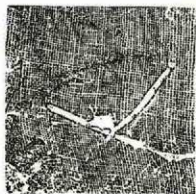
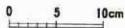
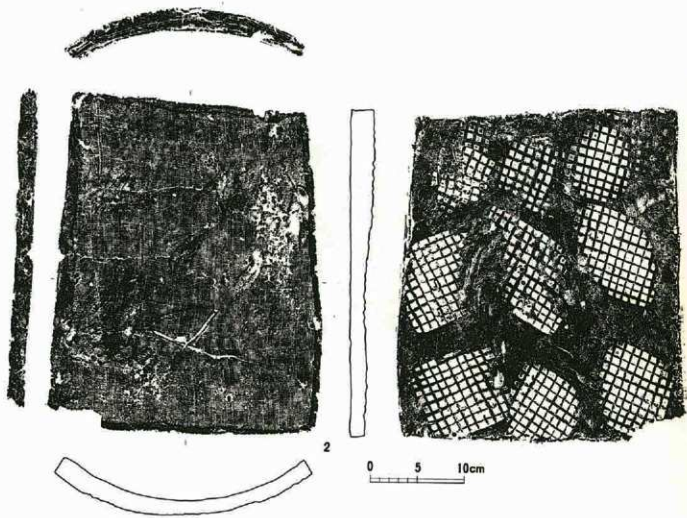
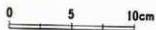


0 5 10cm



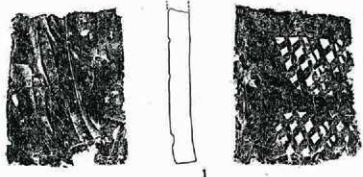
0 5 10cm

1~4: $\frac{1}{2}$, 5~8: $\frac{1}{4}$

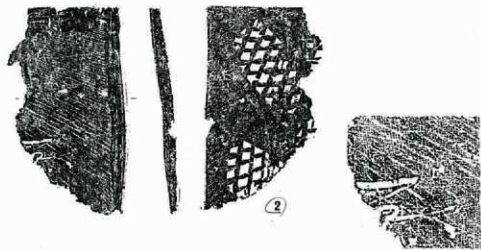


1: 1/8. 2: 1/4

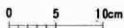
图面20 SI 323住居跡、B地区遺構外出土遺物



1



2



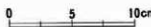
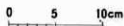
3



5



4



0

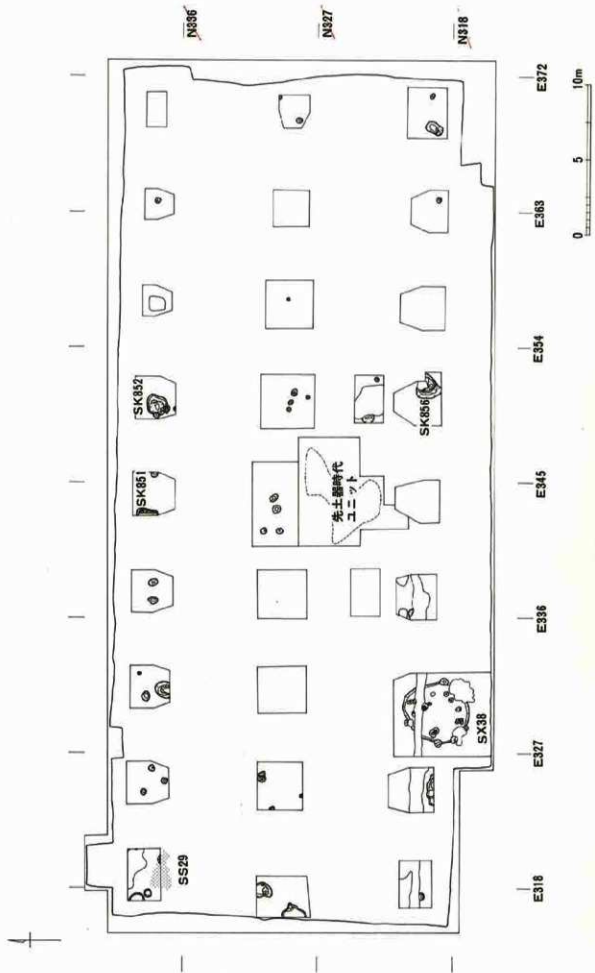
5

10cm

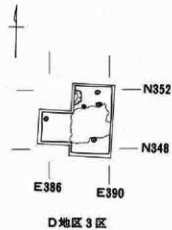
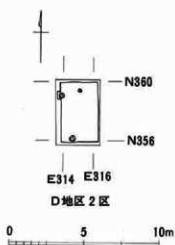
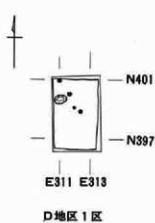
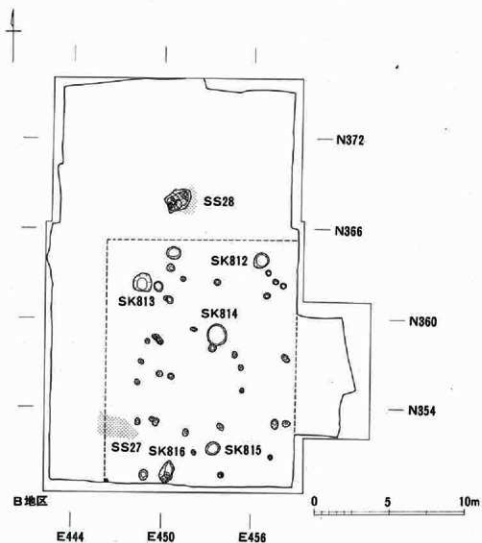
1-2: SI323. 3~5: B地区遺構外

1-2: 1/4. 3, 4: 1/2

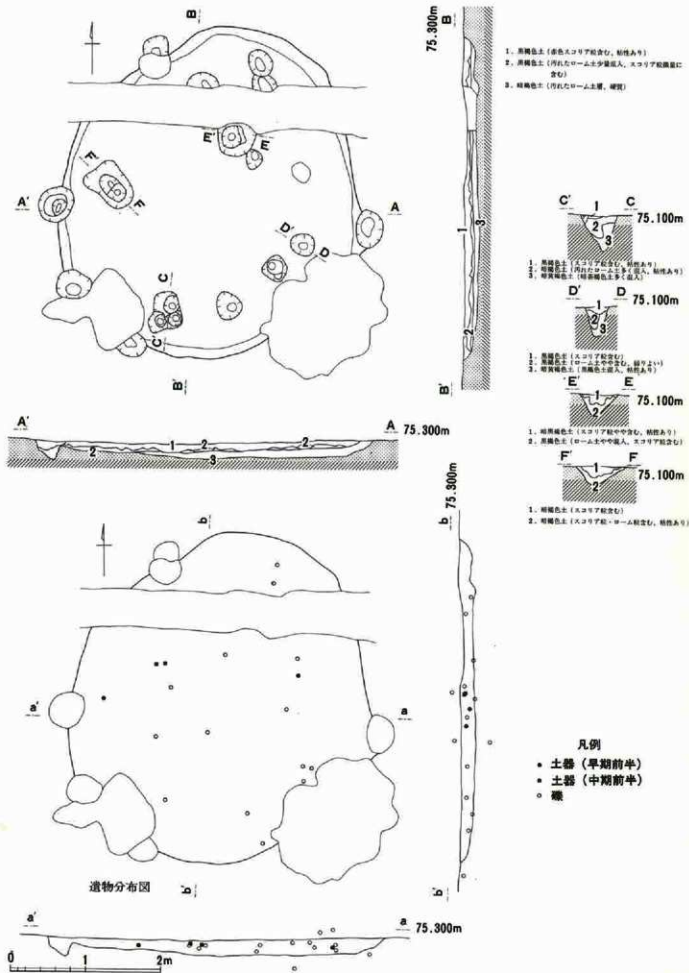
図面21 A地区縄文時代遺構配置図

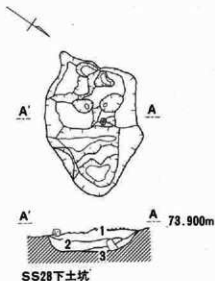
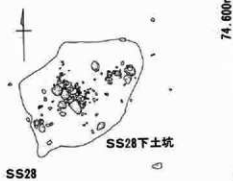
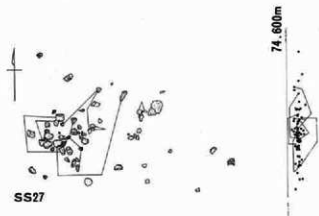


図面22 B・D地区縄文時代遺構配置図

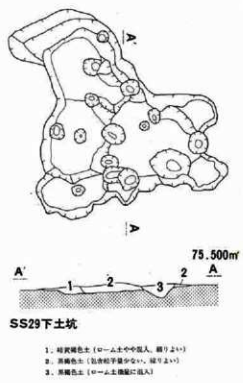
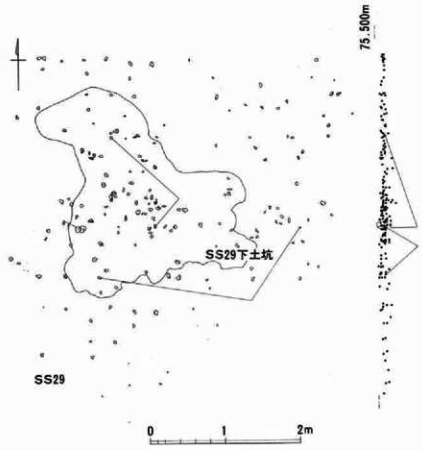


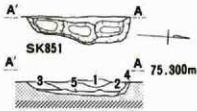
図面23 A地区SX 38型穴状遺構実測図



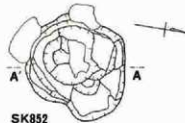


1. 黒褐色土 (ローム土混入、スコリア粒・ローム混在性、縦寸2×)
2. 黒褐色土 (ローム土多量に混入、縦寸2×、横寸入可)
3. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒の中混在、縦寸2×)

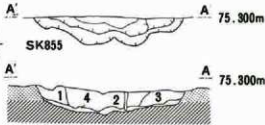




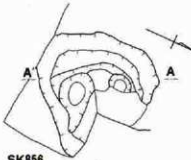
1. 暗黄褐色土 (ローム土塊層に混入、スコリア粒・ローム粒やや多量)
2. 暗黄褐色土 (ローム土混入、スコリア粒やや多量、縞りあり)
3. 暗黄褐色土 (ローム土中混入、縞り強い)
4. 暗黄褐色土 (包含砂子量少ない、ローム土ほとんど混入せず)
5. 暗黄褐色土 (ローム土多量に混入、縞り強い)



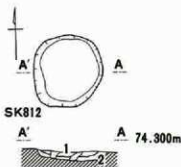
1. 暗黄褐色土 (ローム土中混入、スコリア粒・ローム粒多量)
2. 黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒やや多量、縞り強い)
3. 暗黄褐色土 (ローム土混入、包含砂子量少ない)
4. 黄褐色土 (黄褐色土塊層に混入、縞り強い)
5. 黄褐色土 (黄褐色土塊層に混入、包含砂子量少ない)
6. 黄褐色土 (ローム粒やや多量)
7. 暗褐色土 (包含砂子量少ない、縞り強い)
8. 暗黄褐色土 (スコリア粒含む、縞り強い)
9. 暗黄褐色土 (ローム土中やや多量、包含砂子量少ない)



1. 暗黄褐色土 (包含砂子量少ない、縞り強い)
2. 暗黄褐色土 (ローム粒やや多量)
3. 暗黄褐色土 (包含砂子量少ない)
4. 暗黄褐色土 (ローム粒含む、縞り強い)



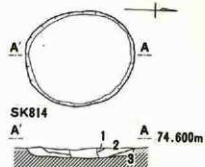
1. 黄褐色土 (ローム土塊層に混入、包含砂子量少ない)
2. 黄褐色土 (ローム土中混入、縞り強い)
3. 暗黄褐色土 (包含砂子量極めて少ない)
4. 暗黄褐色土 (包含砂子量少ない、縞り強い)
5. 暗黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒層に含む)
6. 暗黄褐色土 (包含砂子量少ない)
7. 暗褐色土 (スコリア粒・ローム粒層に含む)



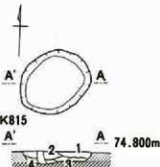
1. 暗黄褐色土 (スコリア粒やや多量、縞り強い)
2. 暗黄褐色土 (ローム土中混入、スコリア粒・ローム粒含む)



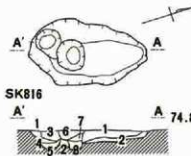
1. 暗褐色土 (ローム土塊層に混入、スコリア粒・ローム粒やや多量)
2. 暗黄褐色土 (ローム土混入、スコリア粒・ローム粒やや多量、縞り強い)



1. 暗褐色土 (ローム粒層に含む、縞り強い)
2. 暗黄褐色土 (ローム土多量に混入、スコリア粒やや多量)
3. 黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む、縞り強い)



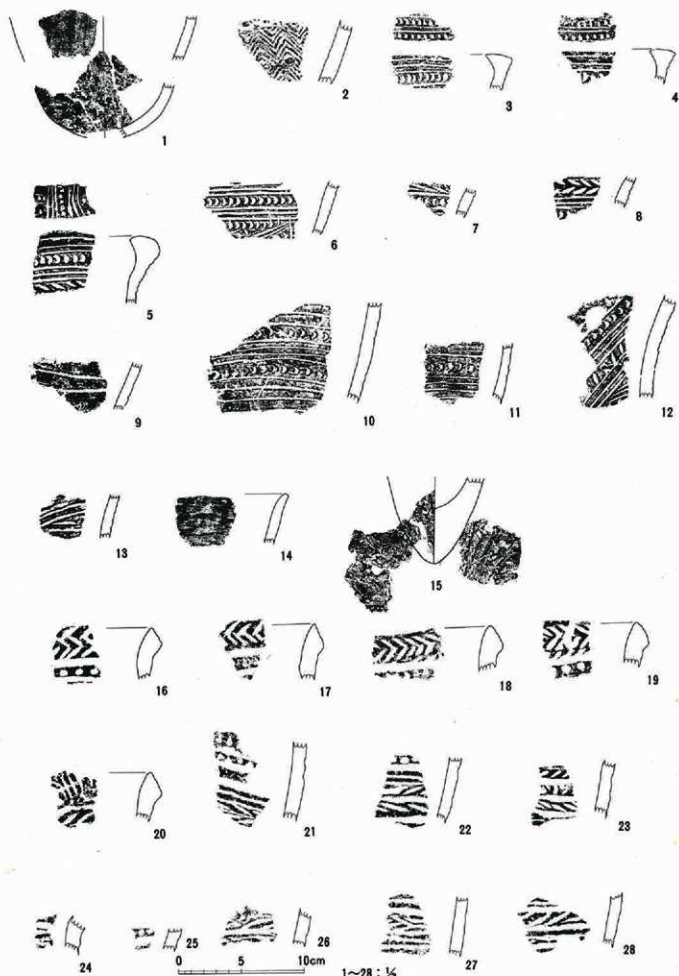
1. 暗褐色土 (厚粘土ローム土中混入、包含砂子量少ない)
2. 暗褐色土 (ローム土混入、縞りやや強い)
3. 暗黄褐色土 (オーボン粒含む、縞り強い)
4. 暗黄褐色土 (スコリア粒・オーボン粒やや多量、縞り強い)



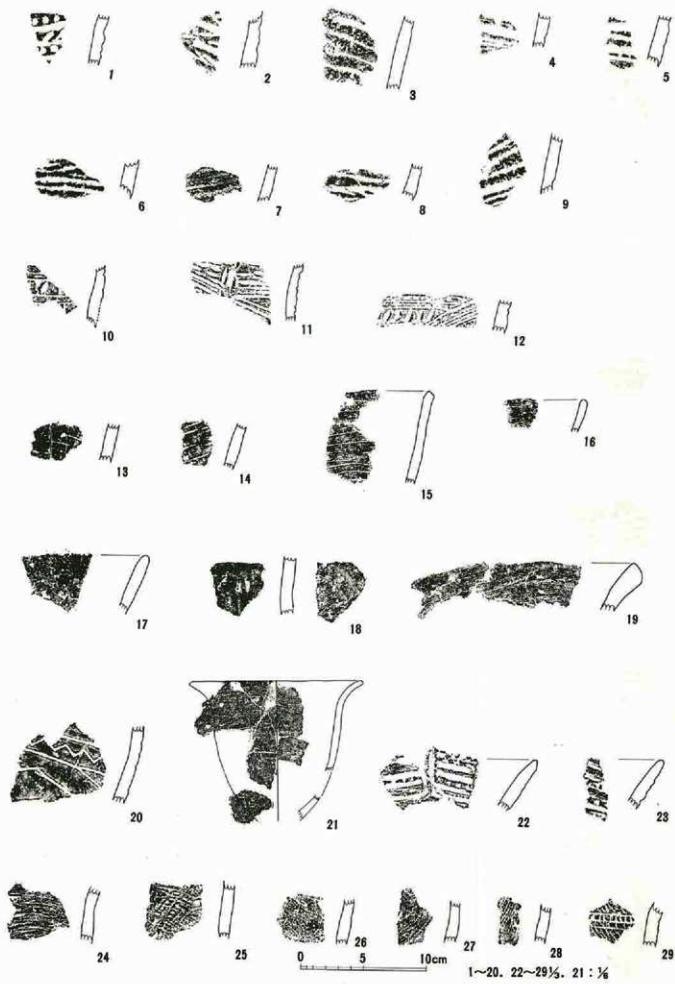
1. 暗褐色土 (スコリア粒多量含む、ローム粒やや多量)
2. 暗黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む、縞り強い)
3. 暗褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む、縞りやや強い)
4. 暗褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む、縞り強い)
5. 暗褐色土 (ローム土中混入、スコリア粒・ローム粒含む)
6. 暗褐色土 (スコリア粒含む、縞り強い)
7. 暗褐色土 (オーボン粒含む)
8. 暗黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒やや多量)

SK851、852、855、856 : A地区
SK812、813、814、815、816 : B地区

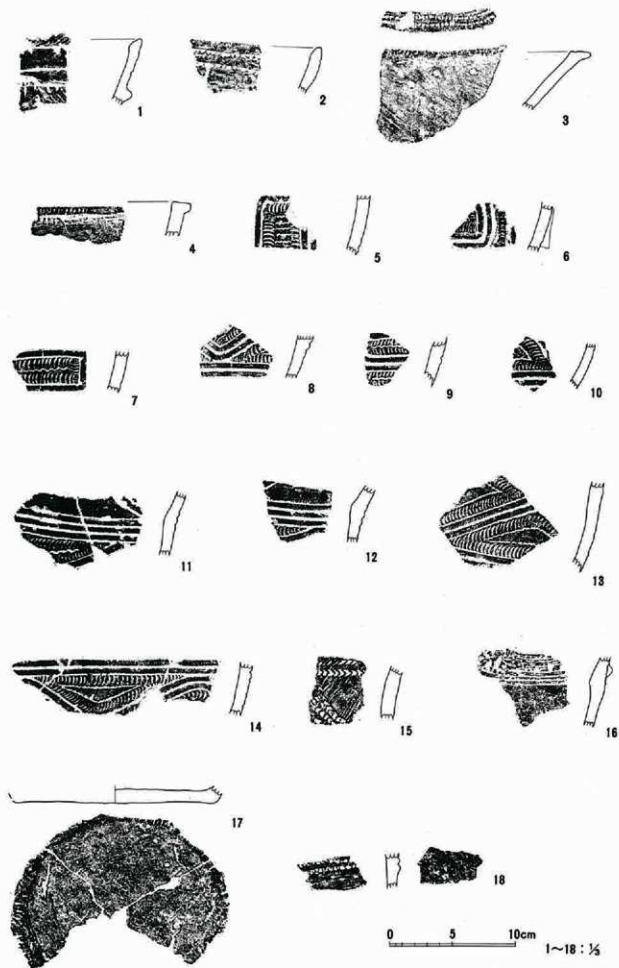
圖面26 繩文土器(1)

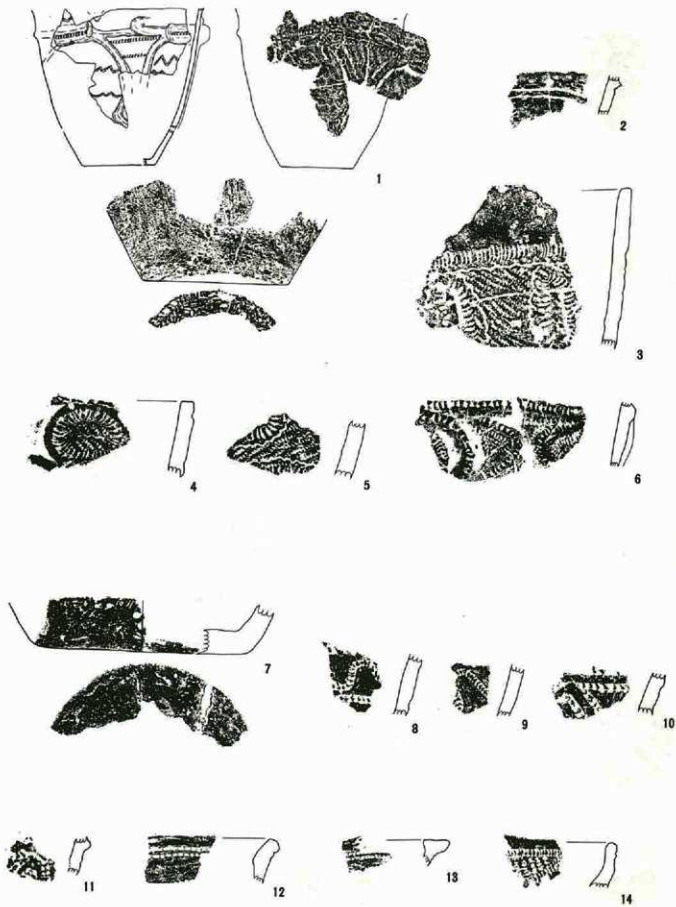


図面27 縄文土器(2)



1~20, 22~29 $\frac{1}{2}$, 21 : $\frac{1}{4}$

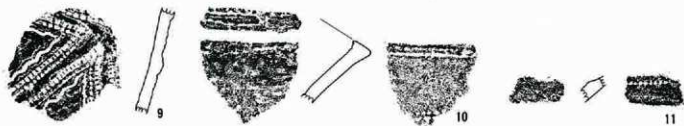
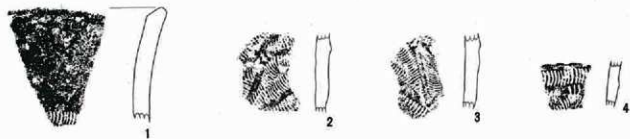




0 5 10cm

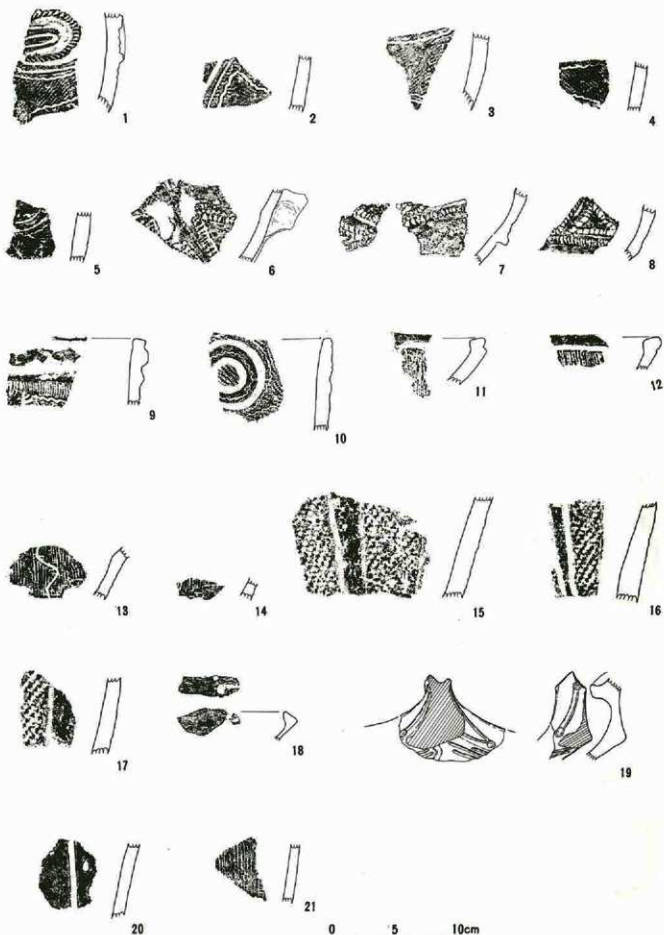
1の体部： $\frac{1}{2}$ 。1の底部～14： $\frac{1}{4}$

図面30 縄文土器(5)



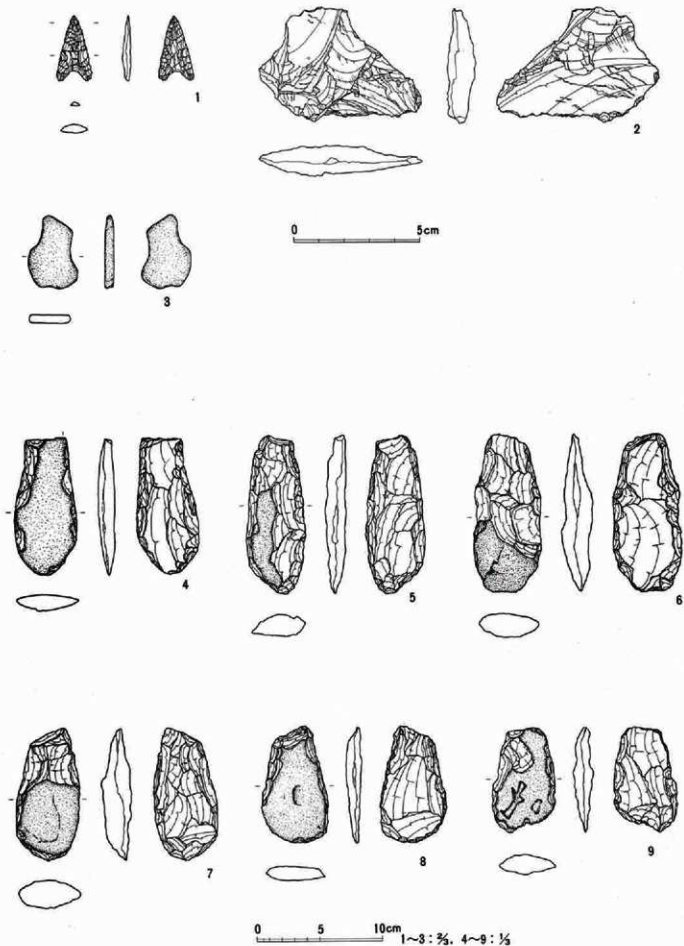
0 5 10cm 1~7・9~13: 1/2, 8: 1/3

図面31 縄文土器(6)

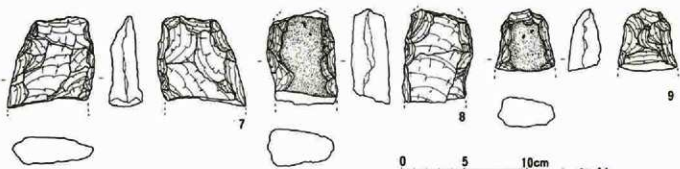
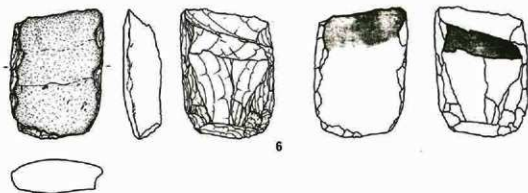
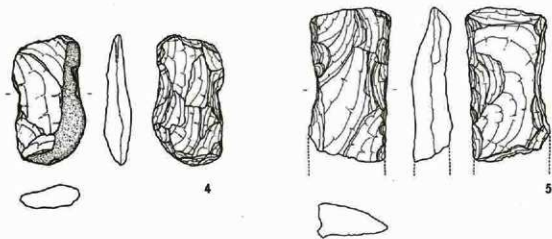
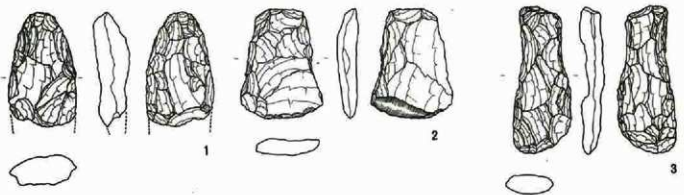


0 5 10cm
1~21: 1/2

图面32 縄文時代石器(1)

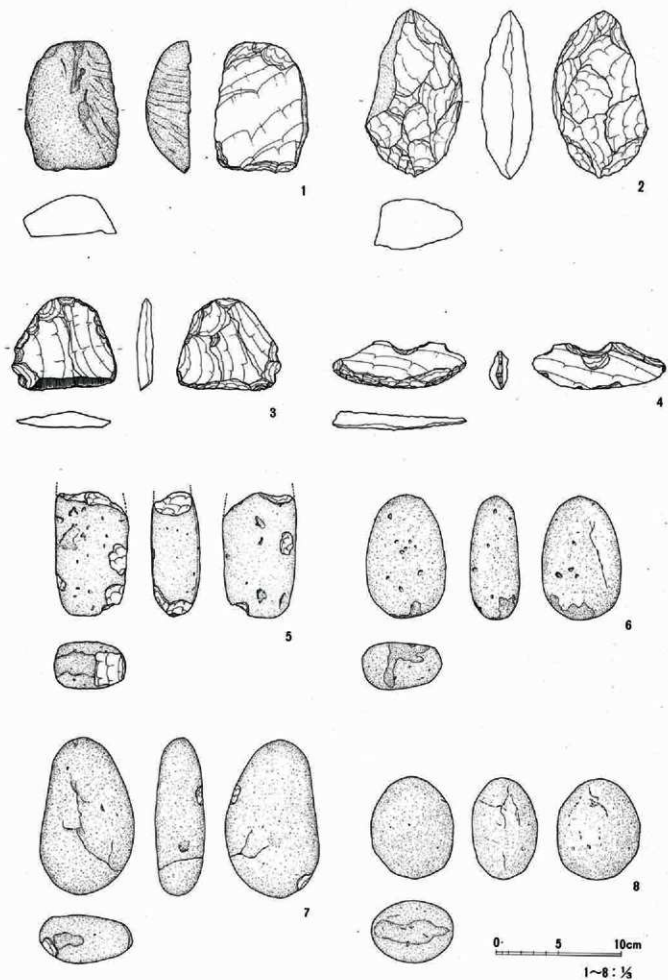


図面33 縄文時代石器(2)

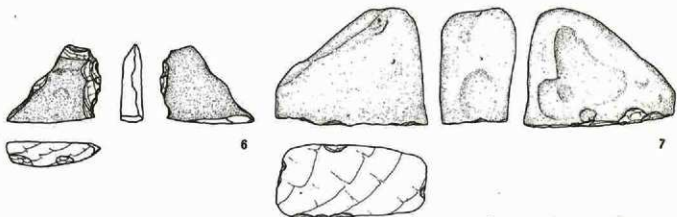
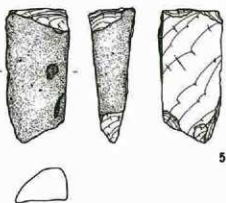
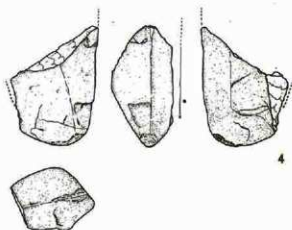
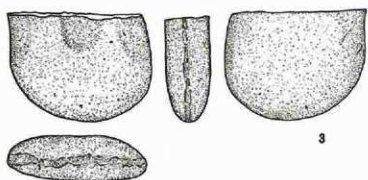
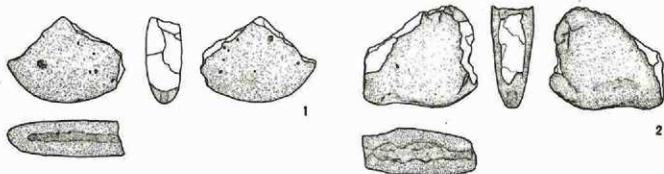


0 5 10cm 1~9: 1/5

図面34 縄文時代石器(3)

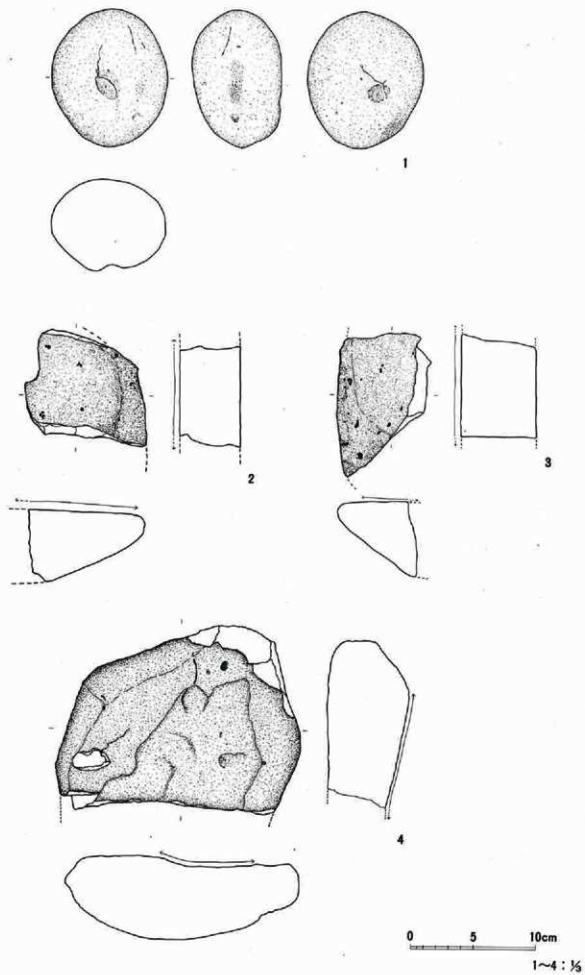


図面35 縄文時代石器(4)

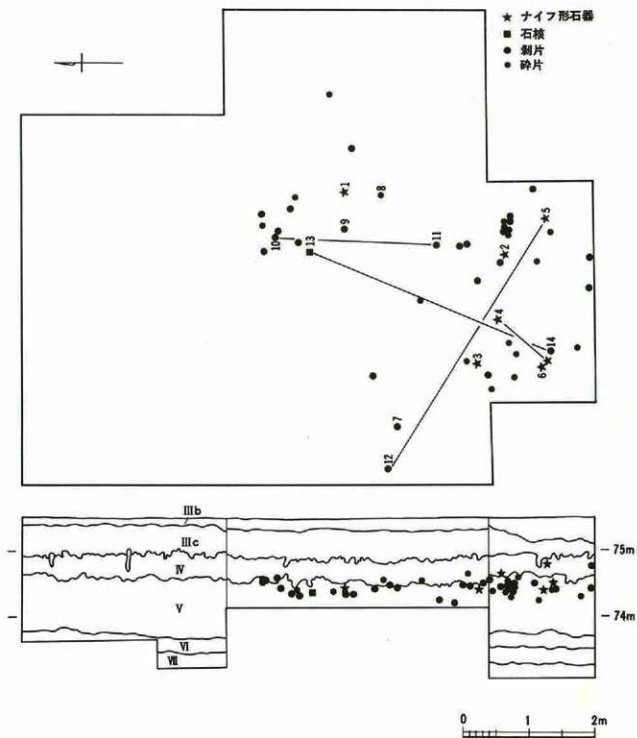


0 5 10cm
1~7: 1/5

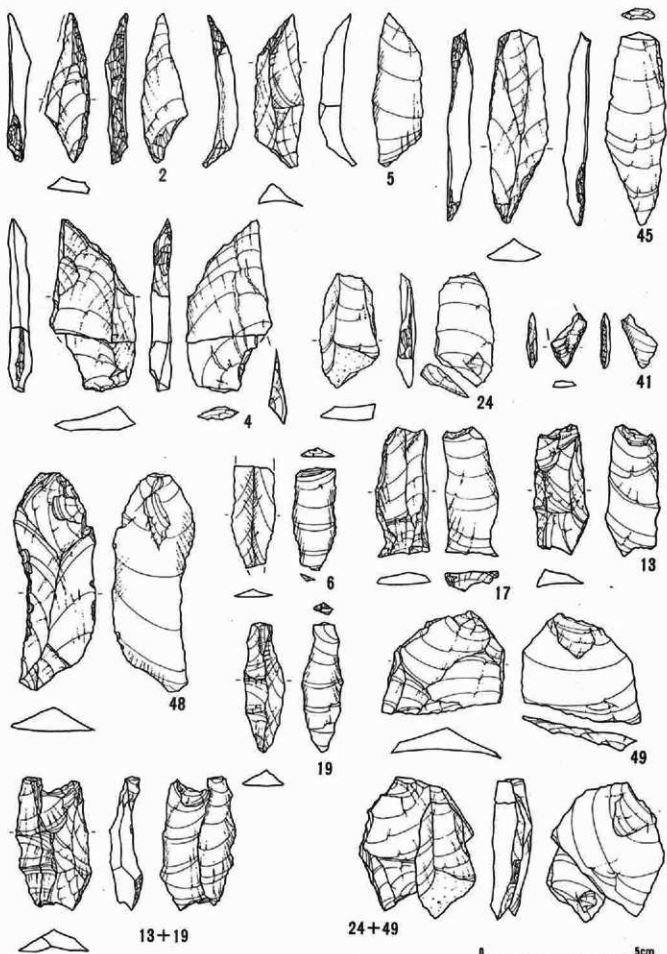
図面36 縄文時代石器(5)



図面37 先土器時代石器分布図



圖面38 先土器時代石器(1)



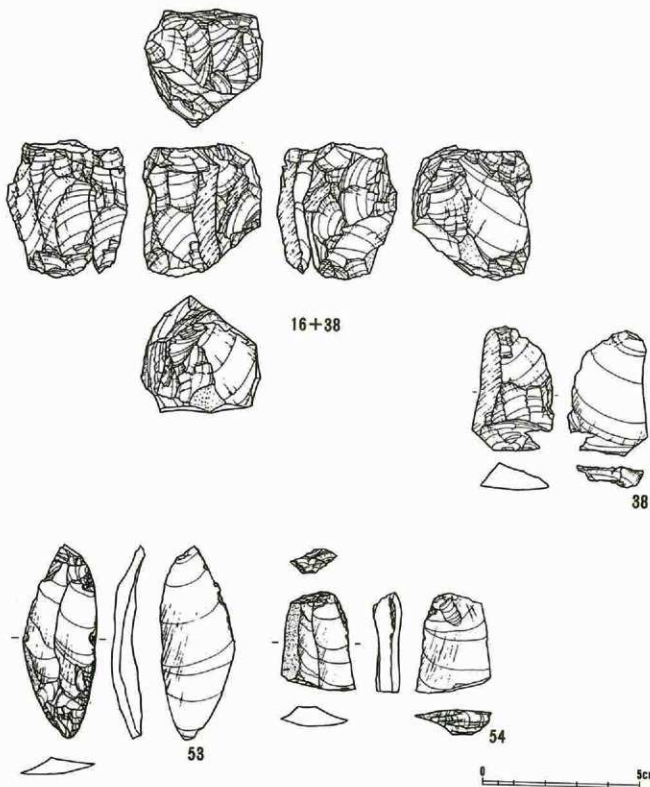


圖 版



1. 掘立柱建物跡、住居跡



1. 全 景 (南から)



2. 構築時全景 (東から)



1. 遺物出土状態 (南から)



2. 遺物出土状態 (東から)



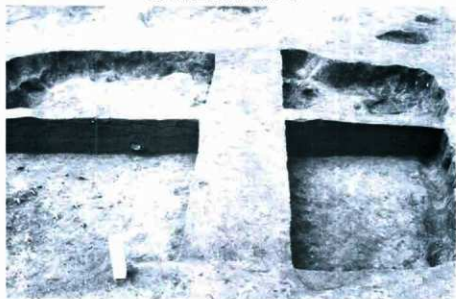
3. カマド遺物出土状態 (南から)



1. カマド構築時全景（南から）



2. 南北土層断面（東から）



3. 東西土層断面（南から）



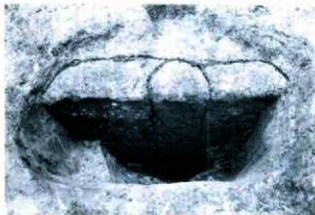
1. 検出時全景（北から）



2. 完掘時全景（北から）



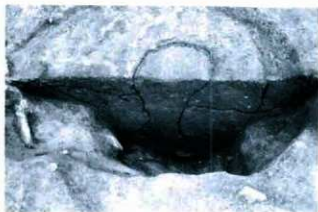
3. 完掘時全景（西から）



1. 1-1柱穴土層断面（西から）



2. 2-1柱穴土層断面（南から）



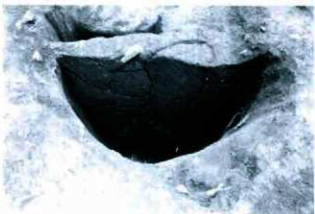
3. 3-3柱穴土層断面（北から）



4. 4-1柱穴土層断面（南から）



5. 4-2柱穴土層断面（北から）



6. 4-3柱穴土層断面（北から）



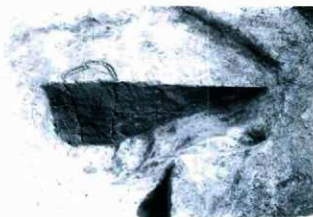
1. 検出時全景 (北から)



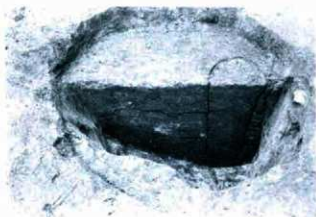
2. 完掘時全景 (北から)



3. 完掘時全景 (東から)



1. 1-1柱穴土層断面 (西から)



2. 2-1柱穴土層断面 (東から)



3. 2-3柱穴土層断面 (北から)



4. 3-1柱穴土層断面 (南から)



5. 3-3柱穴土層断面 (北から)



6. 4-2柱穴土層断面 (北から)



1. 検出時全景（東から）



2. 検出時全景（南から）



3. 完掘時全景（南から）



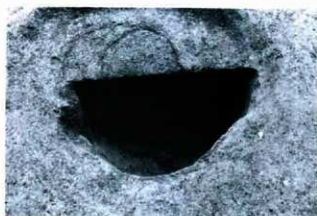
1. 1-1柱穴土層断面（南から）



2. 1-3柱穴土層断面（東から）



3. 2-1柱穴土層断面（北から）



4. 3-1柱穴土層断面（東から）



5. 3-3柱穴土層断面（北から）



1. 検出時全景（北から）



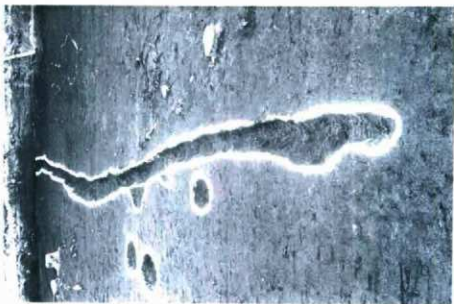
2. 完掘時全景（北から）



3. 1-2柱穴土層断面（西から）



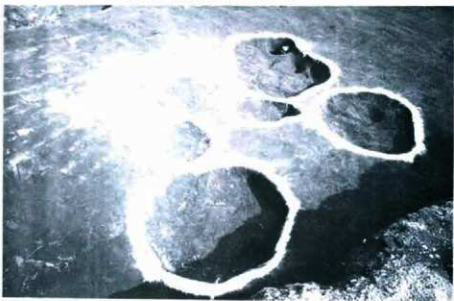
4. 2-1柱穴土層断面（東から）



1. SD 186溝跡全景 (西から)



2. SD 186溝跡全景 (南から)



3. SK 827・828・829土坑全景 (北西から)



1. SK 830土坑東西土層断面（北から）



2. SK 830土坑全景（北から）



3. SK 831土坑東西・南北土層断面（南西から）



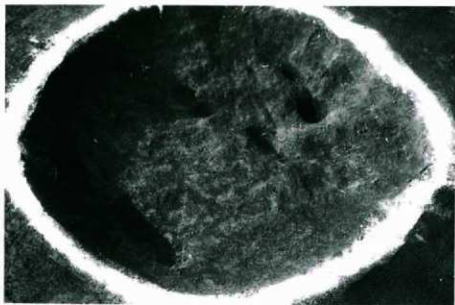
1. SK 833土坑全景 (西から)



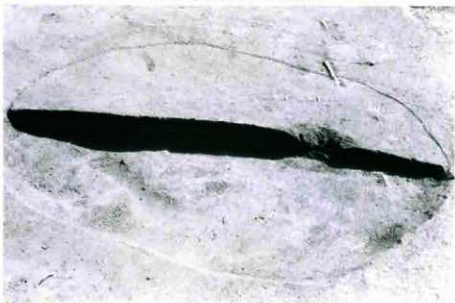
2. SK 836土坑東西土層断面 (北から)



3. SK 836土坑全景 (北から)



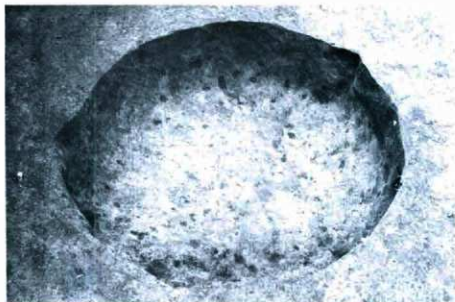
1. SK 837土坑全景（南から）



2. SK 835土坑南北土層断面（西から）



3. SK 839土坑南北土層断面（西から）



1. SK 844土坑全景 (東から)



2. SK 845土坑南北土層断面 (東から)



3. SK 846土坑南北土層断面 (東から)



1. SK 847土坑南北土層断面（東から）



2. SK 845・846・847全景（南から）



3. SK 845・846・847全景（西から）



1. SK 848土坑全景 (南から)



2. SK 849土坑全景 (西から)



3. SK 850土坑全景 (南から)



1. 遺構検出時全景（南から）



2. 調査終了時全景（南から）



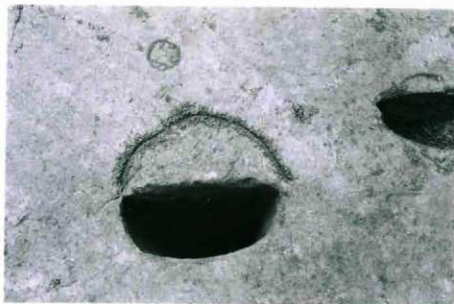
3. 調査終了時北側全景（南から）



1. 検出時全景（西から）



2. カマド上方遺物出土状態（東から）



1. SX 35不明遺構東西土層断面（北から）



2. SX 36不明遺構検出時全景（南東から）



3. SX 36不明遺構東西土層断面（北から）



1. 遺物出土状態全景（西から）



2. 環出土状態（南東から）



3. C地区遺構検出時全景（西から）



14-1



14-3



14-2



14-4



14-5



14-6



14-7



14-8



14-9



15-1



15-2



15-3



15-4



15-5



15-6



15-7



15-8



15-9



15-10



15-12



15-11



15-13



15-14



16-1



16-2



16-3



16-4



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



16-12



16-13



16-14



17-1



17-2



17-3



17-4



17-5



17-6



17-7



17-8



17-9



17-10



17-11



17-12



17-13



17-14



17-15



17-16



17-17



17-18



18-1



18-2



18-3



18-4



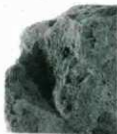
18-5



18-6



18-7



18-8



19-1



19-2



20-1



20-2



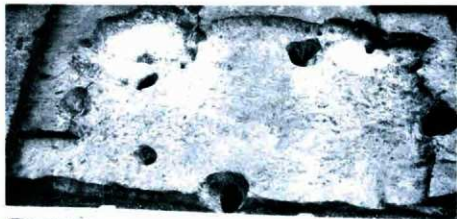
20-5



20-3



20-4



1. 全 景 (北から)



2. 全 景 (東から)



3. 遺物出土状態 (東から)

図版31 SX 38 雙穴状遺構



1. 南北土層断面 (東から)



2. 東西土層断面 (北から)



3. E'-E 小穴東西土層断面 (北から)



4. F'-F 小穴東西土層断面 (東から)



1. SS 27集石全景 (南から)



2. SS 28集石全景 (北から)



3. SS 28集石下土坑全景 (南東から)



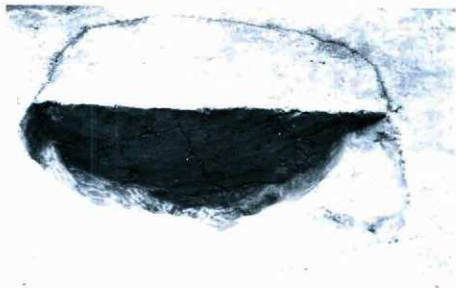
1. SS 29集石全景 (西から)



2. SS 集石下土坑全景 (北から)



3. SS 集石下土坑南北土層断面 (東から)



1. SK 852土坑南北土層断面（東から）



2. SK 855土坑全景（北から）



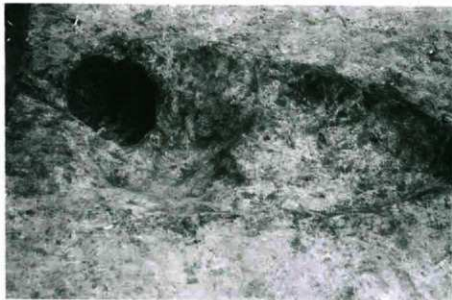
3. SK 856土坑全景（北から）



1. SK 813土坑東西土層断面（北から）



2. SK 815土坑全景（南から）



3. SK 816土坑全景（東から）



1. A地区縄文時代調査終了時全景（西から）



2. A地区縄文時代調査終了時全景（東から）



3. B地区縄文時代調査終了時全景（南から）



1. B地区縄文時代遺物出土状態（南から）



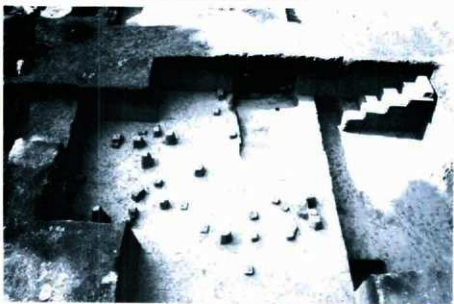
2. D地区3区縄文時代遺物出土状態（西から）



3. D地区3区縄文時代遺物出土状態（南から）



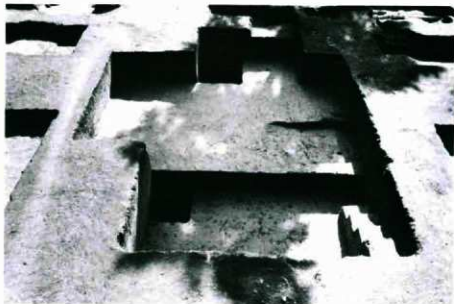
1. 石器出土状態（北から）



2. 石器出土状態（東から）



3. 石器出土状態（北西から）



1. 調査終了時全景（北から）



2. 調査区東西土層断面（北から）



3. 調査区南北土層断面（西から）

図版40 縄文土器(1)



26-1



26-2



26-3



26-4



26-5



26-6



26-7



26-8



26-9



26-10



26-11



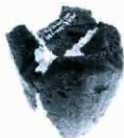
26-12



26-13



26-14



26-15



26-16



26-17



26-18



26-19



26-20



26-21



26-22



26-23



26-24



26-25



26-26



26-27



26-28



27-1



27-2



27-3



27-4



27-5



27-6



27-7



27-8



27-9



27-10



27-11



27-12



27-13



27-14



27-15



27-16



27-17



27-18



27-19



27-20



27-21



27-22



27-23



27-24



27-25



27-26



27-27



27-28



27-29



28-1



28-2



28-3



28-4



28-5



28-6



28-7



28-8



28-9



28-10



28-11



28-12



28-13



28-14



28-15



28-16



28-17



28-18



29-1



29-2



29-3



29-4



29-5



29-6



29-7



29-8



29-9



29-10



29-11



29-12



29-13



29-14



30-1



30-2



30-3



30-4



30-5



30-6



30-7



30-9



30-8



30-10



30-11



30-12



30-13



31-1



31-2



31-3



31-4



31-5



31-6



31-7



31-8



31-9



31-10



31-11



31-12



31-13



31-14



31-15



31-16



31-17



31-18



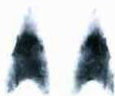
31-19



31-20



31-21



32-1



32-2



32-3



32-4



32-5



32-6



32-7



32-8



32-9



33-1



33-2



33-3



33-4



33-5



33-6



33-7



33-8



33-9



34-1



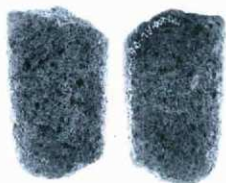
34-2



34-3



34-4



34-5



34-6



34-7



34-8



35-1



35-2



35-3



35-4



35-5



35-6



35-7



36-1



36-2



36-3



36-4



2



5



4



45



25



48



6



17



30



49



20



14



38+16



19+13



35+27



25+22



53



54

国分寺市文化財調査報告刊行目録

- 第1集 恋ヶ窪遺跡発掘調査概報 (昭和40年3月刊) 国分寺市文化財専門委員会編
第2集 恋ヶ窪竪穴調査報告 (刊行年不明) 泉町廃寺址遺跡調査団編著
第3集 武蔵国分寺図譜 (昭和46年11月刊) 滝口宏編著
第4集 武蔵国分尼寺 (昭和49年4月刊) 滝口宏著
第5集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅰ (昭和51年6月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第6集 " II (昭和51年7月刊) "
第7集 武蔵国分寺遺跡調査全年報Ⅰ (年報1974) (昭和54年3月刊) "
第8集 恋ヶ窪遺跡Ⅰ (昭和54年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
第9集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅲ (昭和54年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第10集 " IV (昭和55年2月刊) "
第11集 恋ヶ窪遺跡Ⅱ (昭和55年10月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
第12集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ (昭和56年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第13集 " VI (昭和57年3月刊) "
第14集 恋ヶ窪遺跡Ⅲ (昭和57年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
第15集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ (昭和58年4月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第16集 武蔵国分寺遺跡調査全年報Ⅱ (第1分冊 昭和59年3月刊、第2分冊 昭和57年3月刊)
武蔵国分寺遺跡調査団編著
第17集 花沢東遺跡 (昭和60年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
第18集 武蔵国分寺遺物整理報告書 一昭和三十一年・三十三年度一 (昭和60年4月刊)
日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編
第19集 武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ (昭和61年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第20集 武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅸ (昭和61年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
第21集 多摩蘭板遺跡 (昭和55年4月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著

国分寺市文化財調査報告 第22集

武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅹ

— 北方地区・リオン株式会社本館等建設に伴う調査 —

発行日	第一刷 昭和62年3月31日 第二刷 昭和62年8月31日
編著者	国分寺市遺跡調査団 ◎(団長 滝口 宏)
発行所	国分寺市遺跡調査会 〒185 国分寺市西元町1-15-15 東京都国分寺市教育委員会 〒185 国分寺市戸倉1-6-1 TEL. 0423-25-0111(代表)
印刷所	統計印刷工業株式会社
